

諸王の王朝は、アンドラ諸王の王朝と殆ど時を同うして第五世紀の初に亡べり。第四世紀及び第五世紀に、白フン人は旋風の勢を以てアジア及ヨーロッパを蹂躪せり。然れどもその印度に於ける歴史は後章に於てこれを述べん。

第十八章 建築及び技藝

今日世に存する印度建築の最古の標本は佛教時代に屬するものとす。これより先き、その建築に石材を用ゐたるものは、都市の外壁、橋梁及び堤防の類に過ぎず、王宮及び官衙の類また石材を以て建築せられたるものなきにあらざれども、この種の遺物は今日世に存せず。印度教徒はもと神殿を造營し、偶像を彫刻することを知らざりしが故に、石造の宗教的建築物は、佛教時代に至りて始めて起れりといふも不可なからん。

佛教印度に傳播するに及びて、その建築術頓に發達せり。佛教の僧尼は、その僧院制度に従ひて宏大なる僧院内に共同生活をなせしが、漸次その富と權力とを増すに及び、石材を以て僧院を建築するの風を生ぜり。僧俗の間にはまた崇拜のた

めに一堂に會するの習慣あり、次てこの習慣は石造の寺院を必要とするに至れり。加之聖場巡拜は佛教の一特徴なり、而して所謂聖場なるものは大なる墳丘にして、その周圍には精緻なる彫刻を施せる石柵あり。これ等は印度建築の發達を促したるものとす。佛教は印度教の滅ぼす所となりてより日已に久しと雖も、前第三世紀以後七百年間に成れるその墳丘、柵、寺院及び僧院は、印度建築の最好標本として今日に存す。

墳丘及柵、最古の聖場中、その最も有名なるものはバルート(Bharhut)アルラハバドとシバルプル(Sabalpur)との間にありの墳丘及び柵にして、前第三世紀の造營にかゝるものとす。その墳丘は今見るべからずと雖も、柵の一半はなほ存す。この柵はもと長さ二百七十五尺ありて、四箇の門を有し、門の梁には象、獅子、鰐の彫刻及び佛教古傳説中の光景を現せる浮彫あり、これ即ち今日世に存する印度彫刻の最古の標本に數へらるゝものとす。左にこれに關するフェルガンソン(Fergusson)博士の説を引用せん。

吾等印度彫刻の曙光をブダガヤ(Budha Gaya)及びバルートの柵(前二〇〇—二

五〇年)に見るに、その意匠全く獨創的にして、毫も外國の影響を受けたるの痕なく、少くとも印度に於て、その思想を表はし、明にその説話を傳ふるに足るものなるを見る。その巧に象、鹿及び猿の如き動物を現はせる、世界の彫刻よくこれに及ぶものなし。植物の類また動物と同く、その彫刻の精密華美稱するに足る。人物の圖また吾等の美とする所と、その標準を異にすと雖も、よくその性質を寫し、その群をなす所にありては、巧にその動作を表はせり。要するにその端正なる、その有意的なる、そのラファエル(Raphael)以前の彫刻なるに於て、世界恐らくはこれに勝るもの少からん。

次にサンチ(Sanchi)の大墳丘につきて述べんに、中央印度にボバル(Bhopal)と稱する小王國あり、その領内東西約四里、南北約三里の地に、五群乃至六群の墳丘ありて、二十五種乃至三十種の遺物を包容す。サンチの大質丘は即ちその最も有名なるものにして、その基礎の高さ十四尺、圓頂閣の高さ四十二尺、基礎よりその頂點にいたる直徑百六尺あり、その内部は堅牢にして煉瓦より成り、外部は切石を以て包まる。墳丘を繞る柵は圓形を成し、その直徑百四十尺あり、精緻なる彫刻、石の柱を連結す。

る石の横木をおほへり。墳丘に至る四箇の門は、印度建築の標本中その最も美麗なるものにして、これに關するファンガン博士の説また引用するの價值あり。

四箇の門即ちトラナ (Torana) は、その前後兩面精緻なる彫刻を以て蔽はる、而してこれ等の門たる、その後方の柵と密着して建てるが故に、その表面これがために隠蔽せらるゝことなし。その彫刻は一般に佛陀の生涯を表現す……またジャタカ (Jataka) 即ち古傳記にその材をとれるものあり、釋迦牟尼の完全なる佛陀に達するまでに經過せりといふ五百生間に起れる事實を述ぶ。その古傳記の一たるエッサンタラ (Wessantara) は、北門の下の梁の全部を占め、今日錫崙の經典に存するが如き奇異なる事實を網羅す……他の彫刻は包圍、交戦及び勝利を表現し、また他の彫刻は男女の嚙飲及び戀愛の狀を描寫す。

サンチの大墳丘は阿輸迦大王の世に築かれたるが如し。されどその柵は年と共に加へられたるものにして、その誌銘によるも、幾多の篤信家の寄進にかゝると明かなり。而してその門は第一世紀に建てられたるものなりといふ。

最後にアマラプラチの墳丘につきて述べんに、この地はもとキストナ河口の附近

にあり、アンドラ國の首府としてその名を知らる。而してその墳丘は第四世紀に屬すといふ。

中央の墳丘は今見るべからず、然れどもその柵なほ存し、裝飾を以て填めらる。外柵はその圓徑百九十五尺、内柵は圓徑百六十五尺、その間には勤行行列に用ゆる通路あり、外柵の柱脚は動物及び童子の腰線を以て飾られ、その内側は更に精緻なる彫刻を施さる。内柵は佛陀の生涯或は古傳記中の光景を表はし、その彫刻また精緻を極む。

この外、印度には墳丘及び柵の見るべきもの少からず、然れども己にバルート、サンチ及びアマラプラチの標本を見れば、佛教時代の墳丘及び柵の一般を知るに足る。寺院 佛教寺院の特色は、その岩を鑿ちて造りたるものなるにあり、ヨーロッパ寺院の外観は高尚にして、一見その特異を知るに難からざれども、佛教の寺院はもと岩を鑿ちて造りたるものなるが故に、その正面を除けば外観なるものを有せず、その彫刻及び内側の結構を知らんとするものは、必ずその洞穴に入るを要す。

佛教寺院の今日に存するもの、十中八九はホームベイ領にあり、これその寺院を鑿

つに適せる岩のポムベイ領に多きによる。

西部ガトには西紀前に成れる五箇乃至六箇の寺院あり。この洞穴に遊ぶものは、その石材建築の漸次木材建築の風を帯びきたれるを見るべし。前第三世紀に屬するバシヤ(Bhaja)の洞穴の柱の著しく内方に傾ける、洞穴の梁に支へらるゝ、皆これ木造の屋宇に見る所なり。

前第一世紀に建てられたるカルリ(Karli)〔ポムベイとプナ(Puna)との間にあり〕の寺院は、この種の建築中最も完全なるものなり。ナルガソン博士いはく、この寺院は上壇或は半圓頂閣に限らるゝ本堂及び側堂より成り、その結構甚だ初期の基督教寺院に似たり。その内部は奥行百二十六尺、幅四十五尺七寸あり……本堂と側堂との間には、三方に各々十五本の柱ありてこれを分ち、その柱は各々高さ柱脚、八面體の柱身、富瞻なる彫刻を施せる柱頭飾を有す。柱頭飾の上には二頭の象あり、各々跪きてその背に男女の像を載す。されど時には女像のみなることあり。要するにこの種の裝飾としては他に勝るものとす。而してその上には一般に半圓形の屋根あり……内部は實に莊嚴雄偉にして、光線を入るゝの方法また完全

なり。光線の内部に入るものは高さ一箇の窓よりし、四方に散ずることなく、直接に祭壇或は他の重なる場所を照し、他の場所をして比較的暗黒ならしむ。加之側堂と側堂との間には密接して立てる圓柱あるを以て、その投射益々有效なるを致すと。

佛教寺院の建築は、第一世紀の頃已にその完全に達し、その後また改良せられず、たゞ益々修飾的となれるのみ。後代の佛教寺院に見るが如き佛教は、その形式甚だ第六世紀以後の印度教に以たり。

僧院 佛教の僧院はその寺院の如く、また岩を鑿ちて造りたるものとす。その最初期の洞穴は規模極めて狭小にして、僅かに一隱者のその中に匍匐し、黙想に日を送るが如きものなりしが、その後僧房及び會堂を有する大僧院成るに至れり。

オリッサには虎洞の如き小洞穴のものあり、而してその虎洞の名あるは、その門、猛虎の口を開きたるの状あるによる。然るにその後また大洞窟の岩に鑿たるゝあり。而してこれ等大小の洞穴は、皆ウダヤギリ(Udayagiri)、カンダギリ(Khandagiri)の二丘に散在し、前第一二世紀の頃に成れるものなりといふ。

ボムベイ領の聖市ナシタ(Nasik)には、主なる僧院三あり、ナハバナ(Nahapana)ガ
 ウタマブトラ(Gautamaputra)ヤンヤスリ(Yadyasri)の僧院これなり。ナハバナ僧院
 の誌銘によるに、これ第一世紀の頃に統治せるシー王朝の祖ナハバナの義子の造
 りたるものにして、その中央には四十尺平方の堂あり、三方には十六箇の僧房、他の
 一方には六本柱の廊下あり。ガウタマブトラの僧院は、第三世紀の頃、アンドラ王
 ガウタマブトラの建つる所にして、その結構全く前者に同じ。ヤズヤスリの僧院
 は第五世紀に屬し、六十尺に四十五尺の堂及び二十一箇の僧房あり、またその聖殿
 には、彫刻を施せる二本の柱と、多數の從者を隨へたる佛陀の巨像とあり。

然れども佛教の僧院中最も興味あるものはアジエンタ(Ajanta)の洞穴なり。この
 洞穴は第五世紀に屬するものにして無比の價值を有す。これ他の僧院に見るべ
 からざる一種の壁畫を有するによる。

アジエンタの第十六號の僧院は、廣さ六十五尺、長さまた六十五尺ありて二十本の
 柱を有す。その兩側には十六箇の僧房あり、中央には廣大なる堂あり、前面には廊
 下、後面には聖殿あり、壁は皆佛陀の生涯或は尊者の古傳記中の光景を表はせる壁

畫を以て蔽はる。その圖は自然に適合し、人物の顔は愉快にしてその感情を表は
 し、畫中の女子また温良優柔、よく印度美人の特色を現はせり。然れども近來これ
 を謾寫するために彩色を加ふるあり、且つイキリヌ遊歴者の疎放なる、これを破毀
 して顧みざるの風あるを以て、印度繪畫の好標本たるこの壁畫も、これがために汚
 されたること少からず。

印度人は技藝を賤むの風あり、故にその建築彫刻及び繪畫を以てギリシア人に
 比するに、到底その敵にあらず。その種姓制度は智者天才を技藝界より奪ひ、一切
 の手工を以て劣等なる種姓に屬すとせり。その製作偶々巧緻なるものなきに
 あらざれども、一としてギリシア技藝の高尙なる審美學的性質を有するものなき
 はこれによる。蓋しプラクシテレス(Praxiteles)或はフイデアス(Phidias)は、印度
 の劣等なる階級のよく生む所にあらざるなり。

第十九章 風俗及び法律

理論時代の印度人が、その社會生活の律を編纂してダルマーストトラとなせるは

前に述べたり。然るに佛教時代の印度人は、スートラ即ち格言體を棄て、流麗なる韻文體を取り、古來のマヌの法典を改作して、當時の習慣に適合せしめたり、これをダルマ・サストラ (Dharma Śāstra) といふ、法律の義にして、實に印度の標準的法典なり。

新種族の印度化してその社會の分子たるに及び、印度の種姓は頓に増加せり。而してマヌはまたスートラの筆者の如く、婆羅門、刹帝利、吠舍、戌陀羅を以て世界種族の根原とし、新たに印度社會の分子となれる種族の起原を説明するにこの原則を用ひ、チンダラ、カイバルタ及び印度化せる他の土蕃を以て四姓の雜婚にいてたりとせり。加之外國の民その眼界にきたるに及び、またその原則を擴張してその上に及びし大膽に説きていはく、南部印度の達羅毘陀人、カブル人、バクトリアのキリシヤ人、ツラン人、ペルシヤ人及び支那人は、刹帝利の墮落せるものなりと。

種姓の原則の妄に擴張せられたることかくの如し、然るにその實際に行はるゝや、大に智識の進歩及び技藝の發達を阻害せり。當時種々の産業は舊によりて吠舍及び戌陀羅に屬せしが、その階級甚だ蔑視せられたるを以て更に振はず。而し

てこの種の弊風は、中古ヨーロッパに於てまた見る所なれども、ヨーロッパの技藝家及び農夫は、數百年の後、奮然奴隸の境遇を脱せり。獨り印度に於ては、種姓の制度をの暴威をふるひて遂に今日に及びたりき。

マヌの法典中、國家の統治に關するものは見るに足る。これによるに、政府はその歳入を國王の所領に仰ぎ、課税によりてこれを填補す。家畜の繁殖及び金の増加には百分の二の税を課し、地租としては土地の産物の百分の六、八、或は十二を徴し、また鑛山、製造場及び倉庫の利益を收む。而してメガステネスのいふ所によれば、都市村落には官吏ありてこの種の歳入徴收に任じ、農業、商業及び製造を獎勵せりといふ。マヌまたこれに附加していはく、國王は一ヶ村の長、十ヶ村の長、二十ヶ村の長、百ヶ村の長、千ヶ村の長を任命すと。而してこれ等の官吏の義務は、犯罪を禁じ、住民を保護するにあり。然れども印度には古來より一種の村落組合ありて、村民間の爭論を裁決し、その部内の事件を處理し、近來に至るまで論らず。その間もとより王朝の亡ぶあり、首長の倒るゝあり、國內の形勢舊の如くならずと雖も、この組合制度は獨りその瓦解を免れ、よくその命脈を維持したるものとす。

農業及び技藝の古代に發達せることは、ギリシア人の記する所によりて知るところを得。メガステネスはいはく、印度には肥沃なる大平原多く、河流縱横にその間を流る。加之土地の大部は灌漑の便に富むが故に、一年に二種の禾穀を生ず……穀物に加ふるに、許多の稷は河流に富む印度の全部に産し、また種々の豆、米及びホスポルムと稱する植物あり、食用に供する他の植物また多く野生す、動物の食料に適する他の産物に至ては枚擧に遑あらず。故に印度には決して飢饉の憂なく、また食物の供給に一般の缺乏を感ずるが如きことなしといふも不可なしと。

メガステネスはまた印度の風俗につきて説く所多し。而してその所謂七姓は容易に印度の四姓に當つることを得。その哲學者及び助言者は即ち婆羅門の二階級にして、宗教を學ぶものと政府に立つものといふのみ。その農夫、牧人及び工匠は、耕作、牧畜及び製造に従ふ吠舍及び成陀羅なり。而してその兵士は刹帝利にして、その監守は國王の侍僕をいふに過ぎず。

印度の教育制度は前已に述べたり、その男子幼にして父母の膝下を辭してグルの家に寓し、その學成りて家にかへり、妻を迎へ、一家を管理することまたこゝに説

くを要せざるべし。而してメガステネスの言ふ所またこれに同じ。いはく、兒童は多年師の監督を受く、而してその後の師は、學問識見前の師に勝る……三十七年間修學の後、各男子はその家にかへり、平和なる生活を送り、美麗なる麻紗を纏ひ、その指及び耳に金の裝飾を着け、且つ肉を食ふ、然れども平生使役する動物の肉を食はず、また羔の類を禁ず。多數の妻を迎へ、子の多からんことを願ふと。

メガステネスはまた印度人民の裝飾を好むことを述べていはく、その風俗の一般に質朴なるに反して、彼等は裝飾を好み、その上衣に金細工を施し、寶石を装ひ、また花を飾りたる麻紗の衣服を着くと。ストラボ(Strabo)また印度の華美なる宗教的祝祭に關する記事あり、由て以てその風俗と技藝の進歩とを知るに足る。いはく、その祝祭の行列には金銀を以て飾れる許多の象あり、四頭の馬及び數頭の牡牛數十臺の車を牽き、これに従ふもの、盛裝せる隨從の一隊あり、黄金の皿、鉢、オルグ、ア(Organ)寶石を飾れる卓子、椅子、印度銅の酒杯及び洗盤、金の刺繡を施せる衣服、水牛、豹、獅子、羽毛或は音聲の美なる無數の鳥をさしぐと。

然れども、この種の行列は佛教徒の例をひらきたるものにして、以前には人民一

般にその家の爐邊に祭壇を設け、その神及び祖先の靈を祭れり。而してマヌの説く所またスートラの筆者の説く所に同じ、たゞその異なる所はマヌの法典の往々佛教の感化を受けたる跡あるのみ。古代吠陀の信奉者たるダルマ・サストラの筆者は、佛教徒を目して不信者となし、且つ印度教徒の佛教徒に倣ひて神殿に偶像を崇拜し、祝祭を擧ぐるを責め、口を極めてその僧侶を罵れり。然れどもその抗争遂に効を奏せず、印度教は佛教の通俗なる崇拜の儀式を採用して、行列、巡禮、神殿の祭祀及び偶像崇拜その要素となり、第五世紀或は第六世紀には、古代吠陀のインドラ、アグニ、ヴルト及び他諸神の崇拜また衰ふるに至れり。佛教徒はブダ(佛)、ダルマ(法)、サンガ(僧)の三位一體を信じ、新信者皆僧侶となるに當りて、先づこの三寶にその信仰を表白するを例とす。而して近代印度教徒のブラーhma、ギンヌ及びシヴァの三位一體を信じ、これをその諸神の首位に置くはこれに同じ。

この宗教的變化は近代印度教勃興の條に説くべし。然れどもこゝに佛教が印度正教の上に及ぼせし影響を略述し、且つマヌの地位を定むること必要なり。マヌは實に古代吠陀の印度教、その神及びその儀式を主張せる最後の學者にして、近代印度教の三位一體及び偶像崇拜を認めず。然れどもその繼承者に至ては全くこれに反す。

マヌの定めたる結婚の儀式はスートラの筆者の定めたる所に同じ。寡婦の再婚は全くその禁ずる所にあらざりしも、その習慣を認めざりしは争ふべからず。而してその著述を見れば、當時再婚の風印度に行はれたるを知るべし。マヌまた女子の妙齡に達せずして結婚することを承認せり、これによりて當時一般に早婚の風ありしを知るに足る。蓋し外敵の襲來と時代の騷亂とは、有害なる早婚の風を助長せしが如し。而してこの習慣は、印度の獨立を失ふに及び、一の宗教的義務となれり。寡婦の焚死を認むるサチの儀式に至ては、マヌの法典に何等の記する所なし。

マヌの法典は全部十二卷あり、二千六百八十五の對句より成る。而してその七百五十六の對句より成る二卷は、通常世にいふ法律を包含し、今日なほ印度裁判官の典據として尊重する所のものなり。マヌは當時の法律を十八部に分たり。

- 一、 負債
- 二、 供托
- 三、 所有者なき物品の賣却
- 四、 組合
- 五、 贈與取戻
- 六、 貸金不拂
- 七、 約定不履行
- 八、 賣買禁止
- 九、 主僕
- 十、 境界の紛争
- 十一、 脅迫
- 十二、 誹謗
- 十三、 竊盜
- 十四、 強盜
- 十五、 姦通
- 十六、 夫妻
- 十七、 相続
- 十八、 賭博

以上の法律は詳かにこれを述ぶるの必要なを以て、こゝにはたゞ當時の風俗を明にする二三の事實を述べし。負債に關する法律によるに、債務者は抵當を有する場合に限り、債權者に一年一割五分の利子を拂はざるべからず、而して時には女子の奴隸を抵當とすることを得。主僕の部の一條項によるに、當時印度の都市村落の周圍には皆共有の土地あり、その牧畜に用ゐられたることヨーロッパに同

じ。されど所有者の貪慾と地價の騰貴とのために、この種の土地は殆ど全く消滅せり。

村落の境界を表はすものは、一般に有名なる樹木、水槽、泉の類にして、往々石及び骨を地中に埋めて土地を劃す。若し村落間に境界の争あり、國王これを定むること能はざるときは、自らその所領を割きてその一方に與へ、これを調停す。

脅迫及び一般刑事上の犯罪を罰するには、種姓の區別を基礎とすること從來の如し。

夫妻に關する法律は、未婚寡婦の結婚を許せども、既婚寡婦の再婚を認めず、されど、寡婦再婚の佛教時代に行はれたること勿論なり。

相続に關する法律は、マヌの法典中最も重要なものなり。これによるに、兄弟は父の財産を分配せられ、或は依然父の家に同居す。家に若し男子なきときは、父はその女の子を養ひて相続者となすことを得。而して相続者と認めらるゝものに十二種あり、然れども正妻の生めるものゝみ實子とせられ、他は實子なき場合に限り、家を繼ぐの權利あるのみ。現今印度の習慣と法律とは、實子或は養子を除き

て他の相續權を認めず。

マヌはその法典に別に一章を設けて刑罰を説けり。これによるに婆羅門を殺すもの、酒を飲むもの、婆羅門の黄金を盗むもの、グルの妻を惑すものは重罪にして、その共謀者またこれに同じ。而してその輕罪中には、鑛山業、製造業等に從はしむるものあり、以てマヌのこの種の職業を蔑視せるを見るべし。

第二十章 科學の進歩

バラサラ及びガルガは最初期の印度天文學者にして、前者の叙事詩時代に在世せることは前已に述べたり。されど、その著述と稱せらるゝバラサラ・タントラは明かに佛教時代に屬す。この著述は概して散文より成り、韻文より成るものゝ如きはその一部に過ぎず。中に印度の地理に關する一章あり、西部印度に於けるヤブナ人(バクトリアのギリシア人)の事を記す。由て思ふにこの著述の成れるは前第二世紀の頃ならん。

ガルガの生涯はバラサラに比すれば稍々明かなり。ガルガは前第二世紀にヤ

ブナ人の印度に寇せることを述べ、且つその學者を稱揚していはく、ヤブナ人は蠻人なり、然れどもその天文學は大に見るべきものあり、故に彼等はリシ(Rishi)〔賢者〕と稱せらる。婆羅門にしてこれに勝るの天文學者ありやと。その著述の歴史の部には、マガダのシスナガ王朝及びマウリア王朝に關する紀事あり。阿輸迦大王より第四代の王サリスカ(Saliska)につきていはく、慄悍なるギリシア人はサケタ(Saketa)〔オウド〕パンチアラ及びマツラを從へ、然る後クスマドブジ(Kumadhvaj)〔バトナ〕に到らん。プシバプラ(Pushpapura)〔バトナ〕はその奪ふ所となり、諸州紛々として亂麻の如きものあらんと。ガルガまたいふ、慄悍なるギリシア人は中部に安んぜず、必ず互に相食まん、而してその亡びたる後、有力なる七王オウドに統治せんと。加之そのいふ所によれば、ギリシア人の後、凶暴なるサカ(Saka)人有力となれりといふ。このサカ人は、前一二六年の頃、始めてバクトリア王國を滅ぼし、印度にいりきたれるツラン種なること明けし。

印度の操觚者多くは國外の事をいはず、外敵襲來の際、なほ外人の動靜に筆を着けたるもの稀なり。故にガルガのギリシア人及びツラン人に關する紀事は、サシ

スクリット文學の一異彩にして、またその著述の前第一世紀に成れるを證するものとす。

他の天文學上の著述にしてまた佛教時代に成れるものあり、然れども概して世に傳はらず。印度操觚者の説によるに、當時十八種のシダンタ〔天文學上の著述印度にありきといふ〕。

- | | | | |
|-----|-----------------|-----|---------------------|
| 一、 | バラサラ | 二、 | ガルガ |
| 三、 | ブラーマ | 四、 | スリア (Surya) |
| 五、 | ギアサ (Vyasa) | 六、 | ブシシタ |
| 七、 | アトリ (Atri) | 八、 | カシアパ (Kasyapa) |
| 九、 | ナラダ (Nārada) | 十、 | マリチ (Marichi) |
| 十一、 | マヌ | 十二、 | アンギラム (Angiras) |
| 十三、 | ロマカ (Romaka) | 十四、 | プリサ (Pulisa) |
| 十五、 | チャブナ (Chyavana) | 十六、 | ヤブナ |
| 十七、 | ブリグ (Brigh) | 十八、 | サウナカ (Sannaka) 或はソマ |

されど以上の著述多くは亡びて世に存せず、偶々存するものは近代の改作のみ。而してそのブラーマ、スリア、ブシシタ、ロマカ及びプリサは、有名なるブラハミヒラ (Varahmihira) の著述中に收めらる。この著述に關しては後章に説くべし、故にこゝにはたゞ五種のシダンタに關して數言を費せば足る。

ブラハミヒラは第六世紀にブラーマシダンタをその包括的著述に收めしが、他の天文學者ブラーマグプタ (Brahmagupta) はまた第七世にこれを改作し、殆ど全く佛教時代の原著を一變せり。

スリアシダンタは、印度の天文學的著述中その最も有名なるものにして、ブラハミヒラ始めてその原著をその包括的著述に收め、後の天文學者またこれを改作せり。されど今日世に存するものは原著の嫡流にして、全部十四章に分れ、遊星の位置、太陽及び太陽の運行、天文學上の機械の構造、時間計算の方法等を論ず。

ブシシタシダンタは後代の天文學者ギシヌチャンドラ (Vishnu Chandra) の訂正せるものなり。その後一種の偽作世に現はれ、今日に傳ふ。

ロマカシダンタは、ブラーマグプタの説によるにスリセナ (Srisena) の作なりとす。

ふ。今日世に存するものはその偽作にして、中に基督の運命と星との關係を説けるものあり、且つ印度のモグル帝バベル(Baber)及びアクバル(Akbar)に關する紀事を包含す。

プリサシダンタは、エーベル(Weber)教授の説によるに、パウルス・アレクサンドリヌス(Paulus Alexandrinus)の著述をサンヌクリット語に翻譯せるものなりといふ。ケルン(Kern)博士は頗るこれを疑ひたれども、なほプリサのギリシアの天文學的著述に關係を有することを信ぜり。

以上はバラサラ及びガルガの後世にいてたる佛教時代の名著にして、その成れるは畧ぼ第一世紀と第三世紀との間にありとす。

印度の醫學は、前第四世紀にギリシア人の印度に來れる頃、已に著しき進歩をなせり。アローリアンの引用せるネアルコス(Nearchos)はいはく、ギリシアの醫師は蛇に噛まれてその毒を感じたるものを治するの術を知らず、然れども印度の醫師はよくこれを治すと。アローリアンもまたはいはく、ギリシア人若し不快を感ずれば、その詭辯學者(プラーマン)をいふに治療を求む。而して詭辯學者は不可思議の手段

を以てその病を治すと。

醫學は印度にてこれをアユル・ヴェダといふ、然れども不幸にして西紀前の著述世に傳はらず。今日世に存する最古の醫書は、チャラカ(Charaka)及びススルタ(Susruta)の著述にして、その成れるは佛教時代なるが如し。

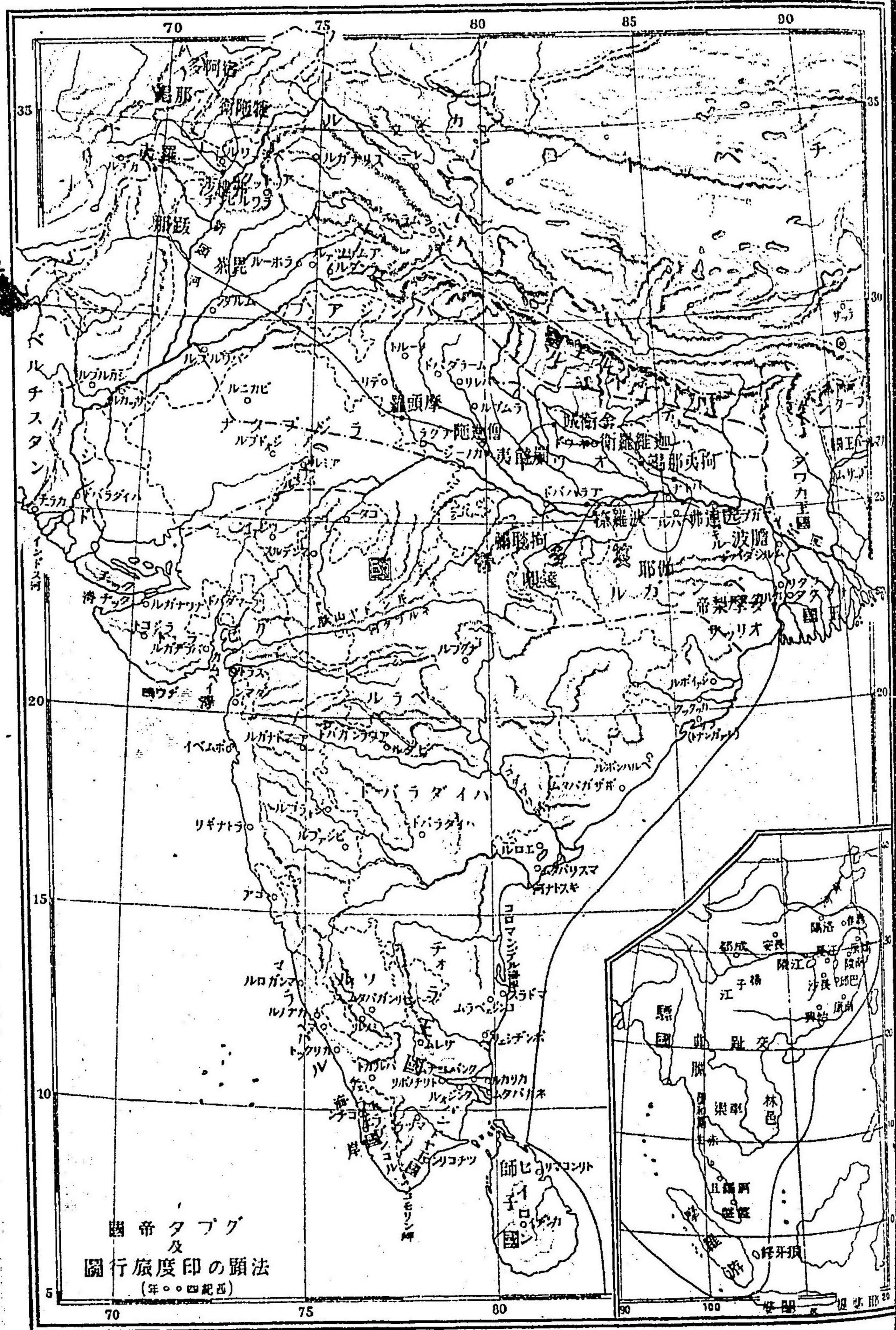
チャラカの著述は、主にも藥劑を説き、ススルタの著述は主として外科に關す。その説奇怪なるもの多く、近代の醫學者より見れば一笑に値せざるものあり。然れどもその包括的なる、解剖學、藥劑學及び化學に關する智識の精密なる、三千年前の製作としては歎賞するに足る。

チャラカの著述は八篇より成り、藥劑、疾病、疫病、靈魂の性質、官能、肉體及びその病患、吐劑、下劑、解毒劑等につきて論ず。

ススルタの著述は六篇に分れ、外科術、疾病の徵候、肉體の構造、春期、負傷、潰瘍、折骨、産科術、解毒劑等を論ず。

ロイル(Boyle)博士の説によるに、印度人は古代より藥劑に金屬を用ひ、銅、鐵、錫、鉛の酸化物、鐵、銅、安質母尼、水銀及び砒石の硫化物、銅、亞鉛及び鐵の硫酸鹽類、及び鐵、鉛

第五圖



の炭酸鹽類を知れりといふ。博士いはく古代のギリシア人及びローマ人は種々の礦物を外藥に用ゐたれども始めてこれを内藥に用ゐたるものは一般にアラビア人なりと想像せらる。然れども古代アラビア人の就いて學べるチアラカ及びビスルタの著述には、内藥に用ゐらるべき無数の礦物を説けるを見るべしと。

印度の植物は殆ど無限なり、而してその最古の著述に於ける藥劑の智識はこれに伴ひて廣し。然れども一層顯著なるものは外科の智識なり。ロイル博士のいふ所によれば、チアラカ及びビスルタの著述には、外科に用ゆる機械百二十七種以上を記述せりといふ。以てその進歩を想見するに足る。

アラビア人は夙に印度醫學の感化を受け、セラピオン (Serapion)、ラゼス (Rhazes) 及びアビセンナ (Avicenna) はチアラカを引用せり。有名なるハルン・アル・ラシド (Harun-al-Rashid) また第八世紀に印度醫師マンカ (Manika) 及びサレー (Saleh) を擧げてその侍醫となせりといふ。

第五期 プラナ時代 (カノウツジ及びウツジアインの隆盛) (四〇〇年より八〇〇年に至る)

第二十一章 カノウウジ及びウジアイン

叙事詩時代に始めて文明の域に進みたるは、ガンガ河の上流に於ける、クル(Kuru)族及びパンチャラ (Panchala) 族の土地なり。クル族及びパンチャラ族の土地は、マガダの勃興以後政治上の権力と緊要とを失ひたるも、尙純アリア族印度人の郷土として特別に神聖視せられたりき。然るに摩揭陀の衰ふるに及び、漸次其昔日の勢力を恢復し、カノウウジのグプタ家の歴史と共に一新時期生まれり。

グプタ王朝の始めて北印度に統治したるは西紀第四世紀にして、其第三王チアンドラグプター一世は、ヴィクラマデチア (Vikramāditya) と稱せり、此稱號は其後他諸王の用ゐたるものとす。チアンドラグプタの子サムドラグプタ (Samudragupta) は、權勢一代を傾けし有力者にして、アルラハバドの石柱誌銘によれば、其北印度の諸王を征服したること、ベンガル、ネバル及びアッサムの如き邊境諸王國の臣禮を執り、若しくは貢税を納めたること、西方諸王國のシアー及び錫崙諸王の方物を送りたること明かなり。

サムドラグプタに繼ぎたるは、チन्द्रドラグプタ二世なり、王は西紀第五世紀に統治し、其祖父に倣ひてギクラマヂチアと稱せり。チन्द्रドラグプタ二世の位を退くに及び、クマラグプタ(Kumargupta)是に繼げり。最近の發見にかゝるクマラグプタ時代の一誌銘によれば、マラバ(Malava)紀元の四百三十九年に一殿堂の建立せられたることを以てす。而して此マラバ紀元が前五四年に端を發すること及び其印度に於て一般にギクラマヂチアのサムヴト(Samvat)紀元として知らるゝものと同なることは充分信すべき理由あり。

クマラグプタに繼ぎたるは有力なるスカンダグプタ(Shandagupta)なり。スカンダグプタ時代の一誌銘によれば、其領地は海に至り、其名聲ムレシカ(Mlechha)(外國人)にすら知られたり。スカンダグプタは四六〇年の頃より二十年間統治し、グプタ王朝最後の大王主たり。スカンダグプタの後、ブダグプタ(Budhagupta)及びバヌグプタ(Bhānugupta)を経てグプタ王朝亡びたるが如し。

グプタ王朝滅亡の原因につきては種々の臆説あり、然れども白フン(Hun)族の侵略が其滅亡を促したりと云ふもの眞に近きが如し。フン族の諸方を征服して中

央印度に至りたるは疑ふべからざる事實にして、第六世紀に在せしコスマイインヂコブレウステス(Cosma Indicopleustes)の記する所によれば、フン族はブレウステスの時代に其權力をブンシアブに振ひ、尙ほ印度に於ける一強國民なりき。

されどグプタ家のカノウジ及び北印度に統治せし頃、有名なる支那の旅行者法顯印度に至れり。故を以て此處には第五世紀の印度の狀態に關する法顯の忠實なる紀事を引用すべし。法顯はジムナ河岸のマツラにて佛教の隆盛なりしを見且つ當時マツラには僧院二十、僧侶三千ありきといふ。マツラの南にガンガ河の流域マドヤデサ(Madhyaadesa)〔印度の中部地方〕あり。法顯いはく、此地方の氣候は一般に溫暖にして霜雪の降ることなし。人民は人頭税を課せられ若しくは官吏の束縛を受くることなく、甚だ幸福なる生活を送れり。唯王家の土地を耕すものは、其收益の一分を是に償ふのみ。行かんとすれば行き止まらんとすれば止まり、毫も自由を害せらるることなし。國王は其人民を治むるに體刑を用ゐず、罪人はみな過料に處せらる、過料は其情に従ひて輕重あり。再度叛亂を企てたるものすら唯其右手を切らるのみ。國王の左右にありて護衛の任に當る侍者は一

定の俸祿を受く。此地方の人民は擧げて殺生若しくは飲酒せず、チャンダラ (Chandala) を除きては萌若しくは葱を食はずと。

法顯は次いでカノウウジに歸りしも、其二僧院に關するものを除けば、カノウウジに關して記事の見るべきものなし。法顯は釋迦一生の事蹟と關聯する矯薩羅及び摩揭陀の聖場に至れり。パトナにては王宮の建築の莊麗と彫刻の美麗とに一驚を喫したりといふ。かくてガヤ、王舍城 (Rajagihā) 及びチャムパ (Champa) に遊び、然る後遂にベンガルに至り、佛經を謄寫するため二年間タムラリプチ (Tamilaput) に留まれり。

次いでタムラリプチより錫崙に赴き、更に舟に乗じて耶婆提即ちジャブ (Java) に寄航し、次いで支那に歸れり。此紀事によりて印度人が第五世紀に其船に乗りて航海したること、並びにジャブに印度教を傳へたることを知り得るは甚だ興味あることなりとす。

グプタ家の滅亡後、印度の歴史に記すべき次の國王は有名なるウジャイン (ウジャイン (Ujjain)) のギクラマデチアなり。王は國民的大戦争の勝利者、近代サンスクリット

文學の保護者、無限なる古傳記の主人公として、其印度人に於けるは猶ほシャレーマ (Charlemagne) のフランクス人、アルフレッド (Alfred) のイギリス人、阿輸迦の佛教徒、ハルン・アル・ラシド (Harun-al-Rashid) のイスラム教徒に於けるが如きものあり。印度のあらゆる國語にて書ける傳奇的小説は、ウジャインのギクラマデチアのために世にいて、印度の村民は今日に至るまで蕪穢たるペブル (Peepul) 樹の下に集まりて、此大英雄の物語を聞くを樂めり。

是の如く古傳記及び物語の其數を増したるがために、ウジャインのギクラマデチアの眞歴史明かならず、其時代と其事蹟との如きも、歴史家及び古學者の議論紛々として未だ一定せず。ギクラマデチアの名は前五六年に其端を發するサムプト紀元に關聯するを以て、學者は一時ギクラマデチアが前第一世紀に在世したることを想像せり。或は西紀第四、第五兩世紀にギクラマデチアと稱せしグプタ王朝の諸王以外、別にウジャインのギクラマデチアの存在せしことを疑ひたるものありき。

然れども吾人は此議論に與みすること能はず、何となればウジャインのギクラマデ

チアが第六世紀に在世したること及び其時代に盛名ありし詩人文士の今日尙ほ印度にて愛讀せらるゝ著述を遺したることは、道理上疑ふことを得ざればなり。此論斷の主なる論據は畧言すれば次の如し。(一)カシミルの印度歴史家は、七八年以後印度に君臨せし迦膩色迦王とウジインのギクラマデチアとの間に三十王ありとせしが、是れギクラマデチアの第六世紀に統治したることを證するものなり。(二)第七世紀に印度に至りし支那の求法僧玄奘はシラデチア(尸羅阿迭多(Siladitya)一世を以て五八〇年の頃に統治したりとなし、毗訖羅摩阿迭多を以て直に其前に置けり。故に是より來る斷案は前に同じ。(三)ギクラマデチアの殊寵を得たる九文人の一人として有名なる天文學者ブラハミヒラ(Varahmihra)は五〇五年と五八七年との間に在世し、吾人に其著述の年月を遺せり、吾人は是によりてギクラマデチアの時代を知るに難からず。(四)また是等九文人の一人カリダサ(Kalidasa)は明かに第六世紀に成れる其著述を遺せしが、其内容と文體とを見れば、到底前第一世紀に成りたるものと云ふこと能はず。

吾人が歴史上ギクラマデチアにつきて知り得ることは、外國の侵略者を撃退し

て其王をムルタン附近のコルル(Korur)に殺したることのみ。是に於て外國の侵略者また印度に來らず、北印度の全部は、ギクラマデチアの光明あり精神ある支配の下に屬せり。平和的技術は榮え、科學及び文學新に興りて、詩歌及び戯曲の光は印度史上に於けるアウグスツス(Augustus)時代を照せり。宗教は氣力と生命とを増し、ギクラマデチアの保護を得て近代印度教隆盛に赴けり。

善次の王シラデチア一世は玄奘のいふ所によれば、大に佛教に歸依せることは、猶ほギクラマデチアの印度教を尊崇せるが如きものありきと。然れども佛教徒と印度教徒とは印度に於て數百年間活動的對抗をなせしことなく、國王の如きも交もく、佛教若しくは印度教を愛し、其僧侶に贈物をなし、父子兄弟の間屢、其信仰を異にせり、故を以て阿輸迦の時代より一千年の間、兩教の教徒は北印度に相並びて生活せり。此事たる實に宗教的寛容の顯著なる例にして、世界の歴史に殆ど其比を見ざる所なり。

シラデチア一世に繼ぎたるはブラバカラ・バルダナ(Prabhakarā-Vardhana)王にして、ブラバカラ・バルダナに繼ぎたるものをラシヤ・バルダナ(Rajya-Vardhana)王とす。而

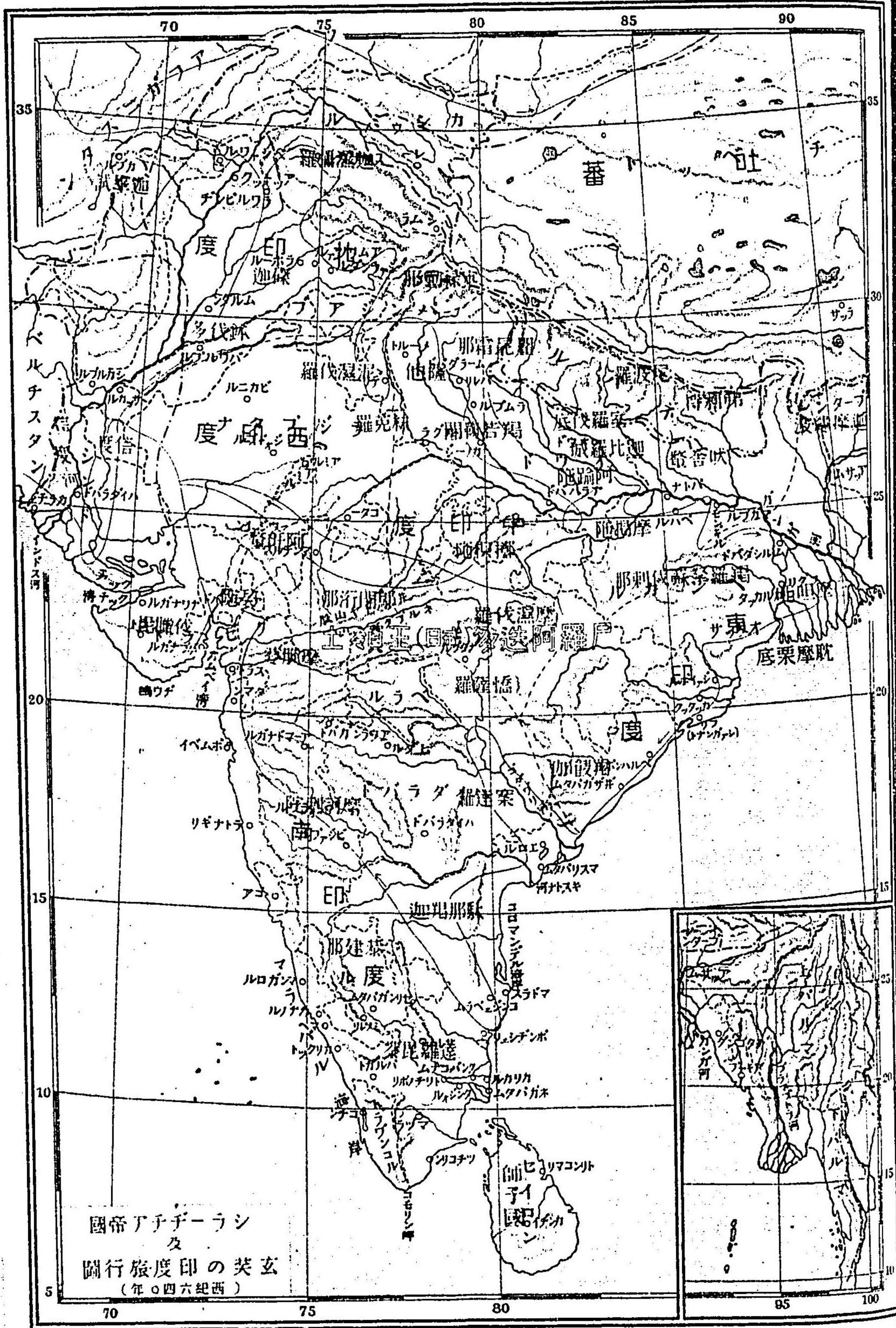
してラジャプルダナ王はベンガルとの戦争に敵の殺す所となり、ハルシアプルダナ(Harsha-Yardhana)王是に繼げり。ハルシアプルダナはシラヂチア二世と稱し、六一〇年より四十年間統治せり。

シラヂチア二世は二たび北印度を征服して其全部に君臨せしも、南印度のマールタ族を降すこと能はざりき。シラヂチア二世は佛教を信じ、盛大なる式を以て毎五年に佛教の祭典を舉行し、北印度の諸侯伯を招けり。當時カノウジは再び印度の首府たりしが、支那の求法僧玄奘は其大祭典の一つに臨めり、此大祭典には二十の侯伯北印度の諸所より來りたりといふ。

當時カシミルは尙ほ迦膩色迦のために著名なりしが、玄奘は迦膩色迦王の開きたる佛教會議につきて記せり。マツラは盛大なる一市府にして市中に佛教の僧院多く、其佛教の祭典に就きて玄奘の記する所に曰く、佛教徒は其寶玉を以て飾れる旌旗を翻し、美麗なる涼傘の群集恰かも網に似たり。薰香の煙は雲中に起り、花は雨の如く四方に布き、日月是がために蔽はるゝこと猶ほ雲に蔽はれたるが如しと。

ガンガ河の源に近きハリドプラ(Haridvra)は印度教徒の大巡拜場なりしこと今日に異らず。カノウジは盛大なる一首府にして長さ一里半あり、繞らすに濠を以てし、高塔天を突きて相對せり。氣候は溫和にして健康に適し、敦厚誠實なる人民は幸福なる生活を送り、一般に學問を尊重せり。佛教徒と印度教徒とは殆ど其數を同うするも、其間相反目するが如きことなく、佛教の僧院百、印度教の殿堂二百ありき。

シラヂチア二世の諸侯伯及び諸國民を集めて佛教の大祭典を舉行したる場所はカノウジなり。カノウジには高さ百尺の塔あり、其附近の佛教寺院には金像を安置す。塔より國王の宮殿に至る道には樂人のために設けたる假屋及び會合所あり。美服を着けたる一頭の象は、日々其背に小佛像を載せて嚮導し、シラヂチア王自ら五百頭の象を率ゐて右に進み、祭典に招かれたるアッサムの王はまた同じ數の象を率ゐて左に進めり。眞珠、寶玉、金銀の花は四面に散ぜらる。シラヂチアは偶像を洗ひて然る後、是を肩上に載せ、佛教の僧侶及び波羅門は此祭典に響應を受け、毎日學問上の議論をなして散ぜりと。



以上の紀事は佛教の已に偶像崇拜及び祭典の宗教となりたることを證するものなり。而して後代の印度教徒は佛教より此風を採用したりき。

プラヤガ (Prayaga) [今のアルラハバト] は印度教の聖市にして、印度教徒のジムナ河及びガンガ河の會流に死せんがために來るもの夥し、蓋し是によりて罪業を滅ぼし、天上に生れんとするなり。マナレスはまた印度教徒の聖市にして、市中にはマヘスワラ (Maheshwara) のために建立したる印度教の殿堂百あるも、佛教の僧院とは僅かに三十あるに過ぎず。

摩揭陀は衰微し、首府には住民少かりしも、内部の諸市街には尙ほ人口繁殖せり。バトナ [バタリプトラ (Patliputra)] は佛陀の時代に阿闍世王 (Ajatashatru) の開きたる所にして、旃達羅笈多以後印度の首府なりしも、昔日の繁華今また見るべからず、而してラジプーリ (Rajagriha) もまた是に同じ。

ナランダは數百年間佛教の最大僧院及び印度大學の所在地にして、玄奘の口を極めて稱讚したる所なり。曰くナランダにては幽玄なる問答に日もこれ足らず、學者は解疑を事として朝より夕に至り、老少互に一方に聲援す。三藏 (Tripitaka) よ

り問題を解くこと能はざるものは輕侮を受け、耻ぢて自ら隠るゝの已むを得ざるに至る。是を以て學者の解疑に對して名聲を博せんと望むものは、諸方より來りてナランダに集まり、其疑を決して智慧の流乃ち深遠廣濶を致すと。

玄奘はベンガルに於いて其五王國に分立せるを見たり、即ちプンドラ(Pundra)北ベンガル]カマルン(Kamarupa)「アッサム」]サマタタ(Samatata)「東ベンガル」]カルナスヴルナ(Karna Suvarna)「西ベンガル及ビタムラリプチ」]南海岸]是なり。次いで玄奘はベンガルよりオリッサに赴きしが、オリッサは文明の程度低く、其人民は北印度のサンスクリット語と異なる言語を用ゐたりといふ。

玄奘次いでカリンガ(Kalinga)族及び是より先き四百年間印度に權力を振ひしデカン(Dekhan)のアンドラ(Andhra)族の國に至り、有名なるアマラプチ(Amaravati)の墳丘を見て更に南し、遂に有力なるドラヴィダ(Dravidā)族の首府カンチ(Kanchi)「今のコンジエラム(Conjevaram)」に至れり。

是に於いて玄奘は更に北方に向ひて勇敢なるマールタ族の國を旅行し、其種族の性格を記していはく、恩人に厚く、敵に残忍なり、若し辱めらるれば復讐のために

其生命を擲つて厭はず、若し他の災厄に遭ひて助を求むるものあれば是に赴くの急なる己を忘るに至るべしと。

玄奘はマラタ國の東境にて有名なるアヂヤンタ (Ajanta) の洞窟を見、次いでギタラマデチアの王國マラヴに至れり、マラヴの人民はマガダの人民と共に、學問上最高の地位を占有したりき。マラヴの人民の西にはグジラトのブラビ (Valabhi) 族あり、活潑なる海上の貿易を營み、其富を以て有名なりき。ブラビ族はカノウジのグプタ家の權力衰ふるに及び、四六〇年の頃、パタルカ (Bhatarka) 王の下に一獨立王國をグヂラトに創建せり。パタルカ王朝は三百年間統治せしが、ラジプト族の南印度より來りて七八〇年の頃グジラトを征服し、次いで北印度の諸王國を征服するに至りて亡べり。然れども玄奘の印度に至りし頃には、ラジプト族未だ其權力を植うるに至らず、ブラビ族尙ほグジラトに繁榮せり。玄奘は其他に二三の小市府を訪ひたる後、遂に印度を去れり。印度史家は此時代に於ける印度の藝術、風俗及び文明を明かにしたる玄奘の著大唐西域記に謝せざるべからず。

玄奘の印度に至りし頃印度に君臨せしシラデチア二世は、文明的國王にしてま

た文學の保護者たりき。是を以て其朝廷に成りたる著書の中には、今日尙ほ印度人の愛讀するものあり。シラデチア二世は六五〇年を以て歿し、是より印度の歴史は暗黒となれり。次の有名なる王は、七〇〇年の頃より三十年間統治せしカノウジのヤソヴルマン (Yasovarma) なり。二百年前ウシアインを照せし文學の燈火は尙ほ印度に輝き、印度最大詩人の一人バヴブチ (Bhavabhuti) はヤソヴルマンの朝廷にありき。然れどもヤソヴルマンはカシミル王ラリタデチア (Lalitaditya) と戦ひて敗れしかば、ラリタデチアは其朝廷を飾らんがためにバヴブチをカノウジより奪ひされり。

バヴブチは此時代を飾りし最後の印度詩人にして、ヤソヴルマンは吾人が知る北印度の最後の名君主なり、故に古代印度の歴史は第八世紀を以て終を告げたるものといふべし。

爾後二百年間はまさに印度の暗黒時代といふべく、第九、第十兩世紀に於ける北印度の歴史は空白にして、其間大王朝起らず、大文學者出せず、大建築成らず、歴史は唯此暗黒時代を沈黙するのみ。

印度の暗黒時代は、恰もローマ帝國の滅亡に始まり、封建制度の劫輿に終るヨーロッパの暗黒時代に似たり。印度にては文明の域に進みて其精力已に耗きたる古代諸種族の此暗黒時代に影を隠せり。而して光明の再び現はるるや、近代ラジプト族勃然として興りき。第十世紀の終に、ラジプト族はウジアイン、カノウジ、デリ、グジラト及びブンシアブに其權力を植ゑ、イスラム教の侵畧者に對せんがために準備する所ありき。

ラジプト族の起原に關しては議論紛々として一ならず、幾多の典據はそのサカ(Dakka)族及び他侵略者の苗裔なるを主張す。而して是等の侵略者はサカ族に續きて印度に來り、漸次西印度及び南印度に植民したるものなり。侵略撃退のため、印度諸王の盡力は、ローマ諸帝の蠻族撃退のための盡力に比するを得べし。印度人及びローマ人は一時其目的を達せしも、侵略の波は遂に印度及びイタリアの古帝國を覆し、爾後數百年間其歴史をして知る可らざるに至らしめたり。而して暗黒の幕再び排せらるゝや、ヨーロッパの征服者はキリスト教に歸依し、其最も有力なる保護者たりしが、ラジプト族はまた印度教化して刹帝利の新階級となり、新

たに改宗せる熱心を以て印度教を保護し、佛教を排斥したりき。

かくて宗教的迫害は暗黒時代に始めて印度に起りしが、當時ラジプト族は佛教の僧院を毀ち、僧侶を罰し、典籍を焼けり、故を以てラジプト族の權力を振ひし所にては、佛教の堂宇亡びて印度教の殿堂起れり。第十世紀の終に佛教は實際印度より排斥せられしが、佛教破壊の事業を完成したるものは、ラジプト族に次いで印度の君主となりたるイスラム教徒なりとす。近時の古學者は錫崙、緬甸、ネパール、西藏、支那、日本及び其他の亞細亞地方より佛教の經典を蒐集せしが、印度よりは何等價値ある原本を得ること能はざりきといふ。印度は佛教の生れたる地にして、一千年餘年間印度教と相並ひて行はれたる所なるに、經典の求むべからざる是の如し、以て破壊事業の全然功を奏したるを知るに足らん。

然れども近代ヨーロッパのキリスト教貴族と、近代印度のラジプト貴族との類似豈に是に止まらんや。ヨーロッパ及び印度の新君主は共にイスラム教の新權力に抗して戦へり。イスパニアの騎士が其郷國にてイスラム教徒に抗したる頃、ダヒル(Dahir)及び他のラジプト國王はシンドにてイスラム教徒に抗し、フィリップ・アウグ

ムッス (Philip Augustus) 及びリチャード (Richard) 獅心王のバレスチナにてイスラム教徒と戦ひたる頃、プリツライ (Prithu Rai) はデリーの城門附近にてイスラム教徒と戦ひたりき。ヨーロッパにてはキリスト教貴族幸にして其獨立を得て、遂にイスパニア及びイタリアよりイスラム教徒を驅逐せり。されど印度にてはラジプト族是と戦ひて亡び、爲めに第十二世紀後、近代の歴史を有せざるに至れり。

古代よりのヨーロッパの歴史と印度の歴史との比較は、吾人をして最もよく印度に於ける史的事實の經過を理會せしむ。實に兩者の類似は顯著にして、事實の經過が地を異にするも、見るべからざる同一の勢力及び原因のために制せらるることを證す。然れども類似は第十一世紀に至りて終り、爾後ヨーロッパの歴史は獨立進歩及び文明の歴史なれども、印度の歴史は降服及び墮落衰頹の歴史なりとす。

第二十二章 宗教及び風俗

佛教の久しく印度に行はるゝや、印度教は是がために漸次變化を來せり。古代印度教徒の知らざりし偶像崇拜の風は、佛教より印度教に傳はりぬ。其數に於て

佛教の寺院と比較するに至りし崇拜の殿堂の如きも、また古代印度教徒の知らざりし所なり、而して印度教の祝祭の盛大は遂に佛教の行列及び祝祭を凌駕するに至りき。阿輸迦大王の時代より佛教徒の特色となりし聖場巡拜の習慣は、後代印度教徒の採用したる所にして、其巡拜場は至る所に増加し、年々敬虔なる幾百万の男女を招くに至れり。また後代の印度教徒は、佛教徒の三位一體に倣ひて印度教の三位一體を案出し、其最高神ブラーマ、ヴィシヌ及びシヴァを崇拜せり。

印度教の少くとも其外形に變化を來たしたることは、近代印度教徒の信仰及び儀式と、佛教以前の印度教徒の信仰及び儀式と、一見其形を異にするを以て知るべし。故に印度教を説くには、吠陀時代の印度教と、プラナ時代の印度教とを分つる必要あり、然れども印度教徒は決して其過去に不忠實なるにあらずして、其學者は皆兩者の教儀の要點異ならざるを知れり。

吠陀時代の印度教とプラナ時代の印度教とは共に一大神、普遍の生命ウパニシアドの所謂宇宙靈魂を認め、共に万物の神にいて、神にかへるを教へ、共に現世の行爲に従ひて來世に賞罰を受くべきを信じ、共に靈魂の最後に神に吸収せらるべ

きを説けり。此點に於ては變化なしといふべし。

然れども是れたゞ學者の信ずる教儀なるのみ、普通の人民に至ては其信仰もとより形式にあり、而して是れ吠陀時代の印度教とプラナ時代の印度教との間に變化を見る所以なり。吠陀時代の印度教徒は自然の變體として神を崇拜しぬ、インドラ〔雨神〕若しくはヴルナ〔天空の神〕、アクニ〔火神〕若しくはスリア〔日神〕の如き即ち是なり。然るにプラナ時代の印度教徒は創造、守成、破壊の三力を有するものとして一大神を崇拜しぬ、プラーマ〔創造神〕、ビシヌ〔守成神〕及びシヴ〔破壊神〕即ち是なり。吠陀時代の印度教徒は神を崇拜するに其墟邊に於て献供を行ひしも、プラナ時代の印度教徒は神龕及び殿堂に偶像を拜し、若しくは屢、聖場を巡拜せり。

印度教の印度に於て佛教の勢力を奪ひたるは、實に以上述べたる變化のためなり、若し印度教にして佛教に倣ふことなく、徒らに高尚を衒ひて通俗の感情に訴へざりしならば、長へに其勢力を維持すること能はざりしならん。佛教の祝祭、巡拜及び公崇拜の儀式の一たび印度人民を動かすや、印度の僧侶及び治者は民心を惹くこと是に劣らざる祝祭、巡拜及び公崇拜の儀式を人民に供するにあらずして、其

佛教に赴くを防遏すること能はざりき、故に民心自然の傾向は新印度教を造るに至りたるものといふべし。而して印度教は佛教に倣ひて通俗の希望に副ふに至り、佛教の滅亡後尙ほ其勢力を維持して今日に至る、故に佛教は印度人の宗教及び風俗に大影響を及ぼしたるものといふべし。

佛教以前の印度人は數百萬の成陀羅及び本土種族の間に生活する一小團體なりしが故に、自然其特別に尊重したる献供の儀式に拘泥したりき。摩揭陀の興隆以前に於ける印度人は、實にガンガ河畔の植民的部族に過ずして、傲然其古儀を動かさず一切の改革を拒みしが、形勢一變、摩揭陀の興隆して、純アリア族に屬せざる一國民の、北印度の全部に君臨するや、アリア族の古代印度教は是がために大打撃を受け、佛教新たに流布するに至れり。釋迦の徒弟の多くは、アリア族のベナレス人よりも非アリア族の摩揭陀人にして、爾後數百年佛教は摩揭陀よりベナガル、オリッサ及び他の非アリア諸州に弘まりたること、北印度のガンガ谿谷に於ける比にあらず。而して佛教の流布はアリア族、非アリア族間の種姓の區別を除去し、其墻壁を撤去し、其差別を平等にし、諸部族及び諸種族を結合して、一大

印度國民となせり。故に佛教は印度普通の一宗教にして、其年月を経るに従ひ、祭祀、巡拜及び偶像崇拜の宗教となりしは、畢竟億兆人民の要求に應じたるのみ。されば佛教と相並びて行はれたる印度教も、其必要に應じて同一なる變化を實現し、祭祀及び偶像崇拜を主とする人民の宗教たるに至れり。

新印度教を説きたるものは十八卷のプラナなり。其時代及び其時代の宗教に名を與へたるものもまた此十八卷のプラナなり。古代の古傳記及び歴史上の物語を傳ふるプラナ、若しくはイチハサプラナ (Itihasa-Purana) は叙事詩時代より既に世に存し、屢々其時代の文學に關係を有せり。然れども比較的近代のプラナ成るに及び、是等古代の著述は其面影を止めざるに至れり。今日世に存するプラナは、ヰクラマデチア及びシラデチアの時代に成りたるものとす。然れども爾後數百年間に著しき改作及び竄入あり、イスラム教徒の印度征服以後に於てすら然りとなす。故にプラナはヰクラマデチア時代の宗教の狀態を現はすと共に、更に明瞭にクリシナ若しくはシブの最高神となりて、數百万の崇拜者を引接するに至りたる後代の宗論を現はすものなり。是を以て吾人はプラナに於て、諸派が各、其神を

以て最高現體となす爭論を見る。ヰクラマデチア時代の宗教及び風俗の紀事として、現存のプラナを見るには充分注意せざるべからず。蓋し現存のプラナは寧ろイスラム教徒の印度征服以後に於ける宗教及び風俗を現はし、また一二世紀前印度の諸所に建立せられたる殿堂の紀事を包含するものなればなり。

以上の注意は近代のダルマ・サストラを見るに一層適切なるを覺ゆ。マヌの法典は數百年間全印度人の標準的著述なりしが、吠陀の献供廢れて偶像崇拜の風起りたるが如く、時代の推移に伴ひて新ダルマ・サストラの編纂必要となれり。ヤジナブルキヤ (Yajurvedya) 叙事詩時代に生存せしギデハ (Vidaha) のシアナカ (Janaka) の僧侶と混ぜべからずの著述は第四世紀若しくは第五世紀に屬し、吾人がヰクラマデチア時代の作物と信じ得る唯一の法律なり。ヰアサ (Vyasa) の編者と混ぜべからず若しくは、パラサラ (Parasara) 古代の天文學者と混ぜべからずの手に成りたるが如き後代のダルマ・サストラは、悉くイスラム教徒の印度征服以後に編纂若しくは改作せられたるものにして、吾人に供するにイスラム教時代の印度人の風俗の狀態を以てす。

プラナ及びダルマ・サストラは前已に述べたるが如く、イスラム教徒の印度征服以後に編纂若しくは改作せられたるものなるが故に、ギクラマヂチア及びシラヂチアの時代を知らんとする歴史家には安全なる指針にあらず。されど別にシラヂ夫妻を崇拜する一派の編纂にかゝる宗教上の著述あり、名けてタントラ(Tantra)と云ふ。タントラは不可思議力を得るための暗黒残忍なる行を論ずるものにして、明かに印度人の自由を失ひたる近代の作物なり。怯者は力を慕ひ愚者は信じ易し、故に後代の印度人は暗黒不浄の行をなし、由て以て其祖先の自由健全なる練習によりて得たる力を得んとするに至れり。

ダルマ・サストラ、プラナ及びタントラにつきて既に述べたるを以て、是より忠實に當時の宗教及び風俗を現はせるギクラマヂチア及びシラヂチア時代の詩歌、戯曲及び小説に移るべし。蓋し是等の詩歌、戯曲及び小説より得る記述は、興味津津々として愉快なるものなればなり。

當時神を崇拜するは此創造、守成及び破壊の三力に於てし、創造神を呼ぶにはブラーマの古名稱を用ゐたり、ブラーマは即ちエダの祈禱神なり、而してエダに於け

る言語の女神サラスワチ(Sarasvati)は當然其配偶とせられたりき。リグ・エダの日神ギシヌの名は、印度人の守成神を表するに適當なりとせし所にして、其配偶は收穫及び財産の女神ラクシミ(Lakshmi)なり。またリグ・エダの雷神ルドラ(Rudra)の名稱は、破壊神シヴ若しくはマ・ヘスワラを表するに至れり。而してヒマラヤ山の女ウマ(Uma)はシヴの配偶なり、ウマはまたヅルガ(Durga)、カリ(Kali)、サクチ(Sakti)及び其他種々の名稱の下に崇拜せられたりき。

當時の印度人はリグ・エダの諸神インドラ、アグニ、ヴルナ、スリア、ヴェユ及びマルツを以て小神とし、且つ思もへらく、是等の小神は光榮あるインドラの天に住し、其帝國の安全を保たんがためにアストラ(Asura)〔阿修羅即ち魔神〕と戦ひ、其敵のために破らるゝや、援を太神ブラーマ若しくはギシヌ若しくはシヴに乞へりと。此思想は是等小神の苦行によりて天上に住することを得、一定の時期間幸福を享有すること、人間のまた苦行によりて一定の時期間神となり得ること、現世に於ける一切の云爲の來世に於て賞罰を招くこと及び宇宙万物を吸収すべき大神ブラーマ、ギシヌ及びシヴを離れて存在し得るもの、實際世にあらざることを現はすものなり。

是に於てウバニシアドの一神教及び靈魂輪廻の古代信仰は、後代の多神教と調和するに至れり。

ギクラーマヂチア時代の最も美麗なる一創作は、シヴの結婚を記述したるカリダサの詩なり。カリダサの詩によるに、諸小神のアスラの破る所となりて、幸福なる天上の帝國を逐はるゝや、悄然援を乞はんがために太神ブラーマの許に至れり。然るにブラーマは其創造にかゝる一物を授くるために他を滅ぼすことを欲せず、唯諸神に指示するに天上を恢復し得るの方法を以てせり。時に諸神は首領を缺きしかば、ブラーマ乃ち是に告げていはく、能く卿等をしてアスラに勝たしむるもの唯シヴの一子あるのみと。シヴは時にヒマラヤの山中に在りて沈思黙考に耽り、山媛ウマ侍女として其左右に侍せり。是に於て諸神は會議を開きて愛の神を遣はし、シヴをしてウマを愛するの情を起さしめんとせしが、悲しいかな此企は功を奏せず、シヴは一たび愛情を感じしも自ら是を抑へ、赫然怒つて愛の神を屍灰となせり。ウマは寂寥たる荒野に赴きて苦行を試み、數月にして一年少隱者に遭へり。然るに隱者は其妙齡の女子の身を以てして苦行をなすの不可を説き、また其

愛慕せるシヴを嘲れり。ウマ是を聞きて快からず、憤然として怒りしも隱者の温顔是を制するに遭ひて心漸く解け、また其實際シヴの假装せるものなるを知り、遂に婚を結びて一子カルチケヤ(Kartikeya)生れぬ。カルチケヤは諸神を援けてアスラに勝ち、是をして天上に歸ることを得せしめたりと。此種の物語は浩瀚なる宗教上の著述よりも、寧ろ吾人をして人民の宗教上の信仰及び感情に關して明瞭眞實なる思想を形成せしむ。

此時代の詩歌は人民の風俗に關して説示する所多し。當時人民はなほ婆羅門刹帝利、吠舍及び戌陀羅の四階級に分れしが、種々の土着種族は此時已に印度人となりて前に述べたるが如き新種姓を形成せり。ヤジナブルキアは十三の種姓を挙げしも、近代印度の職業的種姓、陶工、鐵工、金工、織工、醫師及び教師の類を記さず、蓋し職業の完全に種姓を形成するに至りたるは、印度人の自由を失ひたる後の事に屬すればなり。

印度の女子は印度の獨立を失ひたる後其自由を奪はれたるも、當時は決して然らざりき。戯曲、詩歌及び小説の女主人公を見るに、未婚の時公々然として殿堂に

行き懇ろに外來の客に接し、其身を隠すために走るが如きことをなさず、すべての點に於て其生活する社會に相應の影響を及ぼせり。既婚の女子は其夫の朋友に接し、自由に是と語り、唯男子の不在なるに於ては其家にて客を迎へざりしのみ。東洋の女子は概して近代ヨーロッパの風俗をなす男女交際の自由を許されざるも、而かも浩瀚なるプラナ時代の印度文學には、イスラム教徒の征服以後に於けるが如き女子幽閉の一例證をだも見ることは能はず。女子は讀書の道を學び、唱歌を以て必ず熟達すべきものとし、また繪畫及び音樂をも學べり。婚姻は兩親の定むる所にして其儀式は實際今日に同じ。寡婦の再婚は印度人の蔑視する所なりしも、決して是れを禁じたるにあらず。亡夫の火葬場に寡婦の焚死するサチの儀式は、古代のサンスクリット文學には勿論、下りてヤジナ、ヴルキアの著述にすら是を許したる例なし。奴隸の賣買行はれたることは他の古代諸國に同じ。然れども奴隸は其自由の價と定められたる金額を償ひて解放を求むることを得たりき。

此時代の寫實的一戯曲には、全盛時代のムジアインに關する明瞭なる紀事あり。婆羅門の裁判官は印度の法律に従ひ、典獄及び書記の補助によりて裁判を下し、警

官は晝夜市街を警む。賭博所及び居飲酒店は到る處にありしが、近代文明の惡習は未だ知られざりき。

印度は古より美麗なる製作及び寶石を以て有名なりしが、其戯曲の紀事によれば、當時印度には熟練なる美術家の眞珠、黃玉、青玉、綠玉、紅玉、瑠璃、珊瑚及び其他の寶石を試験する所ありて、或は金に紅玉を飾り、或は色系に金の裝飾を施し、或は眞珠を貫きて紐を通じ、或は瑠璃を碎きて粉となし、其他殻を穿つものあり、珊瑚を切るものあり。香料商は泊夫藍の袋を乾かし、麝香の袋を震ひ、檀香木の液汁と混成の香氣とを搾出したりと。

玄奘の大唐西域記によりて此時代の印度の市街及び人民の或状態を知ることを得。市街は壁を繞ぐらし、諸所に門あり、然れども大小の街路迂曲せり。露店は道路の兩側に並びて特殊の招牌を掲ぐ、然れども屠者、漁者、舞者、死刑執行者及び市街掃除者は市府の外側に住せり。市街を繞ぐる壁は煉瓦若しくは瓦より成り、通常人民の家屋は藺若しくは乾枝若しくは瓦若しくは板にて蔽へり。

米及び小麥は普通人民の食物なり。菓子及び牛乳は一般に準備したる所にし

て、魚肉、羊肉及び鹿肉もまた其食卓に上りたるものなり。金、銀、銅、白硬石及び眞珠は印度に産し、珍奇なる寶石類また多かりき。玄奘いはく商業、貿易は隆盛を極めしが、金銀貨は一般に通貨として用ゐられざりき。また玄奘は普通人民に關して記していはく、彼等は天性輕快なれども正直にして、金銀に關して狡猾なり。來世の賞罰を恐れて現世の事物を輕んじ、虚偽奸譎を行ふことなく、誓約に忠實なりと。

第二十三章 建築及び建築術

佛教の流布以前には、殿堂に於ける公崇拜は印度教の一部分にあらざりき。故を以て其殿堂は近代印度教の起るに及びて始めて成りたるものとす。オリッサ州は第十六世紀にイスラム教徒の始めて征服したる所にして、其殿堂は北印度様式の最良標本なり。是等の殿堂は一般に曲線より成る高塔と、正面に門口を有する各室とより成る。塔は正方形の底を有し、其結構壯大にして階段若しくは圓柱若しくは方柱の區別なし。是に反して門口は軒蛇腹の連續より成り、圓錐形の頂點を有す。

以上述べたるが如き建築は、第六世紀若しくは第七世紀に成りたる有名なるブヴネスワラの殿堂なり。傳へいふ、數百の石造殿堂はブヴネスワラに建立せられたりと。大殿堂の塔は約七十尺の正方形より起りて高さ百八十尺に達し、外面の全部精緻を極めたる彫刻を以て蔽はる、而して此彫刻は塔の建築に三倍する費用を要したりいふ。フアルガッソン博士いはく、説者多くは大さは是に四倍する建築を起さば、其結果更に雄渾壯大なるべしとするならん、然れども是の如きは印度教徒の殿堂建築に望みたる所にあらざるなり。印度教徒の見て以て殿堂を最も價値あらしむるものとせし方式は、微細の點をも忽にせざる無限の勞力にあり而して此所見の當不當は暫らく措き、其全體の結果の美麗驚くべきものありと。

オリッサにてシヴの崇拜及びブヴネスワラの衰ふるに及び、ギンジャ若しくは其化身たるクリシナの崇拜行はるゝに至り、第十二紀に及んでシアガンナタ (Jaganatha) の大殿堂ブリに起れり。此大殿堂は高さ百九十二尺ありて、今日に至るまで印度教徒の最も神聖視したる所なり、但し其美麗初期のブヴネスワラの殿堂に似ず。されどオリッサには有名なる他の殿堂あり、海岸にたてるカナラタ (Kanaraka) の黒寶

塔即ち是なり。黒寶塔は一般に第十三世紀に成りたるものと想像せらるゝも、フアルガン博士は是を以て其以前に成りたるものとせり。黒寶塔の現に存するものは其門口のみにして、門口の底たる正方形は四十尺あるも、其屋根内面に傾けるが故に、今日にては二十尺内外となれり。屋根を支ふるものは鍛鉄の大梁にして、屋根は扁石の天井より成る。鍛鉄の大梁の長さは二十一尺若しくは二十三尺あり、吾人は是によりて當時印度人の鍛鉄を用ゐたることを知るに難からず。黒寶塔の十二面は美麗にして變化に富める彫刻を以て蔽はる。

オリッサより西に進まば、他諸州に於て北印度様式の建築を見ん。久しく印度教王國の獨立を維持せしブンデルカンド(Bundelkhand)には印度教の殿堂多く、カシウラホ(Khajuraho)のみにても第十世紀及び第十一世紀に屬する殿堂三十に下らず。而して其主もなる一殿堂の塔は繞らすに許多の小塔を以てし、床高くして彫刻したる三列の像を圍めり、カニングガム(Cunningham)氏の説によれば彫像は百七十二を下らずといふ。

長くイスラム教徒に抗して其獨立のために戦ひたるマルワにては、第十一世紀

に於ける印度殿堂の完全なるもの尙ほボバル(Bhopal)に存す。更にまた南すればマラータ國には古代諸殿堂の標本あり。是等の殿堂は主として北印度様式と南印度様式との混合を示すものとして興味あるものとす。

オリッサ、ブンデルカンド、ボバル及びマハラシトラに於て、第六世紀より第十二世紀に至る印度教建築等の標本を見ると前已に述べたるが如し。然るに印度アリア人の故郷と稱せらるゝ、インドス河とブラーマプトラ河との間に横はる北印度に於て、此種の標本を見ることを得ざるは注意すべきとなり。されど此理由は容易に知ることを得べし。イスラム教徒は第十二世紀の末葉頃印度を征服してより、約六百年間印度に君臨せる間北印度に於ける古代印度教の殿堂を毀ち、其石を以てイスラム教の禮拜堂及び尖高塔を造りたるを以て、現に古代印度教の殿堂の北印度に存せざるなり。ベナレス、マツラ、ヴリンダヴァ(Vrindavana)、アムリトサル(Amritsar)及び其他北印度に於ける現存殿堂の成りたるは、今を去る僅かに二三百年前に過ぎず。南方には北印度様式と全然其趣を異にする南印度様式の建築を見るべし、南印度様式の最良標本は其佛教様式より出てたることを證す、故に最初

期の南印度殿堂の多數は岩をひらきて造りたるものにして、其完全なる發達を遂げたる後にも尙ほ其原初の面影を存するを見る。第八世紀若くは第九世紀に屬するエルロラ(Ellohra)の殿堂は岩をひらきて造りたるものにして、世界の一大偉觀と稱せらる。岩をひらきて造りたる大四所は長さ二百七十尺、廣さ百五十尺ありて、其中央には殿堂あり、殿堂には高さ八十尺乃至九十尺の塔と、十六箇の圓柱にて支へらるゝ一大門口とあり、而して大門口と支門口とを連結するものは廊と門なり。此建築は完全なる南印度殿堂の模型にして、元來一箇の石より成れるが故に、見るものをして堅實雄壯、宏大を感ぜしむ。其佛教僧院の庵に倣ひて造りたる九箇の窟には各自印度教の神を祭る。

また南印度の最も著名なる一大殿堂はカヰリ(Kaveri)河口に近きチルラムバラム(Chilambaram)の殿堂なり。チルラムバラムの殿堂はもと第十七世紀若しくは第十一世紀に成りたるものなれども、其最も人目を惹く附屬建築は後に増築したるものとす、例せば大門口及び一千圓柱の堂宇の今を去る僅かに二三百年前に成りたるが如き是なり。其圓柱は正面に二十四箇、奥に四十一箇整列す、而して是

等の圓柱は各々一箇の花崗石より成り、多少の彫刻及び裝飾を施しありて、看るものをして眞に驚嘆せしむ。南印度に於ける他の大殿堂、例せばコンジエラム(カナンチ)タンジオル及びマヅラ(Madurai)の殿堂の如きは更に後期に屬す。

是より更に北印度様式及び南印度様式と其趣を異にするデカン(Dekkan)様式につきて説かん。デカン様式の特徴は殿堂の基礎の多邊形若しくは星形にして、直立せる壁より上にはピラミッド状をなせる屋根の次第に細くなれるにあり。第十世紀より第十四世紀の初に至るまで、カルナチクに君臨せしパルラララジ、プト族は、デカン様式に屬する三群の殿堂を残せり。第一は第十一世紀に成りたるソムナタプル(Somnathapur)の殿堂、第二は第十二世紀に成りたるバイルル(Ballur)の殿堂、第三は第十三世紀に成りたるハルラビド(Hallabid)の殿堂是なり。されどハルラビドの殿堂は、イスラム教徒のバルララ王朝を覆したる頃未だ完成せざりき。フアルガッソ博士はハルラビドの殿堂とバルテソンの殿堂とを比較せる注意すべき所論をなせり。ハルラビドの殿堂はプラナ時代の後に成りたるものなるに博士の所論は印度教の建築を一貫せる精神を明かにするものあり。博士いはく

パルテノンの殿堂は建築の意匠に清新高雅なる智力を應用したる好適例にして、其各部は數理的精密を以て成り、彫刻の意匠は完美の極に達せり。ハルラビドの殿堂は全く是れに反し、規則的にして勉めて變化を尊ぶの風あり、微細の點に於て殊に然りとす。パルテノンの殿堂の柱は皆其趣を一にするも、印度教の殿堂に至つては二箇の小面同じからず、渦卷形皆其趣を異にせり。全建築に於ける二箇の飾庇また同じきものあるなく、各部機械的拘束を賤みて想像の豊富を展示す、信仰に於て卑野なる、若しくは感情に於て暖かなるものは、皆印度教殿堂の壁に描かれあるも、パルテノンの殿堂に於て見るを得べき純然たる智識の表現を見る能はず。而して是等の印度教殿堂に就て研究することの吾人のために大なる價值あるは、建築の評論に對する吾人の智識の基礎を廣うするを以てなり。吾人が建築の一形式を以て足れりとするの狹隘なるを覺ゆるは、唯從來見聞したるものと全然其趣を異にする諸種の形式に精通することによりて始めて成功すへし。吾人は此廣き區域にたちて、始めて建築の多方面なること人生に異らざるを覺り、また僅少の感情と僅少の熱望とを以て到底表白すること能はざるものあるを知るべし。

第二十四章 科學及び文學

是より主としてギクラーマヂチア時代の文學につきて述べんに、今日尙ほ印度人の熱心に研究するギクラーマヂチア時代の文學は、思想情懷及び感情に於て近代の印度人を其祖先に連結するものとす。佛教時代に著しき進歩をなしたる天文學は、プラナ時代に至りて其面目を改めたり。大天文學者アリアパッタは四七六年を以て摩揭陀の舊首府パタリプトラに生まれ、第六世紀に其有名なる著述アリアパチャ(Aryabhattiya)を著はせり。アリアパチャは蓋し著者アリアパッタの名を取りたるが如し、而してアリアパッタは地球の其軸を廻轉することを主張し、其理由を説明してはいはく、人若し船に乗りて前進すれば、不動の對象背進するを見るへし、星辰は動かざるも、其日々動くが如く見ゆるは是によるのみと。アリアパッタはまた日蝕、月蝕及び他の天象の眞原因を説明せり。

アリアパッタの繼承者ブラハミヒラは、五〇五年の頃ウジアインに生まれ、ギクラー

マデチアの朝廷の九文人の一人として、今日尙ほ印度に於て一般に記憶せらる。ブラハミヒラはパンチアシダンチチア (Pancha Siddhanticha) としへる其大著述中に五種の古シダントを收め、またブリハトサンヒタ (Brihat Samhita) としへる包括的著述を著はせり。ブリハトサンヒタは唯に太陽、大陰、地球、遊星及び天上の現象のみならず、偶像、殿堂、建築、動物、寶石、植物及び製造品の如き種々の事物につきて論ぜり。

ブラハミヒラに継ぎたるはブラーマグプタ (Brahmagupta) なり。ブラーマグプタは古シダントの一を改作して、ブラーマヌプタシダント (Brahmasputa Siddhanta) としへる著述を著はせり、此書は六二八年に成りたるものなりといふ。此後暗黒時代北印度に始まり、第十二世紀にバヌカラチアリヤ (Bhaskara Charya) 現るゝまで、大天文学者と稱すべきもの世にいでず。

印度の天文学者にして其著述に代数及び数学を論ぜざるもの少し、而して其代数の進歩に關して、コールブルーク (Colebrooke) 氏はギリシヤ人が科学の初歩を學びたる頃より一百年前の古に於て、印度人は科学上著しき進歩をなせることを論

ぜり。曰く印度人は便利なる数学の記法を知りしも、ギリシヤ人は然らず。代数は数学と密接なる関係を有するものなるが故に、其算法の發明は数学の理會せられたる印度に於てはあり得べきの事實なり。印度の数学系統とディオファントス (Diophantos) の数学系統とに於ける此種の類似は、兩者の間に交通ありしことを證明するものにあらずして、各自其發明に成りたりといへる豫想を確かむるに足るものなりと。

第八世紀の頃アラビアの學者は代数に關する印度の著述を翻譯せしが、ピサ (Pisa) のレオナルド (Leonardo) は之をアラビア人に學びて更に之をヨーロッパに紹介せり。其他の数学に於てもアラビア人はまた印度人に學ぶ所あり、現に世界一般に行はるゝ十数記法の如きも、アラビア人が印度人に學びて更に之をヨーロッパに傳へたるものなり。

されど近代の印度人がギクラーマデチア時代につきて誇る所は、其数学及び科学に於ける進歩にあらずして其文学にあり。詩歌はギクラーマデチア時代に至りて燦然たる光を放ち、永遠に傳ふべき幾多の大創作世に出てたり、故に此時代はサン

スクリット文學のアウグスツス時代といふべし。

サスンクリット文學のアウグスツス時代は、實にカリダッサに端を發す。カリダッサは并クラマデチア朝の顯著なる詩人にして、其大戯曲サクンタラが今を去る約百年前サー・キルリアム・ジョンズ (Sir William Jones) の英譯する所となりてより、ヨーロッパの文學者争うてサンスクリット文學を研究するに至れり。獨逸近代の最大詩人ゲーテ (Goethe) は其詩中にサクンタラを稱讚して曰く、卿は人生に於ける青年の花及び老年の果實にして、總べて靈魂を喜ばしめ樂ましむるものなるか。卿は美なる一名稱中に天地を綜合するものなるか。噫サクンタラよ、吾は卿を指して然りといふと。

サクンタラの劇曲は、波羅門美人の指環を失ひたることを仕組めるものにて、其舞臺を宮廷と森林中の隱栖とに分てるは、古代のサンスクリット叙事詩に同じ。其梗概を述べれば、月種族の一公子ツシアンタ (Dushyanta) は、藪地に於ける一波羅門の隱栖に於て嬋娟たる美少女サクンタラを娶り、其都城に歸るに當りて是に指環を贈り、以て其愛情の證としぬ。然るにサクンタラは一波羅門の呪咀する所とな

りて其指環を失ひしかば、ツシアンタ公子は其指環の發見せられざる間は、サクンタラを己の妻たることを承認せざりき。既にしてサクンタラは其幽栖中に一子を擧げ、是と共に宮廷に入らんことを請ひしも許されず。此後幾多の悲痛と辛酸とを嘗めて遂に其指環を發見し、夫妻始めて同棲することを得たりと。而してサクンタラの生子は即ちバラタにして、其功業はマハバラタの題目となれる月種族の祖先なり。またサクンタラはシタと同じく貞節なる印度婦人の典型にして、其愛情と悲痛とは蓋し千餘年間印度人の好傳奇小説を形成したるものならん。

并クラモルヴシ (Vikramorvasi) は英雄ブルラヴス (Pururavas) と天女ウルヴシ (Divasi) との愛を記せる劇曲にして、其物語の古きことリグ・ヴェダに劣らず、而して其根源をなすものは日「ブルラヴス」の曙「ウルヴシ」を追ふといへる神話なり。然れども此神話は其後長く印度人に忘れられ、カリダッサ及びプラナに記するブルラヴスは、惡鬼の手よりウルヴシといへる天女を救ひ、遂に是と相愛するに至りし地上の一國王なりとす。并クラモルヴシによるに、ウルヴシは情人ブルラヴスのために其心を奪はれ爲めにインドラの朝廷に演劇ありし際、其扮せる人物の詞を忘れてブルラ

プスの名を口外し、計らずも其胸中の秘密を洩せしかば、温順なるウルプシは此過失のために罰せられしも、インドラは深く慮かる所ありて、更に是に命ずるに其愛するプルラプスの許にゆき、其生める子のプルラプスの知る所となるまで同棲すべきを以てせり。プルラプスはウルプシの愛を秘するに力めしも、遂に其妃の知る所となりしかば、陽に悔悟の體を装ひ、妃の脚下に伏して其罪を謝せり。然れども妃は之を信ぜざりしが、疾かに其夫の情の到底制すべからざることを、並びに其怨の遂に無益なるべきことを覺れり。是に於て宗教上の儀式を行ひて其態度を改めんとし、身には白衣を纏ひ其裝飾としては花のみを着け、徐かに其夫を崇拜せんがために出て來りしに、プルラプスは之を見て其愛情の舊に復するを覺えたりしも、妃は遂にプルラプスの心を奪ふこと能はざるを知り、是に供物を捧げ身を屈して其脚下に伏し、二たび起ちて月及びビロヒニ(Rohini)星に其夫の愛情の復舊を祈りしかば、ウルプシの伴侶すら之を聞きて心を動かし、ウルプシに説く所あり、プルラプスの愛情全く復舊せしが、既にしてプルラプスとウルプシとは、不慮の變のため一時相別れざるべからざるに至れり。而して其愛情及び別離はカリダサの筆

を極めて記述したる所なり。プルラプスはウルプシに別れてより顔色憔悴形容枯槁し、森林に彷徨して鳥獸及び草木に其衷情を語れり。

プルラプスは後またウルプシに會せしも、幾許もなく復た是と相失せり。是より先きウルプシは一男子を擧げてプルラプスに秘せしが、一日其發見する所となり。而してウルプシはインドラの命令に従ひ、直に天にかへらざる可らざるに至りしも、インドラは二度其命令を變じ、ナラタ(Narada)をして天より降り、プルラプスにウルプシと神聖なる情縁を結びて、其身を終ふるまで同棲すべきことを傳へしめたり。

カリダサは戯曲家兼詩人にして、有名なるサンスクリット語の叙事詩ラグンサ(Baghavansa)及びクマラスムバワ(Kumara Sambhava)は其筆に成りたるものとす。ラグンサはラマの物語にして、クマラスムバワはカリダサが其想像によりてシブに對するウマの愛及び兩者の幸福なる結婚を描きたるものとす。左に其梗概を叙せん。

ウマはヒマラヤ山神の女にして、其生まるゝや未曾有の幸福を有したるとはカ

リダサが、メナ(Mena)の女の生れたるときは幸福にして、世界万物光彩を放てり。蓄薇色の光輝は燦爛たる天空に満ち、馥郁たる風は徐ろに吹き來りて小丘の周圍に天上の樂を奏し、天は其花の雨を降らしぬといへるによりて知るべし。ウマの少時に關するカリダサの記述は、華麗能く是に比すべきものなし。ウマの稍、長ずるや、諸神は是を以てシヅに嫁せしめ、其間に生まれたる子を首領としてアスラに勝たんとせり。時にシヅはヒマラヤの山中にありて沈思默考に耽り、妙齡美貌のウマ侍女として其左右に侍せしが、ウマは清潔なる衣服を纏ひ花を飾り、シヅの傍にありて是がために花を集め、頓首其太神を拜せり。ウマのシヅを拜するや、其頭髮より燦然たる中夜の星の如き花の雫を落せり、シヅは其服従を喜び、是がために福を降し且つ曰く、汝は汝のみを愛する夫を得て幸福なるべきと疑ひなしと。

此時若し愛の神にして干與せざりしならば圓滑なる終局を見しならん。然れども愛の神はシヅの疲れたるを見、其百發百中の矢を放てり。是に於て、波靜かなる海に月の昇りたるが如く、愛情は隱者の胸を掠めて起れり。隱者は惚たる目を轉じて熟果を欺くウマの朱唇を見しが、噫ウマは其胸迫り其手足戰きて、如何に彼

に對する愛情を示せるよ。カダムバス(Kadambas)の葉芽の春暖に感じて生ずるが如く、ウマと隱者とは互に相愛せり。然れども其目なほ地に垂れて敢て其燃ゆるが如き眸を周圍に轉ぜず。時にシヅは奮うて其胸に起れる愛情の暴風雨を鎮め、怒れる眼に其周圍を睨みて、其平和なる靈魂を騒せし暴風雨の何れより來りしかを尋ね、偶、勇敢なる年少射手立てるを見ぬ。射手は其熟練なる手に弓を絞りて目の方向に引き、其肩を後方に張り、其左足を前方に投じて憩ふが如き狀をなせり。シヅ是を見て殆ど狂するが如く、其眼より炎々たる憤怒の焰を吐けり。莊嚴なる眉間の美は是に於て一變して是を睥視するの恐怖に堪へざるに至れり。聽け、天の聲の空に響くを。曰く、平穩なる偉大なるシヅよ、噫、平穩寛容なれと。然れども悲しいかな、怒れる眼の閃光は溫和なる愛の神を燒きて死灰となせり。

愛の神の新婦は其夫の死を悲み、ウマは苦行及び祈禱のために、愛情を割きて愁然森林に退けり。女子の身を以てして苦行に従へるウマの記述は、作者カリダサの心血を灑ぎたる所なり。かくて夏は燒くが如き炎熱の間に過ぎぬ。ウマは雨にうたれて秋を送り冬來りて烈風膚を劈くに至るも尙ほ其目的を動かさざりき。

時に一年少隠者來りてウマに問ふに其苦行の理由を以てす。是に於てウマの左
 右にありし處女は詳かに其原因を説明しぬ。然れども隠者は是を信ぜずして
 はく、温順なるウマのいかてシヴの如き神を愛することあらんやと蓋しシヴは死
 灰に汚れて葬場に徘徊したればなり。「短慮なるウマは是を聞きて憤怒し、沸くが
 如き血忽ち其顛顛を衝けり。ウマは激昂して雄辯滔々無禮なる隠者に説くに、シ
 ヴの偉大何人も解する所にあらざるを以てし、ウマは憤怒のために其胸波うち、傲
 然樹皮の外衣を拂ひて去らんとせり。然れども意外なる驚愕の目をひらけば其
 前に哲人の姿をかへて立てるあり。噫哲人は威ありて猛けからざるシヴ其人に
 あらずや。哲人は實にウマを愛することを拒みたるシヴ其人なりき。然れども
 シヴは已にウマの苦行を見て其心解け、喜びてウマのために愛せられんことを願
 へり。

カリダッサの短篇中其最も美なるものをメガタタ(Meghaduta)雲の使者とす。而し
 て其物語は極めて簡單なり。ヤクシア(Yaksha)は其の妻を愛するに過ぎ、其義務を忘れたるがために、國王の罰

する所となれり。而して其追放せらるゝや雨期の黒雲を見て是に命ずるに其家
 に残せる最愛の妻に其感情を傳ふることを以てし、其進むべき道を指示せり。是
 に於てカリダッサはギンドヤ山よりヒマラヤ山に至る諸地方を記述せしが、其想像
 の富瞻と聲調の佳とは世界の文學に比を見ざる所なりとす。「ナガナデ(Naga Nadi)
 の河岸に汝の水落ち力なき素馨其頭を搔ぐ。幾多の少女が媚を雲に呈する所、汝
 暫く其間にたちて是を覆へ。蓋し彼等飾環をなす花の藏を求むるや、焼くが如き
 日光其豊頬を汚し、雙耳潤みたる蓮花を懸けたるが如く、趕へども其望む所を得る
 能はずして徒らに疲勞し、汗の雫點々として顔を濡ふせばなり。汝北方に旅行す
 るとも、一時徑路をとりて以て満足せよ。佳なるウデアイニの宮殿及び美なる少
 女には暫く近づくことなかれ。是等光輝閃々たる眺望は見るべからず。暗黒は
 汝の日なり、汝は是を見ること能はずと。

カリダッサは蓋し第六世紀に生存したるならん。而して學者或は是を以てギク
 ラマヂチアのカシミル王に封ぜし、其廷臣マトリグプタ(Matrigupta)に當つるものあ
 り。また詩豪バラギ(Bhargavi)はカリダッサに稍後れて第六世紀に世にいて、短篇

の叙事詩キラタルシウニヤム(Kiratarjunyam)を遺せり。キラタルシウニヤムはアルシウナ(Arjuna)がクルバンダワの大戦争に、其敵を征服する力を得んがために苦行を試みたる物語なりとす。バラサは其創作的想像力若しくは聲調の佳若しくは詩句の美に於て到底カリダッサの敵にあらず。然れども思想氣力に富み、表白流暢にして精神あり。是を以て其作は之を不朽に傳ふるに足る。

第七世紀にシラヂチア二世北印度の王位に登り光彩ある統治をなせり。玄奘の印度に到りし頃には、シラヂチア二世はカノウヂ及び北印度に君臨したりき。シラヂチア二世は文學者にして、稱賛すべき戯曲ラトナブリ(Ratanabali)を遺せり。ラトナブリに比して一層注目すべき戯曲ナガナンダ(Nagananda)もまたシラヂチア二世の作なりと稱せらる。然れども思ふにラトナブリの如く其宮廷詩人の作ならん。後人はナガナンダを稱して注意すべき著述といふ、蓋し其世に存する唯一の佛教戯曲なればなり。かくて此佛教戯曲に於て、印度教諸神の佛教にて尊崇する諸現體と混ざるを見るべし。是れ此著述をして一種特別の價值あらしむるものとす。

并ヂヤダラ(Vidyadhara)族の王子ジムタヴハナ(Jimtarahana)は、ガウリ(Gauri)印度の女神を崇拜せるシダ(Siddha)族のマラヤヅチ(Malayasthi)を見て愛情を起せり。ジムタヴハナのマラヤヅチに於けるは猶ほツシアンタのサクンタラに於けるが如し。マラヤヅチは恭しくジムタヴハナを迎へ、遂に互に相愛するに至れり。

マラヤヅチは熱病に罹り、檀香木の汁を用ひ、車前草の葉にて清涼を感ぜり。ジムタヴハナは其心を傾けたる處女の肖像を畫かんとし、彩色に用ゐる赤砒石を求めしが、其伴侶は地より其數片を拾ひきたりしかば、由て以て青、黄、赤、茶、雜の五色を得たりといふ。吾人は是によりて古代の印度人が其繪畫に色土及び鑛物を用ゐたること、ポムペイ(Pompeii)の古代畫家に異ならざりしを知ることを得。

マラヤヅチはジムタヴハナの繪畫を見て其愛する他の處女の肖像なりとし、乃ち嫉妬失望を感ぜり。此間にマラヤヅチの父はジムタヴハナに使を遣はし、是に勸むるに其女を娶らんとを以てせしが、ジムタヴハナは其見たる處女の王女なることを知らざれば、意中の人に忠實ならんが爲めに其提議を拒めり。然れども誤解は幾許もなくして解け、ジムタヴハナは其愛情を起したる處女の眞にマラヤヅ

チなるを知り、マラヤヅチはまたシムタヅハナの繪畫の己の肖像を畫けるものなるを發見せり。是に於て兩者の間に約整ひ、盛大なる結婚式舉げられぬ。

此祝宴に宮廷の一食客セカラカ(Sekarakka)は、豪飲の結果一場の喜劇を演ぜり。セカラカは揚言していはく、吾の尊崇する神二柱あり、バラデヅ(Baladeva)及びカマ(Kama)即ち是なりと。バラデヅは其大酒を以て有名なる印度教の神にして、カマは愛を掌る神なり。かくてセカラカは酔歩踉蹌、其愛する一奴隷を見んがためにいてゆきしが、其情婦に遭はずしてシムタヅハナの伴侶たる一婆羅門に遭へり。時に婆羅門は昆虫を防がんがために其衣服を被ふりしかば、一見覆面の女子に異ならざりき。故を以て醉眼矇眊たるセカラカもとより是を知らず、乃ち見て以て其情婦となし、誤りてこれを抱擁せり。然るに紛擾はセカラカの情婦の登場するに及んで更に甚だしきを致し、セカラカは他の處女に愛を求むるものなりとて其情婦の責むるところとなれり。婆羅門は、黄褐色の猿猴なる嘲罵を受け、その聖糸を裂き、難を免れんが爲めに奴隷の脚下に伏して謝すべきことを提議せり。されど事遂に分明しぬ。新郎新婦は青春の愛に酔へり。新郎は慇懃に接吻を求めて

いふ、噫愛すべきマラヤヅチよ、卿の玉顔が淡紅色の光を放ちて日光に照されたるに似、嫣然其皓齒を露はして一笑するとき、柔軟なる雙頬の幼毛是に映ずるの狀眞に蓮花に異ならずとせば、何ぞ蜜を吸ふ蜂を是に見ざるの理あらんやと。然れどもシムタヅハナは其王國に關する新報知のために、其最愛の新婦に別れて故郷にかへらざるべからざるに至れり。

此物語は他の印度戯曲の物語に同じ、然れども最後の二段は實際佛教的にして、眞に獻身の徳を明かにするものとす。而して其獻身的行爲の極端にして、常規を逸するは是等物語の常套なり。

シムタヅハナは西方ガトに赴き、鳥王ガルダ(Garuda)の殺す所となりしナガ(Naga)の骨を海濱に見ぬ。ナガは蛇なり。然れども印度教及び佛教の詩人は是を以て鱗と頭被とを除きて他は人間の如き形狀を有するものとせり。而して一ナガは日々ガルダに食物を送らんがために涙にむせぶ其母を制して自ら其肉を裂けり。シムタヅハナ是を見て腸爲めに九折し、ナガに代りて殘忍なるガルダに其身を捧ぐるに決せり。是に於て鳥王ガルダはシムタヅハナと共に飛び去りぬ。

ナガの走りてテムタヅハナの其身をガルダに捧げたるを報ずるや、テムタヅハナの家族是を聞きて愁傷慟哭し、其老父母及び其新婦は、ガルダの尙ほ其肉を食ひつゝある所に電馳せり。誠實なるナガは亦急にガルダの許に走り、無邪氣なるテムタヅハナを救はんがために自ら其身を捧げしかば、ガルダは其過を覺りて戰慄し、嗚呼彼の慈悲に富むや、狼食飽くことを知らざる吾が餌に落ちたるナガの生命を救はんがために、好んで自ら其身を吾が食物として送れり。吾が犯したる罪の如何に恐るべきよ、換言すれば吾は菩薩(Bodhisatva)を殺したるなりといへり。テムタヅハナはガルダに教ふるに罪を償ふの道を以てせり。「長へに殺生するを止めよ、前非を悔ひよ、總べて生あるものに傳ふるに信を以てし、由て以て善行の斷つとなき鎖を繋ぐに努めよ。尊むべきテムタヅハナは是等の教訓を遺して死せり、蓋しガルダは殆ど其の肉を食ひつくしたればなり。テムタヅハナの父母は是を悲み、現世を去らんがために火場に登る準備をなし、悲歎の涙にむせぶ年少寡婦は其結婚前に禱りたる女神ガウリに禱れり。是に於てガウリはテムタヅハナのため、に其生命を恢復し、ガルダはインドラに説きて其殺したるナガの生命を悉く復舊せり。

之を要するに生物を害することなかれとは此佛教戯曲の道德なりとす。有名なる小説家はまた此時代に世にいてたり。古代の諸國民が印度を知りしは、其科學及び詩歌よりも寧ろ寓意譚及び小説の産地としてなりき。世界到る處に傳播せる最古のアーリア寓意譚は、佛教のジタカ(Jataka)物語にあり、ジタカ物語は西紀前に成りたるものなりといふ。而してリステネソ(Rhys Davids)博士は、是等の寓意譚の多くヨーロッパに傳はり、種々の近代説話の形を取りたることを詳説せり。

パンチアタントラの寓意譚は思ふに其編纂せらるゝ前、數百年間印度に行はれたるならん。パンチアタントラの編纂は第六世紀前に起りたること疑なし、何となればパンチアタントラは第六世紀にヘルシア人の翻譯する所となりたればなり。此後パンチアタントラはアラビア、ギリシア及びヘブライ等の諸國語に翻譯せられぬ。イスパニア翻譯は第十三世紀に、ドイツの翻譯は第十五世紀に世に出づ。其後パンチアタントラはビルバイ(Pilday)若しくはビドバイ(Bidpay)の寓意譚の名を以てヨーロッパ諸國の國語に翻譯せらるゝに至れり。

パンチアタントラの寓意譚は簡單にして興味に富み、其文章平易素朴なるを以て著るし。而してパンチアタントラを讀みて更にシラヂチア二世時代に於ける小説家の巧緻なる文體と比較せば、第七世紀に於けるサンスクリット散文の變化を見るを得べしといふ。またダンチンのダサクマラチアリタ (Dasakumaracharya) は其文體巧緻にして綺麗なり、思ふに第七世紀に成りたるものならん。然れども最も此時代の文體の長所と短所とを現はすこと著しきものを、シラヂチアの「一廷臣バナバタ (Banabhatta) の筆に成りたるカダムヅリ (Kadamvari) とす。カダムヅリの物語は荒誕不可思議にして、篇中の主人たる男女の燃ゆるが如き熱情、激烈なる鬱悶、抑ゆべからざる戀愛及び荒寥たる幽所に於ける難行の力ある描寫は、實に稀に見る所のものなりとす。然れども其文體の修飾に勞せる、通常の道理を以て量るべからざるものあり。妄りに形容詞を用ゐて修飾を事としたる結果、文章冗長を來せしが如き例は殆ど毎頁に見ることを得べし。短篇の小説「ワサワダタ (Vasavadatta) は、シラヂチアの世にスバンツ (Subandhu) の著はしたるものとす。シラヂチア時代の詩歌にして今日に存するものまたなきにあらず、バルトリハ

リ (Bhartrihari) のサタカ (Satika) の如き是なり。サタカは印度詩人の作中、其絶句的なるを以て有名なるものにして、作者バルトリハリの印度教徒なりしにも拘らず、其詩は佛教的精神を現はし居れり。左に其一對の翻譯を示さん。

「誠實及び慈悲より離るゝことなく、生涯耻辱に屈することなく、貧しきものよりは贈物を受けず、悪しきものよりは譽を求めず、高尚なる信仰及び傲慢なる服従を、持するものは、眩む運命の架上に、狭きこと劍の刃にも似たる義務の道を踏みて誤らざることを得べきか。殺生すること及び他人の妻と語ることを戒め、僧侶を愛し、誠實及び寛仁なる贈物をなし、願望及び貪慾を斷つは幸福に到る道なり。此道や各人の共に歩むべき道にして、單獨と雖も迷ふが如きことなし。」

「奸矯は最暗黒の罪惡なり、貪慾は邪惡の世界なり、誠實は苦行よりも貴く、清淨は献供よりも貴し。慈善は第一の徳なり、高貴は最美の裝飾なり、智識は助くるものなくして勝ち、死は衆の輕侮を受くるに勝る。」

「卿は國土の君主なり、然れども吾等は詩歌の君主なり、卿若し強者を服すれば吾等は奸者を服せしむ、卿の富は語りつゝあり、吾には堅く信ずるものあり、卿若し吾

に飽かば吾は乃ち去らん。

「エダ若しくは法典若しくは長々しき古傳記を二讀三讀して何の利益かある、吾等の功徳によりて、何ものをか得る、天上の住所か、本心あるもの、蔑視する痛ましき住所か、是等は皆奸猾なる方法なり、吾に苦痛の去りし自足の完全なる道を與へよ。」

バルトリハリはまたバチカギア(Bhaktikavya)の著者としてバチ(Bhakti)の名あり、バチカギアは讀者をして最も困難なるサンスクリット動詞の變化に熟せしめんがために作りたるラマヤナの物語なり、故に實際文法を教ふるために作りたる稱賛すべき詩歌的著述なりとす。

シラヂチアの時代より一百年を過ぎて、名聲功績共にカリダサに敵すべきバブナ(Bhavabhuti)いてたり。バブナはムラルに生まれ、幾許もなく當時印度の文學及び政治上の首府たりしかノウツの朝廷に仕へぬ。バブナのマラチマダブ(Malimadhava)は勇敢なるムラルの青年がウヂアインの宰相の女を愛し比類なき幾多の冒險をなしたる後、遂に其望を遂げたることを記述したるものなり。バブ

ブナの作には此他にマヒギリチアリタ(Mahaviri Charita)及びウタラマチアリタ(Uttara-Rama Charita)あり。マヒギリチアリタはラマの少時より其セイロンに戦ひてシタと共にオウドにかへるまでのラマヤナの物語なり。ウツタラマチアリタはシタの追放に遭ひて後赦さるゝまでのラマヤナの物語にして、サンスクリット語の文章中最も悲愴有力なるものとす。温順なるシタの戀愛及び自らシタを追放せるラマの失望、其後の激烈なる悔恨に關する記述は古今の傑作なりとの評あり。是等の戯曲中、其脚色最も創始的なるものをマラチマダブ(マラチ及びマダブの愛)とす。マダブはギダルバ(Vidarbha)ムラルの宰相デブラタ(Devavata)の子にして、遊學のためにパドマプチ(Padomavati)ウツアインにきたり、一日其街路を行きしに、パドマプチの宰相の女マラチ(Malati)は其窓扉よりマダブ(Madhava)を睥視せり。「マダブは美なること愛の神の如く、マラチは花を欺く新婦の如し、偶々年々舉行する愛の神の祝祭ありて、パドマプチの人民は恭順を表せんがために其神龕に群集せしかばマラチもまた象に乗りて神龕に赴きしが、時恰かもマダブに遭ひて互に相愛するに至れり。然れども眞の愛や其進むこと滑かならず、パドマプチ王は其一龍

臣ナンダナ(Nandana)にマラチを妻はさしめんとせしに、マラチの父は是を拒むこと能はざりき。マラチ是を聞き驚き且つ悲みしが、佛教の二比丘尼カマンダキ(Kamandaki)は是を憐みていはく、如何にして吾はマラチを救ふとを得ん、運命と其君父とはマラチに逼るるに従順を以てするのみ。眞にクシカ(Kusika)の女サクンタラは其自ら定めたる夫ツシアンタに愛を授けたり。天上の少女ウルブシは地上の國王ブルラヴヌに許し。楚々たる王女ヴサヴダタ(Vasavadatta)は其父の定めたる夫を蔑み、王子ウマヤナ(Udayana)と手を携へて逃亡せり。詩人の語る所是くの如し、然れども是等は失望の行爲なりと。バヴブチは其先輩カリダサの手に成りたる二篇及びシラヂチア二世の朝廷にて小説及び戯曲の通俗なる題目たりし、ヴサヴダタの物語を参照したること充分明かなりとす。

かくて比丘尼はマラチ及びマダヴを助くるに決せり。マラチ及びマダヴは比丘尼の家にて相逢ひしが、既にしてマラチは王妃の命によりて其家に來ること能はざるに至れり。マダヴは失望し、其目的を達せんがために神怪不可思議なる方法に頼るに決しぬ、バヴブチの天才は莊嚴若しくは凄愴を描くに最もよく煥發せ

るを見る。

死者の遺骸焼かるゝ野に恐るべき女神ナムンダ(Chamunda)の殿堂ありて、髑髏の頸飾を着けたる惡比丘尼カバラクンダラ(Kapala Kundala)は其崇拜に従事しつゝあり。マダヴは其目的を達するに幽靈の助を假らんとして其殿堂に赴き、幽靈及び妖魔に其生肉を捧げて叫べり。

「雜然群を成す惡魔の圍む所となりて恐怖措く所を知らず。四邊を眺むれば火場の焰は其肉多き餌食のために遮ぎられて、是を圍む恐るべき暗黒を拂ふに其陰鬱なる光を透さず。蒼白なる幽靈は汚穢思むべき妖魔に戯れ、清銳耳を貫くが如き應答をなして相歡ぶの音四邊に反響せり。遮莫吾は彼等を求めて述ぶる所あらざるべからず。此所に往來する不祥の惡魔及び肉體を離れたる精靈よ、吾は汝に賣るべき肉を持來れり、其肉たる銳利なる刃に觸れずして、汝の嘉納に價する人肉なり〔大音聞ゆ〕何ぞ喋々相談する精靈の清銳不分明の高音、屍を藏むる地に充つるや。狐の如き異形は其瘦軀の赤毛より、或は無數の牙簇生して耳より耳に裂くる其口より、或は眼、或は髯、或は眉より、流星の如き光焰を急射して空に飛びされり。

閃光流れて吾れ今妖魔の大象を見る。

彼等は吾の來れるを視て、其半ば噛みたる一片の肉を、咆えくらふ狼に落して飛べり、歩を停めて四邊を見る、怯懦惡むべき種族よ、凡べて掠むるには全き暗黒に於てす。河は吾が前に流れ、其進路を妨ぐる腐骨を繞りて葬場の界をなし、其激して去るや、急流奔放、粉砕せる河岸を破る鼻は樹林に啼き、狼は高くまた長く叫びて是に應ず。

不意にマダヴは不幸を悲む年少女子の聲を聞けり。

噫、残酷なる父よ、汝が國王の寵臣の供物たらんことを望みたる彼女は今死せんとす。

聲はマダヴの耳に徹せり。マダヴは急に殿堂に進み、犠牲の装をなしたるマラチの殆どチャムンダの惡比丘アゴラガンタ(Aghoraganta)のために殺されんとするを發見しぬ。タントリカの儀式には處女の献供を要求するものあり、故にバトマヴチ市中最も美麗にして最も清淨なるマラチは此献供のために掠められたるなり。然れどもマラチは如何にして其掠められたるかを知らず。

マラチはいはく、吾は日暮地上に憩ひき、覺めて乃ち囚人たるを發見せりとマダヴは其愛するマラチを救ひ、惡比丘を殺せり。然れども要比丘尼カバラクンダラは更に復讐を誓ひ、是に次ぎて偶然に起れる幾多の事變あり。ナンダナの姉妹を愛せしマダヴの朋友マカランダ(Makaranda)はマラチに假裝してナンダナに嫁せり。切にマラチを愛する新郎ナンダナは、是に於て其新婦に愛を求めんがために來りしが、新婦の腕強硬にして曲ぐべからず。時にナンダナの姉妹は義姉妹に愛情を表する良法を教へんがために來り、計らずも其愛するマカランダの新婦に扮せるを發見せり。かくてマラチとマダヴとマカランダとナンダナの姉妹とは手を携て逃亡せしかば、國王は大に怒りて是を捕へんために其護衛兵を送れり。然れどもマダヴ及びマカランダが追兵を撃ちて是を却くるに及び、國王は其剛勇に感じて其罪を赦せり。

マラチとマダヴと、マカランダとナンダナの姉妹とは、國王の許可を得て結婚せり、故に戯曲は是にて終りたるものとす。然れどもバヴチは其物語を延長して、自然及び感情に關する有力なる記述をなせり。バヴチの描きたる偶然の事變

及び脚色は例の如く不自然にして常規を逸す、然れども其記述の有力に至ては古今無比なり。マラチは再び悪比丘尼カバラクンダラの掠むる所となり、マダブは是を捜索してギンドヤ山に赴けり。然るに此時ヨガの行を修して玄妙不可思議の力を得たる以前の佛教比丘尼サウダミニ(Saudamini)は、マダブを憐みて是を助くるに決しぬ。而して作者バヴブチはサウダミニの口を假りて曰く、「何を眺望絶佳なる風景の闢けたるや、山あり、岩あり、市府村落あり、森林及び洗洋たる河流あり、バラ(Pala)、シンヤ(Sindhu)兩河の帶する所塔及び殿堂、門及び尖閣、天空より落下したるが如きバトマヴチ市の筆狀塔、清透なる波浪の間に隠見するあり。ラヴナ(Lavana)邑の水流るゝ所、其樹林は雨を得て清新の趣を呈し、バトマヴチの青年に愉快なる散策所を供す。而して驟雨に濡れて輝ける其牧草の上には、乳房重き牝牛欣々として嚼めり。聽け、如何に廣きシンヅの河岸が、地を穿つ流のために、雷を載する雲の音をなして碎け落つる力を、其響は廣きに亘り、空洞に反響して深きを致すヘラムバ(Heramba)の怒號の如く、山の周圍を反響して漂ふ。香氣馥郁たる檀香木と、成熟せるマルラ(Malua)との密林を装ひたる是等の山は、南方に走る高山、ゴダヴリ(Godavari)の怒れる反響を傳へつゝ、暗黒幽邃なる森林に閃めく所を想起せしむ。」

サウダミニは其魔術の力にてマラチを救ひ、マラチとナンダナの姉妹とはマダブとマカラランダとに嫁しぬ。

バヴブチは半クラマチア時代の最後の詩人にして、カノウジのヤソヴラマンの朝廷に仕へたりき。然れどもヤソヴラマンのカシミル王ラリタチアの破る所となるや、バヴブチはカシミル王に伴はれてカシミルに至れり。思ふに第八世紀の中葉カシミルにて其生を終りたるならん。

此後三百年間の暗黒時代には、科學者若しくは文學者の名あるもの世にいでず。而して第十一世紀の終に、近代のラデプト族印度の君主となるに及び、近代印度文化の歴史は其端を發せり。

第三篇 中古史

第一期 イスラム時代 上(七一四—一五二六年)

第二十五章 初代のイスラム教征服者

印度教は一時、一〇〇〇年の頃印度に來りしイスラム教征服者のために其勢力を失ひしも、而かも決して滅亡するに至らず。現に印度の南部は殆ど全く印度教徒にして、其封建諸會長の大多數は尙ほ婆羅門勢力の下にあり。然れども侵略の波動が常に打寄せし西北部にては、イスラム教を奉ずるもの全住民の約三分一に及べり。ガンガ河上流の谿地にはイスラム教の諸首府相連り、ベンガルの低地にては非アリア族(本土人)の大半イスラム教に改宗したりき。故に今日印度に於てイスラム教を奉ずるものは、其總人口二億八千八百萬の内五千七百萬なりとす。今や是より進んでモグル帝國の勃興以前、印度の北部に於ける初代イスラム教征服者の事を記さんとするに當り、先づ便宜上、中古印度史の大半を構成するイス

ラム教諸王朝の年代表を左に掲げん。

イスラム教征服者及び王朝略表

一〇〇一—一八五七年

| | |
|---|---|
| I. Ghazni 朝 (Türk人) | V. Tughlak 朝 (Punjab の Türk人) |
| 1001-1186. Ghazni の Mahmūd と Sultan Khusrū に至る | 1320. Ghiyās-ud-din Tughlak. |
| II. Ghor 朝 (Afghán). | 1325. Muhammad Tughlak. |
| 1186-1206. Ghorの Muhammad (Shaháb-ud-din). | 1351. Firuz Sháh Tughlak. |
| III. 奴隸諸王 (主として Türk人) | 1414. Tughlak 朝の滅亡 |
| 1206-1290. Kutab-ud-din と Balban 及び Kaikubád に至る | 1398. [1398-1399 に Timur (Tamerlane) 兵を率ゐて Delhi に侵入し 1414 Sayyid 王の即位に至るまで Tughlak 朝の最後十五年間印度を無政府の状態に陥る] |
| IV. Khilji 朝 | VI. Sayyid 朝 |
| 1290-1320. Jalal-ud-din と Nasir-ud-din Khusrū に至る | 1414-1450. Delhi 王國にして權勢振はず |

VII. Lodi 朝 (Afghan).

1450-1526. 治世振はず獨立邦漸く多きを加ふ

印度に於て佛教其勢力を失ひてより印度教是に代りしが、此間に新信仰アラビアに起りぬ。イスラム教即ちムハムメド教是なり。イスラム教の教祖ムハムメドは五七〇年に生まれ新宗教をひらき、六三二年に死せり。然るに其教徒は教祖の死後百年間に、亞細亞諸國を侵略して遠くヒンヅクシ (Hindu Kush) に至りき。而してイスラム教徒はヒンヅクシに至りて其進軍を停め、爾後三百餘年間、充分印度の寶庫を略奪するに至るまで其勢力を養へり。然れども富裕なる印度帝國は、殆ど初めよりアラビア人の注目せし所にして、其早きに過ぎし數次の侵入は、將に來らんとする大暴風雨を豫言するものなりき。

ムハムメドの死後約十五年、オスマン (Osman) はボムベイ海岸のタナ (Tana) 及びプロアク (Broach) に遠征海軍を送り、思ふに是れ六四七年の頃ならん。其後六六二年及び六六四年にまたアラビア人の侵入ありしが、而かも永久の結果あらざりき。七一一年カシム (Kasim) は印度の一港にて捕獲せられたるアラビア船の損害を要求するためにシンドに進み、勝利を得てインドス河の谿地に其權力を植ゑぬ。

然れどもイスラム教徒の進軍は一にカシムの勇氣に係るものなりしに、七一四年カシム死せしかば、其企是がために中止せり。此時必死を極めたる印度人の勇氣は、アラビアの侵略者をして一驚を喫せしめたり。ラジプト人より成る一隊の守兵は、假令全軍殲滅するも尙ほ降服するに勝れりとなし、一大火坑を築きて婦女幼兒を是に投じ、乃ち齋戒沐浴して嚴肅なる告別をなし、然る後、諸門を開きて敵軍を衝き、竟に全軍悉く戦死せり。傳へいふ七五〇年、ラジプト人は、シンドのイスラム教知事を放逐したりと、然れども印度人のシンドを恢復せしは八二八年なりとす。イスラム教徒はヒンヅクシの西に當れる中央アジア、ペルシア地方を侵略し、また遠くアフリカ及び南ヨーロッパ (イスパニア及びフランスに至る) に其新月旗を翻し、然る後印度に來りて其立脚地をアンジアブに求めぬ。而して其印度侵略の遷延は、畢竟前に述べたるが如き印度諸部族の勇敢と、印度諸王國の軍隊組織とによるものなり。當時に於ける印度の形勢は、ギンドヤ山の北には獨立せる諸侯伯の三群ありてガンガ河谿地に統治し、ラジプト人はインドス河の平原を通じ、ジウムナ河の上流に沿ひて西北を統治せり。ガンガ河谿地に於ける梵語時代の古中央

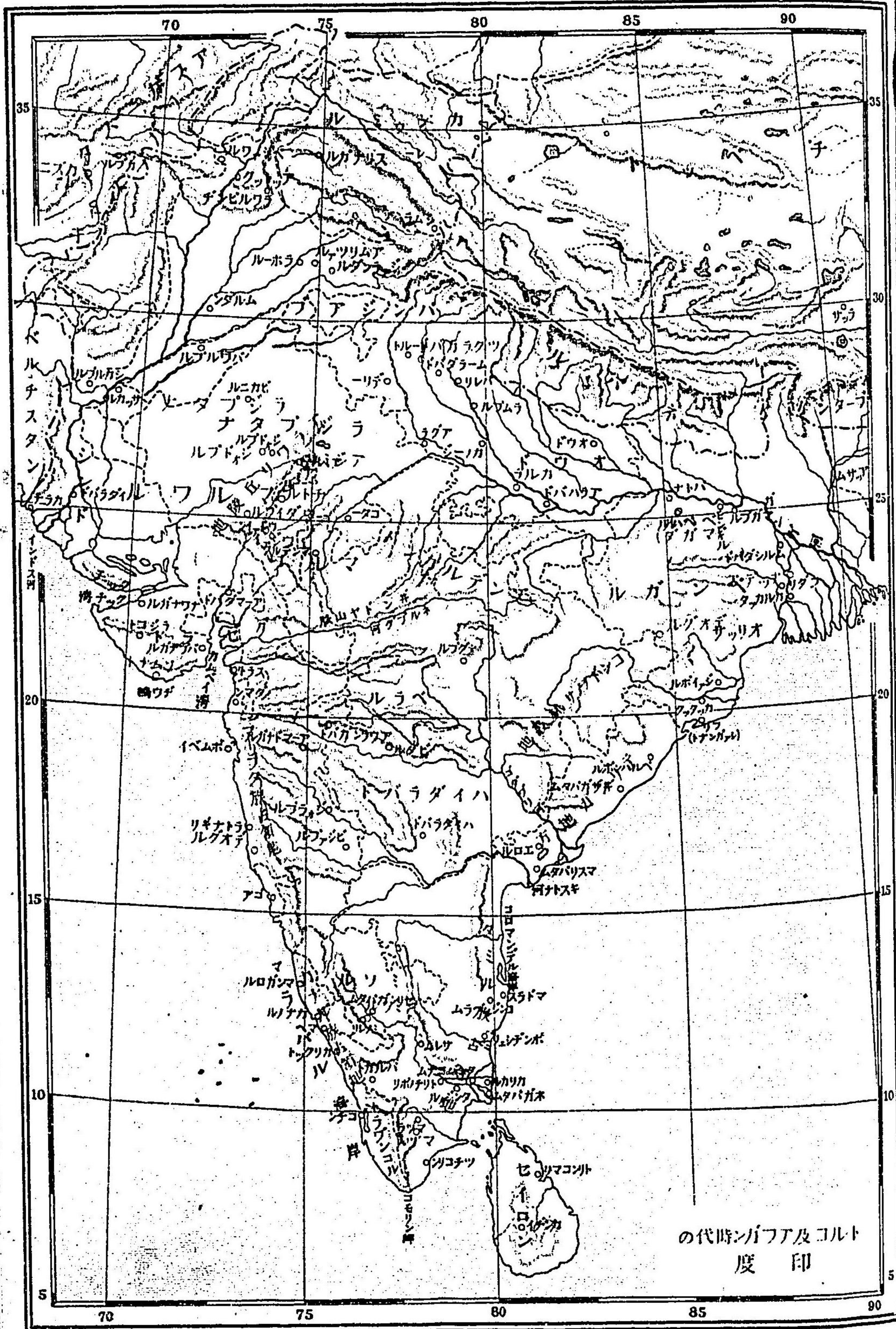
地〔マドヤデサ(Madhyadesa)〕には有力なる印度諸王國ありてカナウツシ(Kanau)是が覇權を握り更に低き谿地の一部にはバル(Bal)諸王〔佛教諸王〕統治しき。而してバル諸王はベナレスよりベンガル三角州に於ける數地の小村落に割據せり。ギンドヤ山脈は印度を南北に平分し其間に森林及び山嶽の牆壁を形成し其東部及び中部諸地方は兇暴なる部族の住居たりき。ボムベイ海岸に至るギンドヤ山脈の西極にはマルワの印度王國ありて、ギクラマヂチアの光彩ある文學的傳説及び勇敢なる戰士の封建的大部隊存せり。ギンドヤの南に至る印度は主もに慄悍なる非アーリア諸王の據る所なりき。而して是等の諸王は半印度教にして半佛教徒なる、チハラ(Chera)、チカラ(Chola)及びバンヂア(Bandya)三王朝に隸屬しぬ。

以上の諸王國は南北共に外敵に抵抗すべき團結力を有し、侵入者をして幾たびか其成功難を歎ぜしめたるものとす。印度の霸主〔中心的權力〕亡びてすら、是等の諸王國は互に選任して敵に當り、互に中心となりて騷亂を起し、以て其征服者に抗したりき。故を以て七一一年ギンドに永久の王朝を創始せんとせしイスラム教徒の壯舉は、是等諸王國のために遂に失敗に終り、此後三百年を経て西北より來り

しイスラム教の侵略者は、攻戰甚だ力めしも、僅かに九七七年より一一七六年に至るの間に、ブンジアア國境諸州の小部分を併呑し得たるに過ぎず。南印度に於ける印度人の權力は、一五六五年のタリコト(Talikota)戦争まで全然亡ぶるに至らざりき。其後百年を経て一六五〇年印度人は其權力を恢復し、マラタ(Maratha)同盟を形成して印度に於けるモグル帝國を破壊せり。モグル帝國は印度の北に於てすら印度諸會長を結合せしアクバル(Akbar)の政略及び其政府の政治家によりて僅かに其國運を維持せしのみ〔一五五六—一六〇五年〕。アクバル統治の初年には、ラジプト人は絶えずイスラム教徒と戦ひて主權を争ひしが、アクバルの死後二百年ならずして、モグル朝の後嗣はデリーに於いてヒンヅマラタの虜となりぬ。

印度が容易にイスラム教徒の手に落ちたりといふ俗説は歴史的事實に反す。印度に於けるイスラム教徒の統治は、約六四七年オスマンの入寇より、一七六一年アーマド・シヤ(Ahmad Shah)の劫掠に至る千餘年間、間斷なき侵略及び部分的征服より成るものとす。イスラム教徒たる中央アジアの諸部族の東南に漲溢したるは、猶ほヨーロッパにフン(Hun)族、土耳其族及び他の諸部族の同一發生地より西方に移動

第七圖



したるが如し。イスラム教徒は未だ會て印度全國を征服したることなく、印度諸王朝は終始其大部分を統治せり。イスラム教徒の權力甚だ振ひし時には印度諸侯伯是に貢を獻じ、其朝廷に代表者を送りしも、其後に成りたるデリーのモグル帝國の主權すら、一世紀半(一五六〇—一七〇七年)以上永續せざりき。而かも此短き時代の終る前印度人は其權力恢復を開始し、ラジプタナの印度騎兵は東南よりデリーに迫り、シク(Sikh)の宗教同盟は西北に於いて勢猖獗を極めつゝありき。印度劣等種姓の戰鬪力に婆羅門の政治能力を結合せしマラータ人は、南印度のイスラム教王國を降して是を朝貢國となせり。故に今日よりして是を見れば最近百年間イギリスが其權力を印度に増せしは、偶々モグル帝國をして印度人の復讐を免れしめたるものといふべし。

第二十六章 ガズニ朝

ブンジアブ國境に於ける印度教とイスラム教との最初の衝突は、もと印度人の挑めるものなりき。九七七年ラホル(Lahore)酋長シアイバン(Jairah)はアンガン人の

入寇を憤りて、イスラム教を奉ずるアフガニスタンのガズニ(Ghazni)王國を撃たんがために山を越えて其兵を進めぬ。然るにガズニ王スプクチギン(Subuktagin)は數回の戦争の後、暴風の助を得て印度人の退路を扼し、其五十頭の象を奪ひ、また百萬デラム(Dharam)約二十五萬圓の償金を約して是を印度に歸らしめたり。傳説によればシアイバルの赦されて其首府にかへるや、婆羅門は是に勸むるに償金を贖人に拂ひて自ら辱しむるなからんとを以てし、貴族及び酋長(戰士)はまた其約束を守るべきことを請ひたりと。スプクチギンは遂に償金を迫らんがために、山を越えて印度に侵入し、シアイバルと戦ひて是を破り、二万匹の馬と共にアフガン士官を駐めてペシアワル(Peshawar)を守らしめぬ(九七七年)。既にしてスプクチギンは中央アジアに戦はんがために退き、印度にはペシアワルの外營を殘せしのみなりしが、此後カイバル峠の兩端はアフガン人の有する所となれり。

九九七年スプクチギン死し、其子マームド(Mahmud)十六歳にして位を繼ぐ。マームドは勇敢にして統治三十年に亘り、其父のアフガン小王國を擴めて西はペルシアより東は遠くブンシアの内地に至れり。而してマームドはアフガニスタ

ンに於ける自家の権力をカイバル峠の西に鞏むるに四年を費し、然る後一〇〇一年始めて印度侵略を試みしが、是等の侵略は前後合せて十七回に及べり。十七回の侵略中、其十三回は西ブンシアアの征服を目的とし、其一回はカシミルを攻めて勝たず、残餘の三回は更に遠くカナウジ(Kanauj)、グワリオル(Gwalior)及びソムナト(Somnath)に對して兵を出し、其劫掠最も激烈を極めたりき。シアイバルは此時またマームドのために破られしが、印度の習慣に従へば二回敵の征服する所となりし君主は、其國を統治する資格なきものなるを以て、シアイバルは意を決して火壇に登り、嚴肅なる式を以て王位を其子に譲り、自ら王の服を着けながら焚死せりといふ、其他の地方酋長中には降服を屑しとせずして自刎せしものもあり。第六回の遠征(一〇〇八年)には、印度の貴女は其裝飾品を賣り、貧窮なる婦女子は綿を紡ぎて以て其糧食を戦場の夫に供し、爲めに侵入軍の運命甚だ危急に迫まれるとあり。此時マームドは印度の諸王が遠くオウド及びマルワの地より來り會せるに驚き、ベンシアワル附近に濠を穿ちて以て自ら守りき。次いでマームドは城内の兵を進めて敵を衝きしが、却て印度軍の破る所となり、兇暴なるガクカル(Ghakkhar)族は其

陣營に突進して約四千のイスラム教徒を屠れり。

然れどもマームドの遠征は歩一步印度に於けるイスラム教徒の立脚地を鞏固にしき。マームドはタネスワル(Thaneswar)及ナガルコト(Nagarkot)の印度教殿堂より許多の分捕品を得、次いで一〇二四年に於ける最も有名なる遠征(第十六回)は、其目的グジャラト(Gujarat)に於けるソムナトの殿堂を破壊するにありしが、マームドは此時數回の血戦を以て漸く其市街を占領し、印度守兵は殊死して防戦に力め、遂に五千の死體を残して海に遁れぬ。有名なるソムナトの偶像は、十二リンガ(印度の諸所に建てられたるシヴァ崇拜の表章)の一に過ぎざりしも、マームドは是を毀ちたるより(偶像破毀者)の名を得、是によりて近世のヘルシア史家はソムナトの掠奪を以てマームドの敬神的熱心に歸す。當時の記録によればソムナトの偶像は黒色の天然石なりしといふ、然るにブリシタ(Brishita)の記する所に曰く、マームドの殿堂に入るや、其僧侶等是に請ひていはく、若し堂内の偶像を保存するとを許さば巨額の償金を呈せんと、然れどもマームド是を肯せずして曰く、予は偶像の賣却者としてよりは寧ろ破毀者として記憶せられんと、乃ち手づから鉞を以て是を碎きし

に、其命門より無量の價値を有する寶石現はれ出でたり。是等の寶石は即ち價金に關する僧侶の提議を説明するものにして、マームドの計らずも是を得たるは其敬神の念深かりし報酬なりと。此寓意譚の信を措くに足らざるは明なるも、今日尙ほ印度人中には信ずべきものとして屢、之を反覆するものあり。マームドはソムナト殿堂の門及びシヴ崇拜に用ゆる表章の片碎をガズニに持歸りしが、途インドス河の砂漠に於て其軍隊と共に始ど埋没せり。然れども此後一八四二年イギリスのエンンボロー(Ellenborough)卿は勝利標として所謂ソムナトの檀香木門をガズニより齎し、北印度の全部に是を誇示せしが、此門の偽物たるとは猶ほ偶像の命門より寶石現れ出でたりといふ物語と同一なりとす。

マームドは一〇三〇年を以てガズニに死せしが、其十七回の印度侵入と二十五年の戦争との結果として、ブンジャブの西部諸地方をガズニ王國の配下に收め、東は遠くカナウジ(Kanauj)南はグジアラトに至る北印度の全部に其記念を残せり。マームドは曾て印度居住の知事を置かざりき。其ブンジャブを越えて試みし遠征は、嚴正なる征服事業といふよりも、寧ろ殿堂市邑を劫掠し、若しくは偶像を破毀

するを目的とせし十字軍的武士の冒險といふべし。然れども其父スブクチキンがガズニの守兵をベシアワルに留めしが如く、マームドはブンジャブを以て其アフガン王國の屬領となせり。

イスラム教徒の手になれる史籍には、唯にマームドの武勇及び敬神につきてのみならず、また其事蹟につきての物語多し。一貧女あり、一日其子の盜賊のため、イラク(Irak)の砂漠に殺されたるを訴ふるや、マームド曰く、予は甚だ是を悲む、然れども予は首府を去ると遠き砂漠に起りし此種の事變を拒ぐと難しと。老齡の貧女是を難じて曰く、然らば正當に統治し得る以上の領地を有する勿れと。マームド乃ち貧女に金銀を贈りて是を宥め、また砂漠を横ぎる其隊商を保護せんがため、に軍隊を送れりといふ。マームドは詩人の保護者にして大詩人フェルドウシ(Ferdowsi)を其宮廷に迎へき。マームドは喜びてフェルドウシのシアーナマー(Shah-nāmah)「王書」の編纂に聽き、乃ち是に約して曰く、若し是を完成するに於ては毎句報酬として金一ディラム(dināra)を與へんと。是に於てフェルドウシは苦心三十年の後、其詩を完成して報酬をマームドに要求せしに、マームドは其詩の六万句より成れるを見

銀六万デラムを是に與へて以て金のデラムに代ふ。フェルドウシ乃ち憤怨して宮廷を以て一篇の諷詩を作りてマームドを罵れり。此諷刺は今日尙ほ世に存してマームドの門地賤しさを證す。マームドは此諷詩を看過せしが、而かも三十餘年の日月を費して成りし其大叙事詩を記憶し、其卑劣なる行爲を悔ひて金十萬デラムをフェルドウシに贈りしが傳ふる所によれば、マームドの使者金囊を負ひて大詩人の住する市府の門に至りしに、恰かも其死骸の運ばるるに會へりといふ。

第二十七章 ゴール朝

ブンシアブは百五十年間、印度に於けるイスラム教領としてムームドの繼承者の配下にありき。然るにアフガンの兩市府ゴール(Ghor)とガズニとの間には長き族鬪の争ありて、マームドは一〇一〇年にゴールを征服せしも、一〇五一年の頃ゴールの酋長はガズニを陥れ、其の重なる士民をゴールに引き來りて其の咽喉を切り、其血を築城のための漆灰を作るに用る、更に數回の劫掠の後、遂に一〇五二年を以てガズニを征服したり。是に於てマームドの血族をひける最後の王クスル

(Khusr)は其屬領印度の首府ラホルに通れぬ。然るに一〇八六年クスルはまたラホルを失ひ、ゴールのシアハブウツデン(Shahab-ud-din)自ら兵を率ゐて印度征服に従ひしが、印度の諸侯伯は防戦甚だ力め、其領土の或者はアフガン人の大侵略より七百年を経て今日尙ほ其體面を維持するものあり。

ゴールのムハムマド(Muhammad)は一一九一年を以て、其第一回の遠征を德里に試みしが、途上ブンシアブのタネスウアルにて印度人と戦ひ、大敗の後僅かに身を以て免かれ、其大軍散亂して追撃を受くる三十里に及びぬ。然れどもムハムマドはラホルに敗軍を集め、アフガニスタンより來りし援を得て、一八九三年再び印度に進軍せり。時恰かもラジプトには内訌ありて、舉國一致外敵に當る能はず、德里及びカナウジは、互に北印度に覇權を振はんとせし諸王國の中心なりき德里及アシメル(Ajmere)を領せしチアウハン(Chauhān)ラジプトの王は尊大なるプリトウイラシア(Pithivi Raja)大君の名を有せり。然るにカナウジに於けるラトル(Rathor)ラジプトの王、其首府は今日尙ほファルカバド(Fankhabad)に跡を尋ねるとを以てし。ファルカバド地方には五平方里に亘りて、當時の遺物たる煉化石片ありは

た古印度の馬祭の精神に基き、其霸主たることを宣するため、祭典を舉行したり。此種の祭典には其封臣賤務に服するの例にして、デリーの王は印度の他の諸王と共に守備として召集せられぬ。カナウジの王女は例によりて此間にスウヤム・ツアラ(婿選)を行ひしに、デリー王はカナウジの王女を愛せしかば他のために守衛たるを厭ひて儀式に來り會せざりき。カナウジ王は是を憎みて其嘲笑的畫像を戸の前に掛けしに、幾許もなく王女は其夫を撰擇せんがために堂内に來りしが、靜かに列座の諸侯伯を見廻して其意中の人の在らざるを知るや、傲然其前を過ぎて戸のほとりに止まり、其新婦の花環をデリー王の畫像の頭に投じぬ。世に傳ふる物語によれば、デリー王は此時不意に現はれて王女を其馬に乗せ、疾驅して其北方首府に歸りたりと。是に於てカナウジ王は大に怒り、之を捕へんがために其兵をデリーに進めぬ。古傳説に従へばカナウジ王はアフガン人を誘ひて西よりデリーを攻めしめ、是よりデリー及びカナウジの王國は殆ど亡ぶるに至れりと。ラジプト諸侯伯の不和は是をして協力一致ゴールのムハムマドに當ること能はざらしめぬ。當時トマラン(Tomara)族はデリーを、チアウハン族はアヂメルを、ラ

トル族はカナウジを各自占領したりき。是等のラジプト國は西北より來る侵入者に對して自然の防波堤を造りしも、傳ふる所によればデリー王とアジメル王との間には攻争起り、チアウハンの霸主是を統一して百八人の會長、戰士、僅かに其六十四人を殘せしのみなりと。一一九三年アフガン人は、再びブンシヤブを掃蕩し、デリー及アジメルのプリトキラシアは、戰敗れて遂に殺されしが、勇敢なる其妃はラシアに續きて焚死しぬ。ゴールのムハムマドは已にデリーを降してアジメルに進み、一一九四年カナウジ王を破れり。而してカナウジ王の死骸は其義齒の證據によりて戰場に發見せられたりといふ。時に勇敢なるカナウジのラートルラジプト族は北印度の諸ラジプト族と共に敵に降を容るることを屑しとせず、乃ち隊を成して其郷地を棄て、遁れてインドス河の砂漠に接する諸地方に移り、今日に至るまでラジプタナの名を有する軍隊的諸王國を創建せり。歴史は是等の事實を記するにペルシア史家の記述によるも、プリトキラシアの印度宮廷詩人は、別に印度諸種族の滅亡に關する愛國的詩歌を後世に残せり。此歌曲はチアンド(Chand)のプリトキラシラサウ(Pritihivaj Rasan)と云ひ、實にヒンヂ(Hindi)語もて書ける最初の

一詩歌なり。是によればイスラム教の侵入者は其運命を決せし一戦を除きて常に敗北し、其諸將は印度人のために擒にせられ、巨額の償金によりて購はれし、而かも諸酋長の内訌は遂に印度諸國をして滅亡を見るに至らしめたりと。

是等の愛國的詩歌を離れていへば、ペナレス及びガリオルは、ゴールのムハムマドの進軍せし西南の境界を表明するものとす。然れども其將バクチャル・キルジ (Bakhtyar Khilji) は、一一九九年にベハルを、一二〇三年に三角州に至る下ベンガルを征服せり。イスラム教徒の印度に近づききたるや、婆羅門はベンガルの印度王ラクシマン・セン (Lakshman Sen) に勸むるに、其首府をナヂヤ (Nadiva) より移さんとなを以てせり。然れども當時八十歳の老王は躊躇して決せざりしかば、此間にアフガニ軍は其首府を陥れ、午餐を喫せるラクシマン・センの宮殿に闖入せり。此時ラクシマン・センは靴を穿つの暇なく、直に背後の戸を排して遁れ、オリッサのプリに至りて其殘年を終りぬ。此間ゴールのムハムマドは一方アフガニスタンに出師し、一方印度に侵入せり。ムハムマドは其首府をゴールに置きしが、其印度征服を鞏むるの暇を有せざりき。ブンジ・アブに於てすら諸部族は漸く騒亂に傾き、一二〇三

年ガクカル族は其山を下りてラホルを抜き其全領地を劫掠せり。然るに其後一二〇六年ガクカル族の一部はまたインドス河に寄せきたり、其沿岸のアフガン陣營を陥れ、天幕の裡に眠れるムハムマドを殺しぬ。

ゴールのムハムマドはガズニのマームドの如き、イスラム教の武士にあらずして實際的征服者なり、而して其遠征の目的は殿堂にあらずして領地なりき。スプクチキンにはベシアワルを以てガズニの外營とし、「九七七年」マームドは西ブンジ・アブを以て其外領となせり、是れ土耳其人がガズニより印度に侵入せし純正なる結果なりき。九七七年より一一八六年に至る。然れどもゴールのムハムマドは、インドス河の三角州よりガンガ河の三角州に至る印度の北部全體を其部下のイスラム教諸將に殘し、諸將はムハムマドの死後各自立して印度の君主となれり。〔二二〇六年〕。

第二十八章 奴隸王朝

ムハムマドの印度副王クタブ・ウッヂン (Kutab-ud-din) は、デリーに於て自ら印度王

と稱し、一二〇六年より一二九〇年に至る王統を開けり。クタブはシンドより下ベンガルに至る印度のイスラム教諸將士を統べ、其名を首府に於けるクタブ禮拜堂(Kutab Mosque)及びクタブ尖高塔(Kutab Minar)に留めぬ。クタブ禮拜堂には豊富なる彫刻を施せし印度式の連柱あり。コーラン(Koran)の諸章を刻せしクタブ尖高塔の圓錐狀の塔頂は、高く空に聳えて古デリーの舊址を拔けり。クタブ・ウツデンは元來土耳其の奴隸にして、其繼承者には其武勇と智謀とによりてまた奴隸より王位に登りしもの多し、故に其王朝は普通に奴隸王朝と稱せらる。而してクタブ・ウツデンは一二一〇年を以て死せしが、是等の奴隸王の下に始めて印度居住のイスラム教君主を見るに至れり。

奴隸王朝は其創業より既に印度に於けるイスラム教徒の主權を危くする三つの敵を有し、遂に是がために亡べり。第一、其臣下たるイスラム教諸將、即ち諸州副王の叛逆、第二、印度人の叛亂、第三、主もに中央亞細亞より印度を侵せしモンゴル族の攻撃、即ち是なり。

アルタムシは奴隸王朝の最も偉大なる王、第三代にして、下ベンガル及びシンドの獨立主權者たるイスラム教知事を征服せんとせしが、時恰かも中央亞細亞よりモンゴル人の侵入するに會し、僅かに其領土を失はざることを得て、其目的を達するを得ざりき。チンギスハン(Chingis Khan)配下のモンゴル人はアフガン王の逃ぐるを追ひ、印度の峠を越えて侵入せり。然れどもインドス河のために其進路を遮られ、デリーは爲めに事なきを得たりき。アルタムシ(Altamsh)の死する前(一二三六年)、印度人は一時紛争を熄め、デリーの奴隸王朝配下の諸副王は、ブンシアブ、西北諸州、オウド、ベハル、下ベンガル、アジメル、ガリオル、マルワ、シンドを包含する、ギンドヤ山脈以北の全印度を統轄しぬ。バグダード(Baghdad)のハリフ(Khalifa)はアルタムシの世に印度を以て全然離れたるイスラム教王國と認め、貨幣を造るにデリー新帝國の認可を與へき(一二二九年)。而してアルタムシは一二三六年を以て死せり。

アルタムシの女ラジヤ(Razia)は、デリーの王位を踐みし唯一の女性にして、コーランに精通し、公務に勵み、屢、危きに臨みて屈せざりき、故に歴史にはスルタン・ラジヤ(Sultan Razia)と云へる男性の名を有せり。然れどもアビシニア(Abyssinia)奴隸な

る其厥司を愛したるがために、アフガン諸將の憤怨を沽ひ、統治三年半にして位を廢せられ、次て死に處せられぬ。

中央亞細亞より來りしモンゴルの侵略と、印度に起りし一揆とは、幾許もなく、奴隸王朝の滅亡を招けり。傳へいふ、モンゴル人は一二四五年西藏より東北ベンガルに侵入し、また一二四五年より一二八八年に至る四十三年間に、屢、アフガンよりブンジアブに進みたりと。ガクカル族及びメワット(Mewat)山民の如き印度諸蠻族はブンジアブのイスラム教諸州を掠奪して殆どデリーの城門に及べり。ラヂプト一揆の活動もまた終始イスラム教諸王朝の苦む所なりき。奴隸諸王の世、其權力に服従せしものとは、印度の北部に於てすら僅かに其一半に過ぎざりしのみ。印度人は再三マルワ、ラジプタナ、ブンデルカンド、ガンガ及びシウマナの沿岸並にデリーにも蜂起せり。

奴隸諸王の最後の王バルバン(Balban)は唯にモンゴル人、印度諸蠻族及びラジプト族と戦ひしのみならず、また其諸副王と戦へり。バルバンは若かりしとき、其宮殿に於ける土耳其奴隸四十人と、緩急相救ひ進退相援くるの盟約を結びしが、其王

位に即くに及びて此有力なる盟約を破らざるべからざるに至れり。此盟約に加はりし州知事の或者は公けに鞭たれ、他はバルバンの面前に打たれて死せり。叛逆を企てしベンガルの副王を撃ちて功を奏せざりしバルバンの將はまた絞殺せられぬ。バルバンは自らガンガ河の三角州に兵を督してベンガルの叛徒を虐殺せり。印度叛徒に對しては其殘酷殆ど名狀すべからざるものありき。バルバンは殆どメワット(Mewat)のラジプトを滅して其十万人を屠り、次に其殘黨の遁れし森林を濫伐して耕作のために土地を拓けり。此時モンゴル人は中央亞細亞に於て暴虐を肆にせしかば、アフガニスタン及び他のイスラム教諸國の君主并びに詩人は、難を避けて印度の朝廷に遁れきたりぬ。さればバルバンは一時十五國以上の獨立君主が其庇護の下にあるを誇り、デリーの諸市街を呼ぶに是等諸王國の國名(例せばバクダード、ホラズム(Khorazm)及びゴールの如き)を以てせり。バルバンは一二八七年に死せしが、其繼承者は毒殺に遭ひ、一二九〇年奴隸王朝亡びぬ。

第二十九章 キルジ朝

此年キルシ(Kirji)家のツィラル・ウッヂン(Talal-ud-din)はデリーの王位を継ぎしが、其王統は三十年間繼續して、其權力を南印度に擴めぬ。ツィラル・ウッヂンの甥アラ・ウッヂン(Ala-ud-din)はアルラハバットの附近カルラ(Karia)に知事たりしが、自ら其騎兵を率ゐてギンドヤ山脈を貫き進むこと二十里にして、ビルサ(Bilga)の佛教市を掠奪せり。次いで叛亂を企てたるブンデルカンド及びマルワの諸侯伯を撃ち、然る後デッカ(Deccan)に大侵略を試みんとし、僅かに八千騎を従へて深く南印度に進めり。アラウッヂンは途伴りていはく、吾今叔父デラルウッヂンの宮廷を逐はれ、ラジマヘンドリ(Rajmahendri)の印度王に投ぜんとすと。寛大なるラジプト諸侯伯は傳へ聞きて是を撃たざりき。是に於てアラウッヂンは、當時マハラシトラ(Maharashtra)の印度王國の首府なりしデオキリ(Dohiri)近世のダウラタバド(Daulatabad)の大市府に向ひ、不意に其市街に闖入して自ら至帝國軍隊の先鋒と稱し、許多の分捕品を收めて是を其領土ガンガ河岸に持歸れり。ガンガ河岸の領地とデオキリとは相距ること四百七十里なりき。此後アラウッヂンは分捕品を分つを名として、其叔父ツィラル・ウッヂンをカルラに誘ひ、握手に擬して是を刺せり(一二九五年)。

アラウッヂンは其分捕品を贈物若しくは慈善のために用ひ、自らスルタンと稱し統治前後二十年、南印度に其權力を擴張せり。一二九七年アラウッヂンは印度人と戦ひてグジャラトを復し、次いで一三〇〇年ジャイプルラジプトを圍みてリンチムプル(Rintimbur)を略せり。其後一三〇三年チトル(Chitor)の城寨を拔きてセンヂア(Sesodia)ラジプトの一部を服し、已にギンドヤ以北の印度人を降して更に南印度(デッカ)征服の準備をなせり。然れども其未だ大遠征を試みざるに五たびモンゴル人の侵畧を被りぬ。一二九五年アラウッヂンは其首府デリーの城壁の下にモンゴルの侵入軍を破り、次いで一三〇四年より翌一三〇五年に至るの間に、四たびモンゴル軍と戦ひて其捕虜をデリーに送り、其酋長は象をして踏殺さしめ、其兵士は虐殺せり。加之アラウッヂンは其同族間に起れる叛亂に對して同様なる殘酷の處置をなし、初には其甥の兩眼を抉りて次には其頸を刎ねぬ(一二九七年より一三〇〇年に至る)。

北方已に平ぎてアラウッヂンは南方の征服に従へり。一三〇三年アラウッヂンは其奴隸宦者マリク・カフル(Malik Kafur)をして兵を率ゐてベンガルより東南テリ

ンガナ(Telengana)の印度王國の首府ワランガル(Varangal)に進ましめぬ。一三〇六年カフルは連戦連勝してマルワ及びカンデシよりマラタ國に進み、其市府デオギリを陥れ、印度王ラムデオ(Baboo)に説くに、其新君主に忠誠を致さんがために德里に來ることを以てせり。此間アラウヂンはマルウアル(Marwar)に於てラジプトを征服せしに、カフルはマハラシュトラ(Maharashtra)及びカルナチク(Karnatik)を経て、其遠征軍を印度の極南アダムの橋に進め、其所にイスラム教の一禮拜堂を建立しぬ。此時に當り印度のスルタンは最早單純なる德里のアフガン王にあらざり、強大なる印度のイスラム教王たるに至りき。是より先き中央亞細亞より來りし侵略の三大波は北印度にイスラム教徒の一大植民を造れり。第一に來りしは土耳其人にしてガズニ諸王朝を代表し、第二に來りしは所謂アフガン人にしてゴール家はを代表す。第三に來りしはモンゴル人にしてブンジツブを征服せんとして失敗し、其多數は德里のスルタンに投ぜり。然るに奴隸諸王の世に、モンゴルの傭兵は強大なる權力を占むるに至りしかば、一二八六年遂に殺戮せられぬ。一二九二年の頃三千のモンゴル人はイスラム教に改宗し、德里の郭外に其居留地を

與へられしが、此地今尙ほムガルプル(Mughalpur)と呼ばる。然るに是等のモンゴル人は種々の陰謀を廻せしかば、アラウヂンは遂に其一方五千を殺し、其家族を奴隸に賣れり。一三二一年。アラウヂンは北印度に植民せし土耳其、アフガン、モンゴルの諸部族より無限の兵士を徴し得しかば、是はよりて其先主に比すれば遠く其軍隊を南方に送ることを得たりき。然れども其晩年印度人はグジラトに叛亂を企てラジプトはチトルを復し、多數のイスラム教守兵はデカンより驅逐せられぬ。一三〇三年イスラム教徒がチトルを略するに及び、ラジプトの守兵は降服を屑しとせずして戰死せり。ヒンデ(Hind)語の古歌曲にして今日尙ほ印度農夫の謠ふものによれば、ラジプトの女王及び一万三千の婦女等は火中に投じて死し、其壯丁は圍を衝いて敵軍に亂入し、殘餘のものは一方の血路を開いてアラワルリ(Awarri)の小丘に遁れたり。さればラジプトの獨立はアラウヂンの世に一旦中絶せしも、決して長へに亡ぶに至らざりき。傳へいふアラウヂンは其諸子を獄に投じて亂心し、其愛將カラルの毒殺する所となりて、一三二五年に死せり。キルシ家の最後の四年間其實權はヌスル・ハン(Nusrat Khan)の手に移れり。クマ

ル・ハンはもと微賤なる印度教徒なりしが、イスラム教に改宗したるものにして、是に至りカフルの功過を數へ、竟に是を殺したるものとす。かくてクスルは荒淫度なきムバリク (Mubarak) の腹心となり、次いで是を殺して其王位を奪へり。クスルは陽にイスラム教の信者と稱せしも、陰にコーランの上に坐して以て其神聖を瀆し、またイスラム教禮拜堂の説教壇を以て印度偶像の脚臺となせり。然るに一三二〇年クスルは竟に其兵士の殺す所となり、キルジ王朝此に亡びぬ。

第三十章 ツグラク朝

キルジ朝の姦臣クスルを殺せし叛徒の首領はギアス・ウッヂン・ツグラク (Ghiyas ud-din Tughlak) といひ、もと土耳其の奴隸なりしが、後ブンジブの國境知事となりしものにして、是に至り自立してツグラク王朝を創始せり。ツグラク王朝は一三九八年に於けるチムル「タメルラン」の侵略のために一時頓挫せしも、前後九十六年間繼續せり。ギアス・ウッヂンは其首府をデリーより東約二里の地に遷し、一三二〇年より一三二五年の間にあり、是をツグラカバド (Tughlakabad) と名けぬ。

ギアス・ウッヂンの嗣子ムハムマド・ツグラク (Muhammad Tughlak) は、學深く兵に長じ、且つ克己の力に富める人なりき。然れども中央亞細亞の民族より傳へたりと思はるゝ猛烈なる氣質は、是をして裁判官としては無慈悲に過ぎ、同情を缺き、言ふに足らざる反抗もムハムマドをして兇暴ならしめたること少しとせず。ムハムマドはアフガニスタンを經てブンジブを侵せしモンゴル人の歡心を得んがために、アラウッヂンの善積せし財寶を擲てり。されど其功名心の驅る所となりて、ペルシアの侵入軍を撃たんがために兵を發し、また十万の遠征軍を支那に遣はしたりと傳ふ。ペルシアに發せし兵士は給與の不足より隊伍を亂して遂に自國を劫掠し、支那に遣はせし遠征軍はヒマラヤの峠にて殆ど全滅せり。ムハムマドはまた南印度の大征服を企て、デリーの全住民を南三百五十里なるデオキリに移し、其地をダウラタバド (Daulatabad) と名けぬ。然るに不幸なる移住民はデリーに歸らんとを嘆願せしかば、ムハムマドは二回は是を許し、また二回死を以てダウラタバド移住を迫まれり。是等強迫的移住の一回は飢饉の際に起り、市民の死するもの數千に及びしかば、ムハムマドは竟に其企を斷念せり。ムハムマド已に其財庫を盡し

て已むなく黄銅の通貨を發行し、是をして強ひて銀と同價ならしめんとせり。此世紀にモンゴルのクブライ・ハーン(Kublai Khan)は支那にて夙に行はれし交鈔即ち紙幣の用を弘めしが、カイハツ(Kaifu)は此惡例をペルシアに傳へぬ。而してムハムド・ツングラクの強迫的通貨は忽にして自滅せり、蓋し外國の諸商人は無價値の黄銅を拒みて貿易爲めに中絶し、また其配下の人民納税に黄銅の通貨を用ゐたればなり。

此間に諸州にてはデリーの羈絆を脱せんことを計れり。ムハムド・ツングラクは一三二四年を以て其大帝國に君臨せしも、其イスラム教に對する固執的執心は、是をして異教徒たる印度諸侯伯若しくは諸官吏を信ずること能はざらしめぬ。加之ムハムドは其血族をも信ぜず、故に其統治鞏固なるに至りては、外國人を以て重要なる地位に置かざるべからざるに至れり。當時の歴史は連續的暴動破裂の記録にして、帝國の一部平定するや否や他の一部背叛せしことを記す。一三三八年ムハムドの甥マルワに兵を擧げしが、戰敗れて虜となり生きながら皮剝れり。翌一三三九年には叛を企てしブンジマの知事死刑に處せられたりといふ。

下ベンガル及びゴロマンデル(Coromandel)海岸の諸副王は、一三四〇年の頃自立して王となれり。カルナタ(Karnata)及びオリッサガナの印度諸王國は一三四四年其獨立を回復し、イスラム教の守兵を驅逐し、デカンの知事また叛を企て、其間にグジアラトの軍隊蜂起せり。是に於てムハムドは叛徒を撃たんがために南に進みしも、其未だ目的を達せざるにグジアラト、マルワ及びシンヂヤは騒亂起りしかば、巨むを得ず軍を施して是に向へり。次いでムハムドは一三五一年インドス河の谿地に於て其陣中に死せり。

ムハムド・ツングラクは印度のイスラム教君主中、始めて規律ある歲入制度を定めたるものといふべし。ムハムドはガンガ、ジウマナ間の諸地方より地租を増徴し、所によりては十倍若しくは三十倍となせり。是を以て農夫は其稅吏の來るに先だちて村落を遁れ、藪地に潜みて群盜となりき。ムハムドは嚴に其禁獵地を侵すものを罰し、また古今に例なき一種の人獵を案し、其軍隊をして一地方を圍ましめ、是に命ずるに漸次中心に向ひて進むべきこと、また其包圍内の人民多くは農夫と屠ると猶ほ野獸を殺すが如くすべきを以てせり。此種の獵は實にムハムド

ドの再三試みし所にして、此他カナウツシの大市府の住民を殺せしことあり。而して此種の恐怖は自然飢饉を起し、國內の不幸名狀すべからざるものありき。

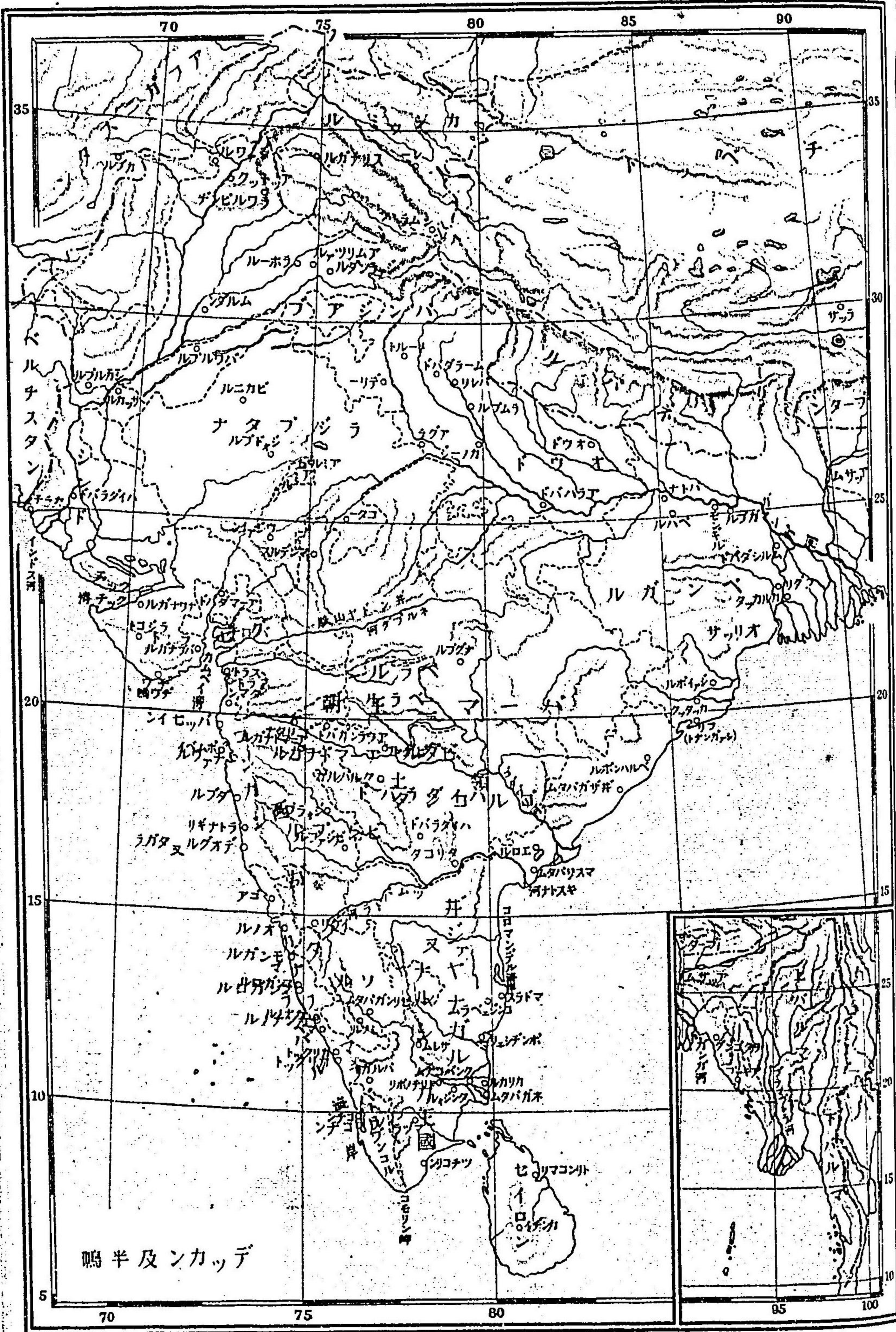
ムハムマド・ツングラクの子フィルズ・シア・ツングラク (Firuz Shah Tughlak) は仁政を布き、ベンガル及びデッカンのイスラム教諸王國の獨立を承認せしが、而かも其身體の虚弱と官廷の陰謀とのために惱まされぬ。フィルズは種々の公共事業を起し、灌漑のために堰を開き、池を鑿ち、隊商の驛舎を設け、禮拜堂、學校及び病院を建て、橋梁を架せり。然れども其最大功業と稱すべきものはジウムナの古運河なり、此運河は源に近き一點よりジウムナの水をひき、是を灌漑のために開きし溝渠にて、ガグガル (Chaghar) 及びストレジに連結したるものとす。後年イギリス政府は再び其一部を開鑿し、其兩面には今は膏腴なる土地伸張せり。然れどもツングラク王朝は幾許もなくイスラム教徒の騒亂及び印度人の叛逆のために瓦解し、其實際の最後の王マームド (Mahmud) の世に、印度はモンゴルの侵略者テムルの好餌となれり。

一三九八年テムル(タメルラン)は其兵を率ゐてアフガンを掃蕩し、來りてツングラク王マームドをデリー城下に破り、其首府に闖入して五日間の大虐殺を行へり。

時に其市街は伏屍累々として通行すること能はざりしといふ、而かもテムルは此間平然として酒宴を張り、其戦勝を祝せり。此年の末テムルは再び其軍を進め、先づジウムナ河岸のフィルズ・シアの大理石禮拜堂に於て、賊實謙遜なる贖頌を神にさしげ、然る後ガンガ河を渡り、メエルト (Meerut) に大虐殺を行ひて、ハルドワル (Hardwar) に進めり。一三九九年テムルはヒマラヤ山麓に沿ひて西の方中央亞細亞に退きぬ。而してテムルは諸市府を劫掠せし外、印度に其權力の痕を留めざりき。テムルの去るや、マームド・ツングラクは其グシアラトの隱栖よりいできたり、一四一二年に至るまで名のみ印度に君臨しぬ。

第三十一章 サイイド及びロチ兩王朝

ツングラク王統は一四一四年を以て終り、次いでサイイド (Sayyid) 王朝は一四一四年より一四五〇年に至るまで君臨し、ロチ (Lodi) のアフガン家は一四五〇年より一五二六年に至るまで統治せり。然れども是等スルタンの内には、單にデリーの近傍一二里を統治せしものあり。而して印度諸侯伯及び地方のイスラム教諸王國



は、此間印度の大半を遁じて實際獨立しき。マデ家は一五二六年、モンゴルの侵略者ババル(Babar)のためには覆されぬ。

ババルは印度モグル王國の創始者にして、其最後の君主は一八六三年イギリス政府の國事犯としてラングーン(Rangoon)に死せり。ババル帝國の紀事に在るは先だちギンドヤ以南の印度及びイスラム兩教諸王國に關して述ぶる必要あり。チェラ、チャラ及びパンヂアの三古王國は南印度のドラギヂア(Dravid)地方を占有し、其住民はタミル(Tamil)語を用ゆる諸種族なりき。其内パンヂアは最も大國にして、其首府はマゾラ(Madurai)にあり、其建國は思ふに前第四世紀の頃ならん。チオラ王國はコムバモヌム(Combaumum)及びタンジオル(Tanjore)に其牙營を置けり。今カネリ(Kaveri)河の砂に埋められたるミソルのタルカド(Talkad)は、二八八年より九〇〇年に至るチェラ王國の首府たりしなり。マゾラ王朝、パンヂア王朝の第百十六代の王は、一三〇四年マリタカヌルのために亡ぼされぬ。然れどもイスラム教徒は極南の地に其權力を植ゑんとして失敗し、印度諸王朝は第十八世紀に至るまでマゾラよりパンヂア古王國を越えて統治せり。而してヨーロッパの諸王國には、二

千年以上繼續せしがマヤ王國(マヤ王國)の如く、連綿として繼續せしものも
あるなし。チチマ王國(チチマ王國)及びトラタマ王國(Tratama)王國には五十王、チ
ラ(タンシオル)王國には六十六王の繼承あり。外に小なる諸支朝あり。
然れども南印度の信ずべき歴史は、一一一八年より一五六五年に至るギジャヤ
ナガル(Vijayanagar)ナルシンガ(Narsingha)の印度王國に始まる。此王國の首府は合
日尙ほツンガバドラ(Tungabhadra)河の右岸ベルリヤ(Bellary)のゴドラス地方に
其遺跡を留め、其殿堂、城塞、水槽及び橋梁の舊趾存す。ギジャヤナガルは少くとも
三世紀間、印度半島の南部を統治したりき。其ロンヅラシアは兵を擧げ、デッカンの
スルタンと對等の平和條約を訂結せり。
南印度のイスラム教諸王はアラウヂンの征服(一三〇三年より一三〇六年)に至
るより起れり。亂戰時代の後、デッカンのバーマニ(Bahmani)王國は實に南印度に於
けるイスラム教統治者の代表者なり。バーマニ王朝の創始者をザフル・ムン(Zafar
Khan)といふ、ザアル・ムンはアフガンの將にして、ムハムマド・ツングラクの世(一三二一
五年より一三五一一年)に至るに、デリーの軍隊を破り、自立して、デッカンのイスラム教

王となりしものとす。ザナル・ハンは幼時一婆羅門の奴隷たりしが、其主人は善く是を遇し、且つ將來の大成を豫言せり、由りてザナル・ハンはバーマニの王號を稱し、是を其繼承者に傳へぬ。

バーマニ王朝の現出は通常一三四七年とせられ、是より一五二五年に至るまで百七十八年間繼續せり。其首府は順次グルバルガー(Gulbarga)、ワランガル(Warangal)及びビダル(Bidar)にありき。是等は皆近世のハイデラバド地方にありて、略ぼ今日のニザム領にあたる。バーマニ諸王は其盛時にデッカンの過半を統治し、南ツンガドドラ河より北オリッサに至り、東マスリパタム(Masulipatan)より西ゴア(Goa)に及びべり。されど其直轄地は是に比して狭かりき。バーマニ王朝の諸王は以前デリーの王位を争ひしとき、ギジャヤナガル及びワランガル(Warangal)の南方印度王國に援を求めしが、而かも其經歷の大部分に於ては、ギンドヤ以南の印度教徒に對してイスラム教徒の執る所を代表せり。其同盟及び其戦争は共にイスラム教の人民と印度教の人民との混合を導きぬ。例せばマルワ王が、イスラム教を奉ずるアフガン人と印度教を奉ずるラジプトとより成る一万二千の兵を以て、バーマニ領

を侵せるが如し。ギジャヤナガルのロンゾラシアはアフガンのイスラム教徒より其補充兵を得、是に給するに地券を以てし、また是がためにイスラム教の禮拜堂を建てぬ。是に反してバーマニのイスラム教軍隊は屢、イスラム教に改宗せし印度人によりて統率せられたりき。バーマニの軍隊は相敵視せるイスラム教の二派より成れり、一は即ち主としてヘルシア人、土耳其人、若しくは中央亞細亞より來りしモンゴル人を包含するシア(Sheer)派より成り、他はメンニ(Menni)派の信仰を有するアピシニア傭兵と南印度の土着イスラム教徒より成るものにして、此二派の敵視は屢、バーマニ王位を危くせり。バーマニ王朝は一四三七年の頃、アラウッディン二世の下に其全盛時代に達せしが、其後一四八九年より一五二五年に至る間に前述せる二派の軋轢のために崩壊せり。

バーマニ王朝の崩壊よりデッカんに五獨立國成りぬ。(一)アデル・シアヒ(Adil Shah)王朝(二)クタブ・シアヒ(Kutab Shah)王朝(三)ニザム・シアヒ(Nizam Shah)王朝(四)ラルのイマド・シアヒ(Imad Shah)王朝(五)ベリド・シアヒ(Berid Shah)王朝即ち是なり。アデル・シアヒ王朝の首府はビシヤンプル(Bijapur)にあり、是れ一四八九年、オスマン

○Osmanlı) 土耳其のムルタン・アムラト(Amurath)二世の子の創始せし所にして、一六八六年より一六八八年に至る間に、モグル帝アウラングゼブ(Aurangzeb)のために併呑せられぬ。クタブシアヒ王朝の首府はコルコンダにあり、是れ一五一二年土耳其人の一冒險者の創始にかり、また一六八七年より一六八八年に至るの間に、アウラングゼブの併呑する所となれり。ニザムシアヒ王朝の首府はアーマドナガル(Almadnagar)にあり、是れ一四九〇年ギシアキナガルの宮廷に仕へたるもの起せし所にして、一六三九年モグル帝シアーシアハン(Shab Jahan)のために滅ぼされぬ。ベラルのイマドシアヒ王朝の首府はエルリタプル(Ellichpur)にあり、是れ一四八四年ギシアキナガルより來りし一印度人の開きし所にして、一五七二年アーマドナガル王國の併有する所となれり。ハリドシアヒ王朝は其首府をビタル(Bidar)に置き、一四九二年より一四九八年に至る間に、ゲオルギア(Georgia)奴隸の創始せし所なり。ハリドシアヒ王朝の領地は狭小にして不利の地にあり、一六〇九年後まで獨立せしが、一六五七年に至り、其城塞はアウラングゼブの略する所となれり。南印度各地方のイスラム教諸王朝は、印度にアクバル及び其繼承者がモグル帝

國の基礎を鞏むるに至る迄其獨立を維持せり。是等の諸王國は時にギシアキナガルの印度王國と争を構へ、一五六五年には是に對して聯合を形成し、其叛徒の内應を得てタリコト(Talikota)にギシアキナガルの兵を破れり。此戰敗の結果ギシアキナガル王國崩壊せしが、其各地方の印度諸酋長(ナヤク(Nayak))は、尙ほ各自其采邑を有し、南部のイスラム教諸王はたゞ其領地の一部を併呑し得たるに過ぎざりき。有名なるマドラス領のペンガル(Penangal)及びマソルのマハラジャ(Maharaja)は實に是等のナヤクより出でたるものなり。ギシアキナガルの一主族はチアンドラキリ(Chandragiri)に連れ、一六三九年マドラスの地をイヤリメに獻じ、其功によりて特に其以前の君主權を行ふ一王統を起せり。此種の繼承者は、ギシアキナガル王朝の餘喘を保てる今日まで相繼ぎ、ハイダラバドのニザム王、アナグンヂ(Angandi)のラッパのごとき最も著るし。イスラム教時代に南印度に獨立せし地方のヒンダラッパに就きて最も有名なるものは、一三九七年より一七九九年其權力を支入たるマシッアラバヤ(Masichalabaya)族なり。

下ベンガルは一三四〇年デリーの羈絆を脱し、其知事フヤキル・ウッヂン(Fakhir ud-

Prin)は自立して王となり、其首府をガウル(Gaur)に置き、其名を以て通貨を鑄造せり。是より二十王相繼ぎてベンガルを統治せしが、一五三八年一時フマエン(Humayun)のためにデリーのモグル帝國に合併せられぬ。其後一五七六年ベンガルは遂にアクバルの帝國の併呑する所となれり。西印度のグジアラト領はベンガルと同じく獨立してイスラム教王國となり、一三七一年より一五七三年アクバルのために征服せらるるに至るまで二世紀間繼續せり。マルウアもまた獨立せしが、一五三一年グジアラト王のために併呑せられ、ジャウンプル(Jaunpur)もまたベナレスの領地を包含し、ガンガ谿地の中央に、一三九三年より一四七八年に至る約百年間、イスラム教國として其獨立を維持せり。而して其頃デリーはサイイド及び初代ロヂの統治する所たりき。

デリーの初代イスラム教統治者の地位は極めて困難なるものありき。土耳其、アフガン、モンゴルの諸族は、諸所の峠を越えて印度にきたり、其宗教を同化する先、侵略者より其國土を強奪せり。故にデリー帝國は三つの絶えざる危難のために圍まれつゝありき。第一、中央亞細亞より來る侵略者、第二、印度に於けるイスラム

教の叛將(叛知事)第三、初代デリー諸王の放棄せし印度諸種族即ち是なり。是等の繼續的弱點を救ひ、印度人を其政府に合併して以て外敵の侵略を制し、内有力なる臣民を御するはアクバル大王の任務なりき。

第三十二章 文學科學言語及び風俗

イスラム教徒の印度征服前、印度には王朝及び種族の戰爭ありて、然る後國內の形勢漸く定まり、其諸部落は外國の侵入者に抗せんがために一大聯合を形成せしが、此新狀態の下にサンスクリット文學及び科學は復興しぬ。

詩人マガ(Magha)は第十一世紀にマルワのボシヤ(Bhoja)王に仕へ、今日尙ほ印度にて廣く讀まれるシスバラバダ(Sisupala-Badha)の詩を作れり。此詩は古叙事詩マハバラタの一挿話を取りたるものにして、クリシナのシスバラを殺したることを記述す。ベナレス若しくはベンガルのスリ・ハルシヤ(Sri-Harsha)は、第十二世紀にマハバラタの他の挿話を基礎とし、ナイシアダ(Naishadha)の詩篇を作りぬ。今日尙ほ聲價を維持する二種の戯曲ムドララクシアサ(Mudra Rakshasa)及びエニ・サンハラ

(Veni Sanhara)はまた隋時代は成りたるものとす。カシミールのソマデヤ(Somadeva)は古代の諸記録より其有名なる物語集カタサリトサガラ(Katha-Sarit-Sagara)を編纂せり。カタサリトサガラの外に古バシチアタンドラの物語より編纂せしヒトバデヤ(Hitopadesa)あり。最後にベンガルのシフヤデヤ(Jayadeva)は有名なるギタゴギンダ(Gita-Govinda)を著し、シリシチとラダ(Rada)との愛を歌へり。ギタゴギンダはサンスクリット語の奉歌中其調最も佳なるものにして、全篇至高現體に對する生物の變を描ける寓言なり。然れども其記述豊富にして生氣溢るるが故に、一見其寓言なるを知ることも能はず。左に擧ぐるはクリシチに對する搾乳女の愛を歌ひ、感覺、視、嗅、觸の快樂を記述したるものとす。

或者は花星の如きチアムバク(Champa)を束ね情を含みて開きたる其胸に彼「クリシチ」の枕して慰はんことを求め、また彼の肩を掩うて、恍惚たる感覺の上に落つること大早の雨の如き薔薇花の香を送る。少女の伴侶が香氣馥郁たる許多の小枝を振翳せば、クリシチは嬉戯して雍々たる春の往くを歎く。他のものは彼の顔を注視し、雙眸秋波を湛へて慎みて近づかず。羞かしき顔を

以て燃え、黒き睫毛に蔽はるる彼女の眼は等しく其意中を語れば、クリシチは雍々たる春に柔和なる意味を以て、其眼の彼を圍む少女の伴侶より其一を擇むこと能はず、僅かに其秋波をかへすのみ。

森林に住し、其身と胸とが年少の血もて動悸する第三のものは、光明を彼の耳に語るが如く彼に凭たれ、次いで葉の如く柔かなる唇もて彼の頬に接吻す。接吻頬を穿てば、クリシチは絹の如き接觸を以て是に酬ひていはく、噫、ラダよ、脚を忘るるに過ぎたりと。

科學者としては西紀第十二世紀に有名なるバスカラアチアリア(Bhaskara-Acharya)あり。バスカラアチアリアは一一五〇年に、其天文學上の大著述シッダントシロマニ(Siddhanta-Siromani)を完成せり。コールブルック(Colebrooke)氏がイギリス語に翻譯したるは、其數學及び代數學に關する初の部分なりとす。

新印度教の説教に用ゐられたるものは近代語なり。古サンスクリット語は前八〇〇年頃に至るまで世に行はれ、次いで佛教の説教に用ゐられたるバリ(Pali)語となれり。バリ語は第五世紀若しくは第六世紀に、新印度教の起るに及びブラクリ

ト(Prakrit)人民の土語語となれり。然るにラジプトの権力とシヴ及びギシヌの儀式とを弘むるに至りし第九、第十兩世紀の政治上及び種族上の大革命は、更に印度國語の變化を來し、ブラクリト語衰へて近代語是に代はれるを見る。かくてヒンデ語は北印度の國語となり、ベンガリ語及びマハラチ語は依然東西印度に行はれしが、此間にタミル語及びテルグ語の如き非アーリア語は南印度に行はれたり。印度の文學はラマヌジア、カピル、カイタニア等の宗教上の運動と相伴うて發達せり。南印度には前述せる如く、文學語としてタミル語、テルグ(Telugu)語、カナレス(Kanarese)語及びマラヤラム(Malayalam)語の四種ありしが、是等の中にて其古代文學を以て最も有名なるものをタミル語とす。佛教は南印度に於いて其國語を以て説かれしかば、第九世紀より第十三世紀に至るタミル文學中に、佛教若しくはジアイナ教の文學あり。一万五千行より成る作者不詳の傳奇的敘事詩チンタマニ(Chintamani)は、此種の文學の最良標本なりとす。シヴ及びギシヌの崇拜が南印度に於いて徐々として佛教に代はるに及び、文學に變化をきたし、一一〇〇年の頃にはラマヤナのタミル語に改作せらるるあり、一二〇〇年代より一五〇〇年代に至

るの間には許多のシヴ讚頌の製作せらるるあり、四千種より成るギシヌ讚頌の大篇もまた此時代に成りたるものとす。

中古の上半所謂アフガン時代の最も有名なるサンスクリット學者及び註釋者はまた南印度にいてたり。ギシヤヤイナガルの印度王國の創始者に仕へしサヤナ(Sayana)若しくはマダヴ(Madhava)〔一三四四年〕は、有名なる吠陀及び他の神聖なる著述の註釋を編纂せしが、此註釋は過去傳説の解釋を近代印度に傳ふるものにして、今日尙ほ全印度に於いて有力なる典據とせらる。此後千年間に成りたる一卷の著述にして、近代の印度人に其祖先の古文學を傳ふるものサヤナの註釋の如きはあらし。故に南印度は近代宗教の改革及び近代文學の産出に於いて先頭に立つが如く、古神聖文學の保存及び解釋に於いてもまた其先頭に立つものなり。

ヒンデ語は北印度の地方語にして、其文學はデリーの最後の印度王と時を同らせしチアンド(Chand)の敘事詩に端を發す。ラマナダ及びカピルの宗教上の運動は、許多の神聖なるヒンデ文學の形成を促せり。ラジプタナには其封建諸會長の勇壯なる行爲を歌ひし英雄的詩歌いてぬ。

デカン最初期のマラタ詩人(第十三世紀以後)は皆宗教詩人にして、明かに印度の全部を動せし宗教運動の刺激を受けたるものなり。詩の風俗は印度の他の部分に於けるものに同じ。

詩に其地方語を用ひ、其作の尙ほ今日に存するベンガル最初期の詩人は、クリシナと其愛とに關して筆を執り、寓言を以て人格を有する一神の生物に對する愛を表現せり。シアヤデブは第十二世紀に、其不朽のサンスクリット琴歌ヤタゴギンダを著はして例を示せしが、其後第十四世紀に至り、ベハルのビデアバチ(Bidyapati)及びベンガルのチャンデダス(Chandidas)是に倣ひて、今日尙ほ其國人に歌はるる歌を作れり。左に擧ぐるはベンガル最初期の詩人チャンデダスの作にかゝる歌を翻譯したるものにして、是を誦すれば神に對する生物の愛及び信仰が、婦女子の情人に對する愛となれるを見るべし。ラメは熱心なる婦女子の愛、狂烈なる崇拜者の信仰を以て語りていはく、

噓如何なる語が眷戀に堪へざる吾が心の苦悶を寫し得ん。生に於いて、死に於いて、將た後生に於いて、卿吾が生命の主たれ。吾が心は卿の足に縛せらるるが

故に、吾は切に卿の慈悲と愛とを願ひ、卿の崇拜者及び奴隸たらんがために吾が生命と靈魂とを捧げん。吾は地に於いて、冥界に於いて、天空に於いて、慈眼吾を視る眞實慈愛の靈魂あるかを尋ねたり。冥界地、若しくは天空に於いて、慈眼の聲もて吾が名を呼ぶ靈魂、ラダの冥助を乞ふべき靈魂、噓クリシナよ、卿を措きて冥助を乞ふべき靈魂他にあらんや。生命の流の岸、ゴクル(Gokul)及び天空に於て、卿が蓮の足惟り吾を救ふことを得、されば吾は其足を愛す。吾を拒む勿れ、何となれば吾は弱ければなり。噓、卿の顔を背くる勿れ、何となれば憐むべきラダは吾が生命の主を除きて他に往くべき道を有せざればなり。若し瞬時たりとも吾卿を失ふときは、寂莫死に似たる悶絶を見るべし。詩人歌うていはく、クリシナに據りて動くことなく、彼を帶ぶること寶石の如くせよと。

第十五世紀にサンスクリットの叙事詩ラマヤナ及びマハバラタのベンガリ譯成れり。而してベンガリ文學の發達に一層の刺激を與へたるものは、第十六世紀にギシヌの信仰を説きたるカイタニアなりとす。

アフガン諸帝の世は人の思想及び行動の多方面なるを以て著るし。而かも諸

帝王及び諸將軍の行動は、思想、宗教、文學、農業、商業及び種々の産業に比して重要ならざりしが如し。故に當時の印度の歴史なるものは、絶えず戦争及び虐政の荒す所となりし一國の歴史にあらずして、其賢愚諸王の下に農業を勵み、商業及び製造を盛にし、詩歌藝術を修め、自己のために考へ、併せて宗教上の改革のために争ひし一國民の歴史といふことを得。

此時代に印度に至りし外國旅行者の記録は、以上の觀察を確實にするものとす。是等旅行者の記録は多く奇異なる風俗及び習慣、殿堂及び偶像、宗教上の儀式及び祭典に關するものなれども、其町村及び産業に關する紀事の内には、人民の狀態を明かにするものなきにあらず。故に吾人は是を左に擧げん。

印度に至りし最初期のヨーロッパ旅行者にして、其旅行記を後に殘せしものはニコチア(Venetia)人ニコロ・コンチ(Nicolo Conti)なり。ニコロ・コンチは第十五世に印度に至り、南印度の印度教首府ギジャナガルに遊びて其富裕と端麗とに驚けり。コンチの記する所によれば、ギジャナガルは周回二十六里ありて、干戈を執り得べきもの實に十万を包容したりと。其後コンチはベンガルに至りしが、其富裕

と美麗とは少からず其の心目を喜ばしめたる所なり。コンチの所謂ケルノエム(Cornoven)東ベンガルのサヴルナグラム(Savarnagram)に至るや、市府を流るる河の廣さ五里餘ありきといふ、思ふに雨期なりしならん。河の兩岸には市府及び美麗なる花園ありき。コンチは遂にガンガ河を下りて、金銀眞珠に富める大市府モンキルに至れり。モンキルはコンチの所謂マウルシア(Mauzia)なり。

第十五世紀の中葉に印度に至りしイスラム教の旅行者アブヅルリザク(Abdul Rizak)はまた興味ある紀事を世に遺せり。アブヅルリザクの印度に至りしは、チムルに繼いでヘルシアの王位に登りしシアールク(Shah Rukh)の命を受け、海岸及び國土に關する報告を送らんがためなり。アブヅルリザクのギジャナガルに關する記述はコンチに似て流暢なり。其概略にいはいはく、ギジャナガルには互に墻垣を形成する七箇の壁ありて是を繞らし、外部の二箇は田畠及び花園を包容し、内部の四箇は家屋、商店及び國王の宮殿より成る。國王の宮殿の周圍には四箇の大市場あり、右には四十箇の圓柱に支へらるる大議事堂あり、左には財庫ありと。アブヅルリザクはカリクトにて大祭を見しが、此大祭に其國君は一千頭の象を集め

たりといふ。

第十五世紀の末葉に印度に至りしバルタマ(Bartema)は、ニコロコンチ及びアプツルリザクに似たる紀事を残せり。バルタマはグシラトのカムベイにて、多数のシアイナ教徒の群を成して生活するを見きといふ。バルタマは「シアイナ教徒は一切血あるものを食はず、隨て生あるものを殺さず。渠等はイスラム教徒にもあらざれば印度教徒にもあらざして、善を行へば救はるべきものとせり」と。バルタマは并シアヤナガルの王を以て其會て聞きたる最大の王とし、また首府并シアヤナガルを以て其會て見たる最美の首府とせり。當時カリクトはアラビア、エチプト、ペルシア、印度、ブルマ、スマトラ及び印度諸島より來れる人民を包容する世界的要港にして、其商業は一萬五千のイスラム教徒の手にありき。バルタマはまた印度の東海岸及びベンガルに至り、次いでブルマ、スマトラ及びボルネオ(Borneo)に航せり。

第二期 イスラム時代下 モグル朝(一五二六—一七三九) 及びマラータ聯邦

VIII. Timur 家 (Moghal)

1526—1530. Bābar.

1530—1556. Humayun.

[Bengal の知事 Sher Shāh 1542 Humayun を

逐ひ 1555 まで Afghan 王朝印度に統治す]

1556—1605. Akbar. 大帝、

1605—1627. Jahāngir.

[Nadir Shāh の侵入あり]

1628—1658. Shāh Jahan.

[王位を廢せらる]

1658—1707. Aurangzeb 又た Alamgir I.

1707—1712. Bahadur Shāh. 又た Shāh Alam I.

1712. Jahāndāz Shāh.

1713—1718. Farrukhsiyar.

1719—1748. Muhammad Shāh

(諸帝の廢立ありて後即位す。)

[1738—1739 Persia 王 Nadir Shāh の侵入あり]

1748—1754. Muhammad Shāh 死し Ahmad Sh-

āh 即位す, 1754 廢せらる。

1754—1759. Alamgir II.

[1748—1761. Afghan 王 Ahmad Shāh Durāni

六たび印度を侵襲す]

1759—1806. Shāh Alam II.

有名無實の皇帝

1806—1837. Akbar II.

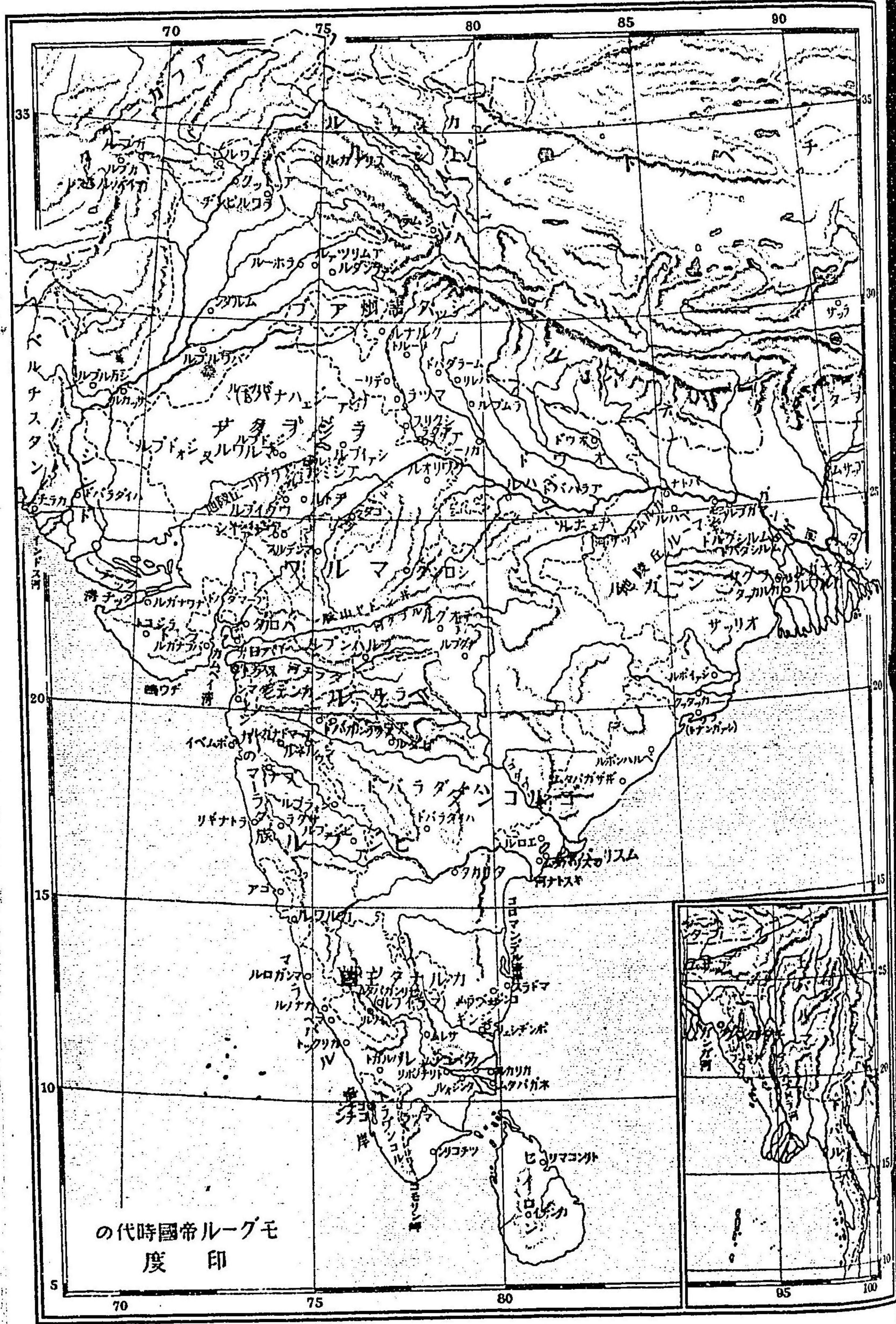
有名無實の皇帝

1837—1857. Muhammad Bahadur Shāh 虚名を

擁し Moghal 最後の皇帝(第十七代)たり。1857

内亂に關係したるとの罪を以て國事犯に問は

れ Rangoon の獄に死す。



第三十三章 ババル及びフマユン

モグール朝の祖ババル (Babar) が一五二六年印度に侵入せしとき、多数のイスラム教諸王及び印度諸侯伯は各地に割據し、ロヂ家のスルタンは其首府をアグラ (Agra) に置き、デリー王国の残れる小部分に君臨したりき。ババル、獅子の義はチムル六世の苗裔にして、一四八二年を以て生まれ、十二歳にして其父の統治せしヤクサルテス (Jalartes) 河畔のフェルガナ (Ferghana) 小王国を継ぎ、一四九四年種々の小説的冒険を試みたる後、一四九七年チムル家の首府サマルカンド (Samarkand) を征服せしが、叛徒の破る所となりてオクス (Oxus) の沿岸より逐はれ、一五〇四年カブル (Kabul) の王国を畧せり。是より二十二年の間に、ババルはアフガン方面の印度山地に勢力を得、一五二六年には山を踰えてペンジアブに突進し、ロヂ朝デリー王イブラヒム (Ibrahim) とパニパト (Panipat) に破れり。此戦は一五二六年、一五五六年、一七六一年にパニパトの同じ平原に於て印度の運命を決せし、近世三大戦争の最初とす。ババルはデリーに入りてイスラム教徒を其臣民となせしが、幾許もなくチトルのラ

シフト族の攻撃を受けぬ。是等のラシフト族はアヂメル、メワル及びアルワを其配下に收め、此時恰かも印度帝國を創始せんとせり。一五二七年ババルは危難を冒してラシフトと戦ひ、遂にアグラ附近のフアテプル・シクリ (Fatehpur Sikri) に於て是を破れり。危難の最も甚しかりし際、ババルは爾後再び酒杯を手にはせずと誓ひしといふ。かくてババルは疾かに其權力をムルタン (Multan) に至る南ブンシニア・ベハルに至るガンガ河の東方に擴張せり。其後一五三〇年ババルはアグラに死せしが、其帝國は中央亞細亞の阿姆(Amu)河より、下ベンガルに於けるガンガ河三角州の端に及びき。

ババル死するに及び、其子フマユン (Humayun) 父に繼げり、然れどもフマユンは其敵視せる兄弟カムラン (Kamran) のためにカブル及びブンシニアを奪はれしかば、フマユンは印度の新征服地を統治せざるべからざるに至りしが、此時またアフガニスタン及びブンシニア國境の地を失へり。初代アフガン侵入者の末裔は長く印度に住せし結果、印度人を嫌ふよりも寧ろ甚しく新イスラム教徒即ちモグル人を嫌へり。フマユンは是等のアフガン人と戦ふこと前後十年、遂に其首領ベンガル

の知事シエル・シアー (Sher Shah) のために印度を逐はれ、シンドの砂漠を過ぎてヘル
 シアに遁れしが、途ウマルコトの小城寨に於て其子アクバル生まれぬ。是れ實に
 一五四二年の事に屬す。シエル・シアーは已にフマユンを逐ひ、自立してデリーの
 皇帝となりしが、一五四五年カリンシアル (Kalingar) 城を攻めて敵の殺す所となり
 其子乃ち是に繼ぎしが其後シエル・シアーの孫の世に、マルワ、ブンシアブ及びベン
 ガル等の諸州は、相次いで是に背けり。フマユンは再び印度にきたり、當時纔かに
 十四歳なりし其子アクバルは、一五五六年バニバトに激戦してシエル・シアー王朝
 のアフガン兵を破れり。是に於て印度はアフガン人の手より遂にモグル人の手
 に移り、シエル・シアーの王統は北印度及びデリーの王位より消滅しぬ。されど一
 時下ベンガルに其殘喘を保ちたりき。フマユンは其カブル領を復し、數ヶ月間デ
 リーに統治せしが、幾許もなく一五五六年を以て死せり。

第三十四章 アクバル大帝 (一五六一—一六〇五)

畧年表

- 一五四二 シンドのウマルコトに生まる
- 一五五六 バニバトにアフガン人を破り、バイラム・ハン (Bairam Khan) 其軍を統ぶ
 父フマユンのためにデリーの王位を復す。數ヶ月の後父に繼ぎて
 王位に登り、バイラム・ハン攝政す。
- 一五六〇 親しく政を執り、バイラム・ハンの叛軍を破りて其罪を赦す。
- 一五六六 ハキム (Hakim) アクバルの兄弟、ブンシアブに侵入し、アクバルの破る
 所となる。
- 一五六一—一五六八 ラジプト諸王國を従へてモグル帝國に併す。
- 一五七二—一五七三 グシアラトに出師し、再び其地をデリー帝國に併す。
- 一五七六 ベンガルを征服し其最後の合併を行ふ。
- 一五八一—一五九三 グシアラトに騒亂起り、一五九三年遂にモグル帝國に征
 服せらる。
- 一五八六 カシミルを征服す。其最後の叛亂一五九二年に平らぐ。
- 一五九二 シンドを征服してモグル帝國に併す。

一五九四 カンダハル(Kandahar)を従へ、カブル及びカンダハルに至るギンドヤ以北の全印度をモグル帝國に併す。

一五九五 アクバルの子ムラド(Murad)公子、父の軍隊に將としてデカンに向ひ、アーマドナガル遠征を企てて功を奏せず。

一五九九 アクバル自ら兵を率ゐてアーマドナガルを伐ち、其市街を陥る。然れどもモグル帝國に併すこと能はず。

一六〇一 カンデシを併せアクバル北印度にかへる。

一六〇五 アグラに死す。

百五十年間持續せしモグル王朝の眞の創始者アクバルは、一五四二年を以て生まれ、十四歳にして父に繼ぎ、一五五六年より一六〇五年に至るまで約五十年間位に在りき。アクバルの父フマユンは、印度に於て現ブンシアブのイギリス領よりも大ならざる一小王國を其子に遺せしのみなりき。然るにアクバルは此小王國を擴めて印度帝國となせり。フユマンの死せしとき、アクバルはバイラム・ハンの後見の下に、アフガンの叛徒を伐ちてブンシアブに在らざりき。是より先き土耳其

人バイラム・ンは印度を放逐せられたるフマユンを扶けて其軍隊を統べ、是をしてバニバトに於ける其王位を復せしめしが、是に至てハン・ババ(Khan Bābā)即ち王父の稱號を得てアクバルの攝政となれり。バイラム・ハンは將帥としては勇敢且つ熟練なりしが、天資粗暴壓制なりしかば、爲めに多數の敵をつくりぬ。アクバルは四年間バイラムの抑壓を忍びたる後、一五六〇年遂に獵に乗じて其束縛を脱せしかば、バイラムは其忠節と怨恨とのために苦悶を重ねたる後、遂に叛を企てしが、直にアクバルの破る所となれり。されど其罪を赦され、且つ巨額の恩給を與へられしかば、巡拜のためにメッカに出發せしに、戰場に於てバイラムのために其父を殺されたる一アフガン人、其怨を報ぜんがために是を殺せり。

アクバルの治世は太平無事なりき。一五五六年アクバルの即位せしとき、印度は四分五裂してインド及びイスラム兩教の小王國四方に割據し、互に嫉視反目せしが、一六〇五年其死せしときには、印度は殆ど統一せる帝國なりき。是より先き土耳其アフガン及びモンゴル諸部族の印度を侵襲するや、皆其諸王を戴く有力なるイスラム教の人民を印度に遣せしが、アクバルは是等イスラム教諸國をデリー

帝國の領地となせり。印度諸王及びラジプト諸國民はまた其獨立を恢復せしが、アクバルは政治上是を其大權の下に屬せしめぬ。是等の功業を成すにアクバルは一部兵力により、一部同盟によれり。アクバルは結婚及び同情政略により、ラジプト諸侯伯を招致して是に高地位を與へ、上印度のモグル黨及び下ベンガルのアフガン黨に對して其印度將相を任用せり。

前已に述べたるが如く、フェマンは單にデリー及びアグラ周圍の諸地方とベンジブとより成る小王國を、其子に残せしのみならず、繼ぎて立てるアクバルは、其ラジプト人の力によりて疾かに其領土を擴め、シアイプル(Saipur)を畧して帝國の采邑となし、其王の女を娶りて以て其關係を鞏固にせり。シオドプル(Jodhpur)もまたアクバルの征服する所となりしが、アクバルは其子サリム(Salim)をしてシオドプル王の孫女と結婚せしめぬ。サリムは後にシハンギル(Jahangir)と稱して王位に登りたるものとす。チトル(Chitor)のラジプトは長き抵抗の後、竟にアクバルに服せしが、其誇矜なる、イスラム教帝王の血統にすら其血を混ざること肯せざるほどなりしかば、是に至て其郷地を棄てて山間及びインドス河の砂漠に遁れ、

後に此所より起りて其古領土の大部分を復し、今日尙ほ殘存するウダイプルの首府を創建せり。是等のラジプトは今日尙ほ誇りていはく、同族中モグル帝に結婚を求めざりしものは唯吾等あるのみと。

アクバルは全印度人に對して懷柔策をとリ、また其小貴族のために進仕の途を開くことに注意せり。アクバルの義兄弟にあたるシアイプルラシアの子はブンシブの知事に任せられ、亦モグル帝室の親戚なるラジブ・マンシンク(Raja Man Singh)はアクバルのためにカブルよりオリッサに至る地方の軍務を統べ、一五八九年より一六〇四年に至るまでベンガルの知事たりき。アクバルの大藏大臣ラジブ・トダール・ナルル(Baja Todar Mal)もまた印度人にして、始めて正確なる土地調査及び測量を印度に行へり。四百十五人のマンサブダル(Mansabdar)〔騎兵隊長〕中其五十一人はまた印度人なりき。アクバルは非イスラム教徒に課せし不法の税シアシア(Shahi)を廢し、政治上に於ては其全人民を平等にせり。加之梵語聖經及び叙事詩をペルシア語に翻譯し、自ら其印度臣民の宗教に對して興味を有することを示しぬ。アクバルは印度臣民の法律を尊重せしが、而かも其殘忍なる儀式を撲滅する

に力め、其火責の吟味、動物の供養、未丁年者の結婚を禁じ、印度人の寡婦をして法律上再婚することを得せしめしが、其夫の火葬場に焚死する習慣を禁ずること能はざりき。

以上述べたる手段によりて、アクバルは其印度臣民を文武の官職に任用し、其助によりて北印度のイスラム諸王を降し、またブンジアテよりベハルに至る印度の小君主を服せり。其後アクバルは、幾多の攻戦を経て、一五七六年シエル・シア一家より下ベンガルを略し、此後殆ど二百年間、一五七六年より一七六五年に至る、デリーより知事を遣はして是を治めしめしが、一七六五年に至り、下ベンガルはモグル帝よりイギリスに讓與せり。ベンガル灣のオリッサは一五七四年アクバルの將トダル・マルルのために征服せられしが、其對岸グジアラトに於て獨立を維持せしイスラム教主は、一五七二年より一五七三年に至る間にアクバルの征服する所となれり。然れども一五九三年まで其人民全く降服するに至らざりき。マルフは一五七二年を以て、カシミルは一五八六年を以て征服せられ、其最後の叛亂は一五九二年に平定せり。アクバルは一五九二年にシンドを併吞し、一五九四年にはカン

ダハルを恢復し、始めてアフガニスタンの中心よりギンドヤ以北の全印度に亘りて、東はオリッサ、西はシンドに至るモグル帝國を開き、其政府をデリーよりアグラに移し、また其首府としてファテプルシクリ府を創建せり。其後ジウムナ河岸に於けるアグラの勝れるを説きて此企を諫めしものありしかば、アクバルは一五六六年を以てアグラの城を築きぬ、而して其赤砂岩の凸字形城壁は今日尙ほジウムナ河畔の壯觀たり。

アクバルはまた南印度に其版圖を擴めんとせしが、殆ど成功せざりき。アクバルの始めて此企に従ひしは一五八六年なりしが、初め十二年間はアーマドナガルのイスラム教女王チアンドビビ(Chand Bibi)のために破られぬ。チアンドビビは勇敢にして經世の才あり、巧に其從來相敵視せる南印度のアビシニア人及びベルシア人と其軍隊とを連結し、ビシアプル(Bijapur)及び南方のイスラム教諸國と同盟して以て自國の地位を鞏固にせり。一五九九年アクバルはチアンドビビを撃たんとがために、自ら兵を率ゐてアーマドナガルに進みぬ。然るにチアンドビビは其軍隊中の叛徒に殺されたるにも拘はらず、アーマドナガルは一六三六年アクバル

の孫シアージュアハン (Shah Jahān) の世に至るまで降服せざりき。アクバルはカン
 デシを征服せしが、其南印度征服は不確實なる併呑を以て終を告げ、直に北印度に
 軍を旋せり。思ふに南印度を征服するは其僅かに創建し得たる新帝國の力の堪
 ふる所にあらざるを感ぜしによるならん。

アクバルは晩年に及び、其家族の陰謀と其愛子サリム(後のシアハンギル帝)の不
 品行とのために心を痛め、遂に一六〇五年を以て死し、莊麗なるシカンドラ (Sikān-
 der) の廟に葬られぬ。佛教の意匠とサラセンの裝飾とを混じたるシカンドラ廟
 の建築は、モグル帝國の創始者アクバルの集成的信仰を證するものとす。

アクバルが印度人に對して懷柔政策を取りしこと、また其宗教及び文學に關し
 て興味を有せしことは、敬虔なるイスラム教徒をして是に敬意を表するに至らし
 めぬ。アクバルの愛妻はラジプトの王女なりしが、傳ふる所によれば他の妻はキ
 リスト教徒なりきといふ。イスラム教徒の安息日なる金曜日、アクバルは諸宗
 教の教師を其宮廷に集め、喜びて波羅門、イスラム教、ペルシア教、ユダヤ教、耶穌會の
 教師及び懷疑哲學者の議論を聞けり。アクバルの一代記アクバル・ナーマ (Akbar-

namā) には此種の會議に關する紀事あり、是によればキリスト教の僧レヂア (Redi)
 は、諸宗教教師の面前に於てイスラム教師の一團と議論を闘はし、アクバルの嘉納
 を得たりといふ。アクバルは一般寛容の根據より其歩を進めて、漸次其世々信奉
 するイスラム教の眞理を探らんがために自由討論に入れり。其友アブル・ファズ
 ル (Abul Fazl) の勸告が、專制的帝王權より生ぜる超人間的万能の觀念と符合せしか
 ば、アクバルは其言を納れて、竟に新國教を布けり。新國教は自然神學の上に基礎
 を置ける一宗教にして、從來世に知られし信仰形式中最良のものに屬す。是によ
 ればアクバルは豫言者若しくは寧ろ寺院長なり。毎朝アクバルは宇宙を活動せ
 しむる神靈の顯現として公けに太陽を拜せしが、無學なる人民の多數は其皇帝を
 拜しぬ。アクバルは如何の程度まで主君の崇拜を其人民に勸めたるかは明かな
 らずと雖ども、私には其徒弟をして膝下に平伏して拜をなさしめたること明かな
 り。故に嚴格なるイスラム教徒は、神のみ受くべき禮拜を身に受くることにつま
 づてアクバルを非難せり。

アクバルは唯にギンドヤ以北に至る全印度を征服せしのみならず、是を構成し

て一帝國となし、または是を諸州に分ちて各州に知事若しくは副王を置き、充分なる文武の權力を是に付與せり。而して此權力は三部に分る、即ち軍隊、裁判、警察を含む及び收税是なり。アクバルは軍隊の叛亂若しくは其指揮官の獨立を防がんがために軍隊組織を變更し、其諸將に土地を與ふる古制度を廢して、是に代ふるに將士に金錢を給することを以てしぬ。此變法の行ひがたき所には、其中央權力を以て古軍隊の采邑所有者を抑制せり。諸州に散在する諸將の獨立を防がんがためには一種の封建制を布き、印度進貢諸侯伯とモグル諸貴族とを相並び封ぜり。裁判上の管轄は地方の重要市府のカジ(Casim)〔法官〕是を掌り、首府のミル・イ・アドル(Mir Asaf)〔大法官〕是を監督せり。市府の警吏は市府の長官を兼ねるコトワル(Kotwal)〔警督官〕の下に屬し、地方の警察は地主若しくは税吏の司る所たりき。

アクバルの歳入制度は古印度の習慣に據りしものにして、今日尙ほ其諸州に残れり。アクバルは最初に田野の廣さを測り、次に其官吏は土地の産出高を算して、政府の分を其總産出高の三分一と定め、最後に其收穫物を金錢に換算して、徵收することを定めぬ。是等の手續は土地調査といひ、初には年々反覆せられしが、是が

ために農民の苦情屢起りしかば、後には十年毎に是を行ふに決せり。アクバルの官吏は嚴に土地の産出高の三分一を徵收せしかば、北印度より收むるアクバルの歳入はイギリス政府今日の賦課に超えぬ。アクバルはアフガン國境外のカブル及び南印度のカンデシをも包括する其十五州より年々一億四千万圓を徵收し、若しくはカブル、カンデシ及びシンドの分を除きて一億二千三百三十万圓以上を徵收せり。イギリス政府の地租は北印度の更に廣き土地より徵するものにて、一八八三年に一億二千万圓に過ぎざりき。故に面積及び金銀價の差異より計るときは、アクバルの徵税がイギリスの徵税に比して殆ど三倍にあたるものとす。後の一報告にはアクバルの土地歳入を以て一億六千五百万圓とし、他の報告には一億七千五百万圓となせり。諸州にてはまた王家の常備兵に對して地方の民兵(Band)〔兵〕を支へんがために、少くとも一億圓を支辨せざるべからず。故にカブル及びカンデシを除きて、北印度より收むるアクバルの歳入は、地租及び軍隊費の二項目の下に二億二千万圓を超過せり。此他また諸種の雜税ありて、アクバルの總歳入は、四億二千万圓に上りき。

アクバルの大臣ラシアトダル・マルルは歳入の精算を掌り、其名は今尚ほベンガル農夫の間に記憶せらる。文章家アブル・フアズルはアクバルの大蔵大臣にして、其帝國の統計的表を編し、また今日尚ほ愛讀せらるゝアイン・イ・アクバリ (Ain-i-Akbari) に其主君の宮廷及び日常の生活を描寫せり。アブル・フアズルはアクバルの世子サリームの教唆によりて一五〇三年に殺されぬ、此事實はアクバルの晩年を汚すものといふべし。

第三十五章 ジアハンギル及び

シアー・ジアハン

アクバルの愛子サリームは一六〇五年を以て父の業を繼ぎ、ジアハンギル (世界の征服者) の稱號を以て一六二七年に至るまで統治せり。ジアハンギルは其二十二年の治世に於て其諸子の叛亂を征し、其妃の勢力を高め、また日夜盛宴を張りて以て自ら肆まにせり。ジアハンギルは長く南印度 (デカカン) を征して戦争をなせしも、其父より譲られたる領地外に得る所殆どなかりき。ギンドヤ以南の印度は依然デリー領の北印度と離れて存在し、アーマドナガルのアビシニア人の總理マリク。

アムバル (Malik Ambar) は其國內の凶變に拘はらず善く其獨立を維持せり。シアー・シキルの治世の終には其子シアー・シヤハン (Shah Jahan) 叛逆を企て、デカカンに遁れてマリク・アムバルに結び、以て其父の兵に抗し、ラシプトもまた起ちて獨立を唱へぬ。是より先き一六一四年、シアー・シヤハンは其父のためにウダイプル・ラシアを伐ちて是を破りしが、其征服は一部分にしてまた一時的なりき。此間にラシプトはモグル兵に歸服し、五万より成る騎兵を以てシアー・シヤハンを助け、以てカプルの叛亂を伐てり。而かもカンダハルのアフガン州は一六二一年にヘルシア人のため、に奪はれき。ジアハンギルの世にモグル帝國の地租は一億七千万圓となりしが、其總歳入は五億圓なりき。

ジアハンギルの治世を擾亂せるものは、ヌル・シヤハン (Nur Jahan) (世界の光) 若しくはヌル・マハル (Nur Mahal) (宮殿の光) と稱せられたる其皇后なり。ヌル・シヤハン若しくはヌル・マハルは、貧困なれども高貴なるヘルシア人の家に生まれ、アクバルの世に其美貌を以てシヤハンギルの愛する所となれり。然るに老帝アクバルは是を望まず、當時下ベンガルに在りて要職に就ける一軍人に是を嫁せしめ、以てシ

アハンギルとの間を割かんとしぬ。其後シアハンギル帝位に即くに及び、其軍人に命ずるにヌル・シアハンを離婚すべきを以てし、應ぜざるに及びて遂に是を殺せり。是に於てヌル・シアハンハ帝の宮殿に入り、一時は寡婦として隠遁生活を送りしが、遂に立て皇后となりぬ。ヌル・シアハンは其初め放恣なるシアハンギルをして善行をなさしむるに力めしが、而かも帝室の諸公子及び諸將は皇后の黨派を嫉み、其結果陰謀を企て叛亂を起せり。一六二六年勳功ある將軍マハバト・ハン (Mahabat Khan) は、其一身を防衛する必要より皇后に叛き起ち、シアハンギルを捕へ、ヌル・シアハンと共に六ヶ月間是を虜となせしが、翌一六二七年シアハンギル竟に其子シア・シアハン及び將軍マハバト・ハンを起せる叛亂中に死せり。

シアハンギルの性格は一六一五年始めて印度に赴任せしイギリス公使サートマス・ロー (Sir Thomas Roe) によりて活寫せらる。當時アグラは尙ほモグル政府の中心地たりしが、而かも其軍隊は其進む所に壯麗なる首府をつくれり。シアハンギルは其父アクバルを以て公然イスラム教の信仰より分離するに過ぎたりとなし、自ら嚴に其表面的儀式を遵奉せしが、而かも其父の如き内部の宗教的感情を缺

きぬ。シアハンギルは其臣民の飲酒を禁じながら、自ら其宮殿に荒飲夜を徹し、亂醉宗教を談じて遂に酒狂を發し、時には流涕し、諸種の感情激發して深更に及びしことあり。然れども公けには盛徳を装ひ酒氣を帯べるものには決して謁見を許さざりき。曾て一廷臣其中夜の宴に侍せしもの、翌朝失念して是を口外せしが、シアハンギルは嚴に是を責め、常に酒色に耽るの徒なりとして是を鞭ち、遂に死に至らしめたりといふ。而かも其醒むるや、細心國內の治を圖り、衛城より大地に連鎖をひきて其居室の金鐸と通せしめ、以て訴願者をして廷臣の手を経ずして直接正義の要求をなすことを得せしめき。當時ヨーロッパより來りし冒險者は多く其朝に集まりしが、シアハンギルは善く是を保護せり。シアハンギルは幼時其父の新宗教を奉じ、後即位するや、其臣民がアクバルにささげし敬神的尊崇を繼續することを許したりといふ。而してシアハンギルの初の妃は印度王女なるのみならず、キリスト及び聖母マリア (Maria) の像はシアハンギルの念珠の裝飾に用ゐられ、其甥二人は帝の承認を得てキリスト教を奉じき、以てシアハンギルの宗教に對する觀念を推測するに足る。

シアハンギルの死するや、シアーシアハン其報を得て疾驅デッカンより北にかへり、一六二八年一月アグラに於て帝と稱せり。シアーシアハンはエル・シアハンに巨額の恩給を與へて一私人となし、是によりて以て其宮廷黨を滅し、また其兄弟シアーリヤル(Shahryar)及び其他帝位を争ふべきアクバル家の諸公子を殺して以て其帝位を鞏固にしぬ。然れどもシアーシアハンは其人民に對すること至て公明に、平素の行爲また非難すべき所なく、善良なる財政家として經濟の才に富み、壯麗なる宮廷をつくり、有益なる公共事業を起し、また遠く其遠征軍をいだせり。シアーシアハンの世にモグル帝國は遂に其カンダハルのアフガン州を失ひしが、南印度(デッカ)に其版圖を擴め、またモグル王朝の最も光彩ある紀念物たる北印度の壯大なる諸建築を起しぬ。バルク(Balkh)の一時占領及びデリー軍のカンダハル(一六三七年)の後、シアーシアハンは其アフガン領地の大部分を失ひ、カンダハルのアフガン州は一六五三年ベルシア人の奪ふ所となれり。されどデッカに於てアーマドナガル(一五七二年にエルリクプル(Ellichpur)また是に併せらる)は、一六三六年遂にモグル帝國に併吞せられぬ。ビダル(Bidar)の城塞は一六五七年にモグ

ル軍の畧する所となり、南印度の二國ビシアプル及びゴルコンダはモグル帝に貢を納るゝに至れり、但しアウラングゼブの世まで全く降服するに至らざりき。然れども此時マラータ人は活動を始めて一六三七年先づアーマドナガルに其攻撃を開始し、次の世紀に至りて竟にモグル帝國を顛覆せり。シアーシアハンは其在位の日多くは印度の北部に在りて華麗なる生活を送り、タジ・マハル(Taj Mahal)の精巧なる廟をアグラに起せり。アグラ城の眞珠の禮拜堂及び大理石のモチ・マスジド(Moti Masjid)は、思ふに世界の祈禱所中最も清淨にしてまた最も美麗なるものならん。されどシアーシアハンは是等の建築により、其祖父アクバルの首府を飾ることを以て満足せずして、再び其政府をデリーに遷し、壯麗無比の建築を以て其市府を飾れり。其大禮拜堂シアマ・マスジド(Jama Masjid)は即位後第四年に工を起し、第十年に至て完成せしものとす。デリーの宮殿(今は城塞)は長三千二百尺、幅千六百尺の平行方形にして、中に大理石及び美麗なる石より成る無比の建築物あり。其入口は奥深き門口より成り、是より穹窿の堂に至るべし。穹窿の堂はゴチック式の大伽藍の如く二層より成り、長三百七十五尺あり。建

築史家フアーガソン(Ergusson)氏は是を評して、世に存するすべての宮殿の最も高貴なる門口といへり。デワン・イ・ハス(Divan-i-Khas)〔謁見所〕は河を一眸の下に望み、優美なる鑲嵌細工と詩的意匠とを有するを以て著るし。シアール・シアハンは多年デリーに統治し、其市府をして其後嗣アウラングゼブの世に、世界第一の首府たらしむる準備をなせしが、アグラに於けるアクバルの赤砂岩の城塞の雄壯なるに比すれば、シアール・シアハンの大理石建築は唯に婦女的優美に過ぎず、而してアグラの城塞は其建築印度式にして其彫刻はすべて雄大なるを以て名あり。

シアール・シアハンの世にモグル帝國は其勢力の最高度に達しぬ。而してシアール・シアハンの嗣子アウラングゼブは更に其國勢を張りしも、同時に衰頹の種子を蒔けり。アクバルの土地歳入は一億七千五百万圓なりしが、シアール・シアハンの世に至り、主として新征服により増加して二億二千万圓となれり。然れども此額はカシミル及びアフガニスタンの五州を含みたるものにして、是等の内にはシアール・シアハンの世に失ひし領地をも含むを以て、印度に於けるモグル帝國の土地歳入は二億七百五十萬圓なりき。シアール・シアハン宮廷の壯麗はヨーロッパ人の一驚を喫

せし所にして、光輝燦爛たる紅寶石水晶及び綠玉石を以て飾れる其玉座は、玉工タベルニエル(Tavernier)氏の評價によれば實に六千五百万圓なりといふ。

アクバルの王朝は世々叛逆を企つる王子をいだしぬ。アクバルの世には其子シアハンギル叛逆を企て、シアハンギルの世にはシアール・シアハン騒亂を起し、シアール・シアハンもまた今や其家族の陰謀と叛亂とのために惱されぬ。一六五七年シアール・シアハン病に罹りしが、其子アウラングゼブは其兄弟と争ひたる後、遂に其父を廢し、翌一六五八年自ら立ちて帝と稱せり。かくて不幸なる老帝シアール・シアハンは七年間幽閉せられ、一六六六年國事犯の罪を以てアグラ城に死せり。

第三十六章 アウラングゼブ(一六五八一—一七〇七)

畧年表

一六五八 父シアール・シアハンを廢し其帝位を篡奪す。

一六五九 其兄弟シウシヤ(Sin)及びダラ(Dara)を破る。ダラ一會長の許に遁れ、其歎く所となりて殺さる。

- 一六六〇 シウシア尙ほアウラングゼブと争ひ、遂にアラカン(Arakan)に通れて死す。
- 一六六一 季弟ムラド(Murad)を獄に下す。
- 一六六二 アウラングゼブの將ミル・ジウムラ(Mir Juma)マサムに侵入して功を奏せず。デッカんに騒亂起り、シヴジ(Sivaji)マラータ人を率ゐてビシアブルに戦ふ。戦後マラータ勢力の創始者シヴジ至大なる領地を占有す。
- 一六六二—一六六五 シヴジ、モグル帝國に叛し、一六六四年を以てラジアの號を稱し、マラータの獨立を宣す。翌一六六五年モグルの大軍至るに及びて降服し、デリーに幽せらる。然れども其後幾許ならずして脱走す。
- 一六六六 廢帝シアーシアハン死す。デッカんに戦争起り、モグル軍ビシアブル王のためにデリーに破らる。
- 一六六七 シヴジ、アウラングゼブと和して其領土を復し、ビシアブル及びゴル

コンダより貢を徵す。

- 一六七〇 マーラタのシヴジ、カンデシ及びデッカンを掠め、始めてチアウト(Chhatrapati) (歳入四分一の貢獻)を徵す。
- 一六七二 シヴジ、モグル軍を破る。
- 一六七七 アウラングゼブ非イスラム教徒の人頭税シアデアーを復す。
- 一六七九 アウラングゼブ、ラジプトと戦ふ。アウラングゼブの季子アクバル(Akbar)ラジプトに結びて叛を起す。然れども其軍隊の去る所となりて已むなくマラータに通る。
- 一六七二—一七八〇 マラータ人デッカんに其勢力を振ひ、シヴジは一六七四年を以てライガル(Rajgarh)に獨立君主となる。ビシアブル及びモグル軍とマラータ軍との戦あり。一七八〇年シヴジ死するに及びて其子サムバジ(Sambhaji)是に繼ぐ。
- 一七八三 アウラングゼブ自ら其大軍隊を率ゐてデッカんに侵入す。
- 一七八六—一七八八 アウラングゼブ、ビシアブル及びゴルコンダを征服して

是を其帝國に併す。

一六八九 アウラングゼブ、マラータ人の首領サムバジを虜とし、是を死に處す。

一六九二 マラータ人との間に亂戰あり。

一六九八 アウラングゼブの將マラータ人よりキンジ(Kinji)を奪ふ。

一六九九—一七〇一 サタラ(Satara)を陥れ、マラータの諸城を拔く。マラータ人の勢力衰ふ。

一七〇二—一七〇五 マラータ人新たに興る。

一七〇六 アウラングゼブ、アーマドナガルに退く。

一七〇七 アーマドナガルに死す。

アウラングゼブは一六五八年其父シアージアハンを幽して自ら帝と稱し、アラムキル(Aurangir)〔世界の征服者〕の稱號を以て一七〇七年まで統治せり。アウラングゼブの世にモグル帝國の境界は最も擴張せしが、其四十九年の長き治世は、單に壯麗なる舞臺にモグル朝通常の悲劇を演ぜしのみ。此悲劇は其個人的狀態に於ては父に對する叛逆に始まり、兄弟の殺戮是に連結し、背叛、陰謀及び其諸子に對す

る猜忌に終れり。而して其表面的光景は北印度に於ける壯麗なる宮廷南部に於けるイスラム教獨立諸王の征服、印度勢力に對する戰爭より成るものとす。但し愛にいふ印度勢力はラジプタナ及びデッカんに於て、共に後來モグル帝國を顛覆するため、其勢力を養ひつつありしものとす。

即位の翌年アウラングゼブは、其兄弟の最年長者たるメラを殺せり(一六五九年)。メラは性善良なれども躁急なりき。次いで紛争一年の後、自恣なる第二の兄弟シウシアは印度を逐はれ(一六六〇年)、アラカンの蠻人間に不幸なる死を遂げぬ。また勇敢にして年少なる兄弟ムラドは、一六六一年獄中に於て死に處せられたり。アウラングゼブは幼時より嚴肅なる清淨教徒の風を帯びしイスラム教徒なりしが、是に至て其諸兄弟を殺してイスラム教の最も嚴肅なる一派の正教皇帝となれり。此間に病帝シアージアハンは其諸子の死を悲み、一六六六年を以て遂に獄中に死しぬ。

アウラングゼブ帝位に登るに及び、遂に父シアージアハンの着手せし南印度征服の政策を繼げり。デッカンのイスラム教五王國中、ビダル、アーマドナガル及びヒ

ルリクプルはアウラングゼブの即位前已にモグル帝國の版圖に歸せしが、ビシヤブル及びゴルコンダの二王國は多年モグル軍に抗せり。然れどもアウラングゼブは一時の出費を顧みずして是を併さんとし、乃ち即位後二十五年間（一六五八年—一六八三年）其諸將を遣して是を撃たしめぬ、會、印度の新權力たるマールタ人デッカんに起りしは前已に述べたるが如し、其歴史は後章に詳なり。故に今やアウラングゼブの軍隊の成すべき事業は、單にビシヤブル及びゴルコンダのイスラム教王國を征服するにあらずして、印度、マールタ聯邦の新興隆を破壊するにありき。

然るに二十五年を費せしアウラングゼブの努力は失敗に歸し、ビシヤブル及びゴルコンダの征服は成効せざりき。一六七〇年マールタの首領シヴジは南印度のモグル帝國の諸州より貢税としてカウト〔歲入の四分一〕を徴し、次いで一六七四年ライガルに於て獨立君主となれり。加ふるに一六八〇年より一六八一年に至るの間に、アウラングゼブの子アクバルは、其父に背きてマールタ軍に結びぬ。是に於てアウラングゼブはデッカ親征のために、其壯麗なる北印度の宮殿を棄つる

か、若しくは寧ろ其平生懷抱せる南印度征服の壯圖を棄つるか、二者其一を撰ばざるべからざることを感じ、乃ち遂に意を決して前古未曾有の大遠征軍を起し、自ら是を統率して一六八三年デッカに着し、是より二十四年を南印度の戰場に送れり。ゴルコンダ及びビシヤブルは激烈なる戦争の後竟に陥落し、一六八八年モグル帝國の併呑する所となれり。

然れどもデッカンのイスラム教五王國の征服は、單にマールタ人の發展のために利益を残せしのみ、實にマールタ人のイスラム教國攻撃はアウラングゼブの併呑を誘へるなり。アウラングゼブは其治世の残り二十年間（一六八八年—一七〇七年）マールタ人の隆々たる權力を挫かんがために戦へり。最切のマールタ大首領シヴジは一六七四年を以て自ら王と稱せしが、一六八〇年に至りて死しぬ。アウラングゼブは一六八九年シヴジの嗣子サムバデを虜にして是を死に處し、其城寨と共に首府を陥れしかば、一七〇一年にはマールタ人の勢力殆ど亡びしが如し。然れども其後マールタ人は再び有力なる戰國國民として勃興し、一七〇五年には其城寨を恢復せしが、此間アウラングゼブは多年に亘りて成功少き戦争のために

其健康を害し、其財を糜し、其兵を失へり。アウラングゼブの兵士は給與の全額を得ざるを以て不平を抱きしに、老ひて性急となれるアウラングゼブは、不平者に告ぐるに、軍役に服するを欲せざるものは去るべきを以てし、また其財政を緩和せんがために其騎兵の一部を解散せり。

此間にマラータ人はアウラングゼブの陣營に迫りしも、アウラングゼブの大軍隊は二十五年の間に、其活動力を失ひ、敏活ならざるを以て、マラータ人に對抗する能はず、而してアウラングゼブ若し輕快なる一小隊を遣して、其陣營の周圍を掠奪するマラータ人を撃たしむれば、マラータ人は逆て撃ちて是を破り、若し大軍を率ゐて是に向へば、忽ち遁走して影を留めず、加ふるにアウラングゼブの軍隊は、既に其良友としてアウラングゼブの健康を購ひし敵と共に酒宴を事とするものあるに至れり。

かくてアウラングゼブの大軍隊は亂れて復た戦ふべからず、爲めに一七〇六年マラータ人と和を講ずるの已むなきに至り、アウラングゼブはモグル領諸州を以てマラータ人の進貢國たらしめんとまで決心せしが、マラータ諸酋長の傲慢なる

遂に條約をして不成立に終らしめぬ。是に於てアウラングゼブは、一七〇六年アムドナガルに避難し、翌一七〇七年二月竟に死せり。アウラングゼブは、其諸子に疑ひ、其會て父に加へしが如き殘酷なる運命の頭上に墮ちきたるべきを恐れ、其最後の數日間、獨り一室に籠りて家族の是に入ることを許さざりき。其將さに死せんとするや、恐怖と悔恨とを混じたる痛しき告別をなして曰く、吾が波に吾が船を浮べぬ。來るべきものは何ぞ。去らば、去らば、去らばと。

南印度(デカン)の征服はアウラングゼブ畢生の目的なりしが、其間に印度の北部に於ては大なる事件起れり。アウラングゼブの將ミル・ジウムラは、兵を率ゐて遠く印度の極東洲アッサムに進みしが、一六六七年雨期に際して、其軍隊は瘴氣を帯べる濕地に疲弊し、加ふるに其糧道を絶たれ、地理及び氣候に熟せる土民の圍む所となれり。ミル・ジウムラは、其軍隊の主要なるものを救ふことを得しも、精力の消耗と憤恨とのためにベンガル三角州のダッカ(Dacca)に達するに至らずして死せり。印度の西北に於てもまたアウラングゼブは、其勢力を失墜しぬ。アウラングゼブの時代にシク(Sikh)派は漸次其勢力を増せしも、其嗣子の世に至るまで、モグル帝

國よりブンシアブを奪ふの運動を開始せざりき。アウラングゼブの執拗なる性質は北印度に於て印度臣民の反對を招けり。アウラングゼブは非イスラム教徒に課する人頭税を復し、一六七七年、印度教徒を其管轄地以外に逐ひ、また其父の信任せし印度教徒たる將軍シアスワント・シンゲ (Jaswant Singh) の寡婦と遺子とを虐待せり。北印度に於ける印度教徒の或一派は、一六七六年アウラングゼブの迫害に堪へずして叛亂を起し、また一六七七年ラジプト諸州は聯合してモグル軍に抗せり。アウラングゼブは多年是等の叛徒と戦争をなせしが、其間時にはラジプタナを劫掠し、時には機智及び剛毅を以て僅かに其危急を免れぬ。一六八〇年アウラングゼブの子アクバルは叛を謀り、其下に屬せしモグル軍を率ゐてラジプトに投ぜり。モグル帝國の永久ラジプトと相絶つに至りしは實に此年より始まりしものにして、從來アクバルの勢力の根源たりし印度騎兵は、アウラングゼブ及び其相續者にとりて潰敗の元質となれり。アウラングゼブはシアイブル、ジョドプル (Jodhpur) 及びウダイプルのラジプト諸國に掠奪殺戮を逞うせしかば、ラジプト人大に怒りて、マルワのイスラム教諸州を掠奪し、其禮拜堂を破壊し、其僧侶(ムルラ)を

凌辱し、其コトラン經を燒きて以て是に報ひぬ。一六八一年アウラングゼブはデカンに其大軍隊を進めんがためにラジプトと和を講ぜしが、アクバルの印度懐柔策及びイスラム教人民と印度教人民とを合せたる一大帝國創始の政策は、アウラングゼブに至りて失敗に歸し終れり。

アウラングゼブの歳入はアッサムを除く北印度の全部及び南印度の大部より徵收する所にして、其印度諸州は假令中央政府に屬すること直接ならざりしと雖も、其面積殆ど現イギリス領と比敵すべかりき。是等諸州より收むるアウラングゼブの純土地歳入高は、三億圓より三億八千萬圓の間を上下せしが故に、其購買力を以てすれば少くとも現イギリス領印度の土地歳入の三倍にあたるものとす。然れども三億圓の要求は、アウラングゼブが南方戦争のためにデリーを出發する前に其權力最も振ひし時に於てすら、年々充分に收め得たりしかは疑はし。デカンに二十五年を送りし後、其治世の末年には僅かに三億圓の收入ありしのみ。租税の強迫は遂に人民の逃亡と叛亂とを惹起し、一二の州は公然兵を擧げてアウラングゼブに抗せり。當時土地歳入の標準高は三億四千五百五萬八千九百圓なりしが、此

要求は次の半世紀間、名のみ中央租税局の記録に残れり。アフガンの侵略者アハド・シャー・ドゥラニ(Ahmad Shah Durrani)が一七六一年デリーに入りしとき、大蔵官吏はモグル帝國の土地歳入三億四千五百六千四百圓の報告を是に贈れり。アウラングゼブが南印度合併の後、最後の凶變の前、其最高土地歳入は三億八千五百萬圓にして、此内殆ど三億八千萬圓は印度諸洲より收め、殘餘はカシミール及びカブールより徴するものとす。故にアウラングゼブの世に於けるモグル帝國の總歳入は、一六九五年に入億圓、一六九七年に七億七千五百萬圓なりき。後一八八三年に至る十年間に、イギリス領印度より徴せし租税總額は、支那に輸入せる阿片の税を除きて、平均三億八千萬圓なりしを見て、其差異を知るべし。

アウラングゼブは模範的イスラム教帝王の生涯を送らんと努めぬ。其公生涯は雄麗にして、其私生涯は素朴事務に當りて敏活に、宗教的儀式に精しく、また文才に富み常に詩歌及び經典を誦せり。故に若し其父を廢せず、其兄弟を殺さず、其印度人民を壓せざらしめば、其生涯は金匱無缺と稱すを得しならん。然れども其宗教的固執は、信仰を同らせざるものを以て其敵となし、また其血族殺戮の結果は遂

に其全政府を外國人に委ねざるべからしめぬ。印度人は決してアウラングゼブを忘れず、シク、ラジプト及びマラータの諸族は、其死後直に帝國の包圍攻撃に従へり。アウラングゼブのイスラム教諸將及び諸副王は、其主君の存命中能く是がために盡せしも、其一たび死するや、却て其遺子の相續物を篡奪せり。

第三十七章 モグル帝國の末路

アウラングゼブに繼げる諸帝王は、有力なる軍人若しくは政治家の傀儡なりき。是等の軍人若しくは政治家は、其力によりて帝王を擁立し、常に是を抑制し、若し是を殺すの便利なるを見たる時は、直に是を斷行せり。故に爾後モグル帝國の歴史は單純なる破壊の記録のみ。其衰頹及び滅亡に於ける重要事件は、後に述ぶべし。モグル諸帝は一時デリーに在りて印度を支配せしが、アウラングゼブの繼承者六人の内、其二人は僭越なる將軍ズル・フイカル・ハン(Zul-ikar Khan)の抑制の下にあり、他の四人は國王製造者の稱號を得たるサイイド等の立つる所なりき。

一七二〇年よりモグル帝國の崩壞著しきに至れり。ニザム・ウルムルク(Nizam)

ハムビヤ(Deccan)の知事はデリー領より南印度の大部を割き一七二〇年—一七四八年「オウド」の知事は其管轄地たるオウドのナワブワシム(Nawab Wazir)となりて其王朝を開けり一七三二年—一七四三年。此知事はもとヘルシアの商賈にして、後にモグル帝國のワシム(Wazir)「大宰相」となりしものとす。

此時帝國の印度臣民は其獨立を唱道せり。是より先きブンシアアのシク教徒は、デリー諸帝の壓制に堪へずして叛亂を企て、無残に打破られしが一七一〇年—一七一六年「モグル軍の行ひし殘忍は深くシク派の腦裡に残り、爲めにシク派は一八五七年、イギリス人に與みして其舊怨を報ひんとしたりき。而してモグル軍のシク派を破るや、其首領バンダ(Banda)に深紅色の頭巾を被らしめ、金糸の衣服を着けしめて戲に帝王に擬し、是を鐵檻に幽して其目前に其子を殺し、死者の心臓を其顔に抛ち、次いで熱せる釘拔を以てバンダを寸裂し、更に狂犬の如くシク人を撲殺しぬ(一七一六年)」。ラジプタナの印度諸侯伯は之に比すれば幸運にして、シオドブルのアジト・シング(Ajit Singh)先づ獨立を唱へ、ラジプタナは一七二五年に實際モグル帝國との關係を絶てり。マールタ人は南印度にチャット(Chatt)「劫掠を免るるた

めに拂ふ金穀を迫り、ギンドヤ山脈を踰えて北にいて、デリー諸帝よりマルワ(一七四三年)及びオリッサ(一七五一年)の讓與を得、また其承認を得てベンガルより貢を徵せり(一七五一年)。

以上述べたるが如く、モグル帝國のイスラム教知事及び印度臣民は、デリーの羈絆を脱して獨立せしが、此間に新たなる外敵印度にきたれり。是れ即ち一は中央亞細亞より、他は海より來りしものとす。一七三九年ヘルシア王ナデル・シア(Nadir Shah)は其軍を率ゐて印度に下り、デリーの市街に殺戮を行ひ、劫掠五十八日の後、三億二千萬圓に價する分捕品を獲て西北の山路より其國にかへれり。次いでアフガニスタンより數回の侵畧あり、アフガン人は其首領アーマド・シア(Ahmad Shah)の下に、六たび山を踰えて印度に侵入し、掠奪殺戮を肆にしたる後、其分捕品を輸して國にかへれり。一七三八年デリーにてはモグル朝最後のアフガン領カフルを失ひ、其後一七五二年には、アフガンの首領アーマド・シア(Ahmad Shah)にブンシアアを讓りぬ。かくてアフガン人の印度侵畧は前後六回に及びしが、此間デリー及び北印度の被ふりし損害に關する物語は、其殘酷悲慘聽くものをして戰慄せしむ。當時デリー

にては抵抗の力なく、城門を開きて其の侵襲者を迎ふること賓客を遇するが如く
なりしも、アフガン軍隊はデリーの人民に、六週間種々の大凌辱を加へたりといふ。
此間にアフガン騎兵は地方を劫掠し、主もなる村落の家屋を焚き、其人民を斬り、ま
た是を殺すことデリーに於けると異らざりき。而してアフガン騎兵は殊に喜び
て印度教徒の聖場を掠め、また防戦の用意なき無辜の人民を屠れり。

印度諸州が西北より來りし侵襲者のために被ふりたる災難は、一例を以て是を
示すに足る。二万五千のアフガン騎兵隊は、平和なる印度教の巡拜者が其の尊崇
する神に祈らんがために來集せし祭日に、ムツトラの聖市に闖入せり。當時印度
に在りしイエズイット (Jesuit) 僧チーフエンタル (Tiefenthaler) のいふ所によれば、是
等の騎兵隊は人家に火を放ちて其住民を焚き、刀槍を以て其生存者を殺戮し、其年
少男女を虜として拉し去り、また殿堂に於て印度教の神獸牝牛を殺し、其血を偶像
及び鋪石に塗りたりと。アフガニスタンと印度との國境地方の人家稠密なりし
地にして、此時より寂莫として人影を見ざるに至れるもの多し。かくて佛教隆盛
の時代に、ブンジアフ古首府の在所たりしグヅランワラ (Guzranwala) は、全然無人の

荒野と變じぬ。此地の現住民は比較的近代の移住者にして、今や百万の新住民あ
り。

是より先き南印度に於けるイギリス、フランスの戦争中、カルナチクに於けるデ
リーの權力全く滅びぬ (一七四八年—一七六一年)。ベンガル、ベハル及びオリッサは、
一七六五年モグル帝の承認によりてイギリスの管轄地となれり。かくてイギリ
スはモグル帝の承認を得て齶腴なる是等の三州を得しが、而かもデリーの王權は
實際已にパニバト戦争に亡びたるものといふて可なり。パニバト戦争は一七六
一年アフガンの侵略者アーマドシアーとマラータ人との間に起りしものにして、
其戰場はパニバトの平原なりき。パニバトの平原は即ちバル及びアクバルの
兵を督して戦ひ、是によりて以て二回まで全印度の統治權を得たる記憶すべき地
なり。而してマームドシアーはパニバトの戦争にマラータ人を破りしが、而かも
アフガン人は遂に印度を支配すること能はざりき。此後の印度は無政府時代と
なりしが、此間イギリス人は能く忍びて四分五裂のモグル帝國に新權力を創立せ
り。當時名のみモグル諸帝は依然デリーに在りて宮闕に統治し、アクバル二世

若しくはアラムキル二世と云ふが如き威嚴ある稱號を有したるも、其の權力は宮殿以外に及ばず、此間マールタ人、シク人及びイギリス人は、干戈によりて印度の主權を争へり。而してデリーのモグル朝最後の王は、一八五七年の亂に一時叛徒に加はりしが、一八六二年國事犯としてイギリス領ブルマの首府ラングーンに死しぬ。

アグバルは印度諸種族懐柔政策により、印度に其大帝國を建設しぬ。是に於てアグバルは土着軍民より成る有力の團隊を起し、是によりて中央亞細亞より來る新イスラム教侵略者を拒ぎ、併せて諸州のイスラム教諸侯伯を服せり。然るにアウラングゼブ及び其後嗣は此政策を棄てしかば、新侵入軍は疾かにアフガニスタンより南下し、諸州の知事は自立して獨立君主となり、曩にアグバルを助けてモグル帝國を創建せし印度諸種族は、却てモグル帝國破壊の主なる行動者となれり。かくてイギリス人の印度征服前モグル帝國は已に崩壊せるものにして、イギリス人のなせし最終最難の戦争は、デリー王若しくは是に叛せしイスラム教諸副王に對するものにあらず、却てマールタ人及びシク人に對するものとす。イスラム

教諸侯伯はベンガル、カルナチク及びミソルに於てイギリス人に抗せざるにあらずりしも、而かも其印度征服に抗して最も長く戦ひたるものは印度人なり。イギリス人がマールタ人との間になせし最後の戦争は一八一八年にして、シク聯合を滅ぼしたるは一八四九年の事なりとす。

左の略表を見れば最後のモグル大帝と稱すべきアウラングゼブの死後、其帝國の崩壊に於ける重要事件を知るに足るべし。

モグル帝國の衰亡略年表 (一七〇七—一八六二年)

- 一七〇七 アウラングゼブの二子ムアジム(Muzim)及びアラム(Alam)帝位を争ひ、ムアジム竟に勝ちて即位し、バハヅル・シアー(Bahadur Shah)と稱す。然れども其軍務大臣ヅル・フィカル・ハン實權を執る。カムバックシ(Kambakshi)公子叛し、戦敗れて死す。

一七一〇 シク人を伐つ。

- 一七一二 バハヅル・シアー死して其長子シアハンダル・シアー(Jahan dar Shah)繼ぎ、ヅル・フィカル・ハン權を専らにす。シアハンダル・シアーの甥フア

ルクシイヤル(Farukhsiyar)叛し、皇帝及び其ワシル(宰相)を殺す。

一七一三 フアルクシイヤル即位し、サイド(Sayid)の國王製造者フサインアリ(Husain Ali)及びアンヅルラ(Abdulla)實權を執る。

一七一六 シク人モグル領を侵す。モグル軍撃ちて是れを破り、復讐殘忍を極む。

一七一九 フサインアリ及びアンヅルラフアルクシイヤルを廢して是れを殺し、三幼帝を立つ。第一帝及び第二帝は數ヶ月にして死し、第三帝ムハムマド・シアー(Muhammad Shah)は一七一九年九月始めて統治す。

一七二〇 サイドの國王製造者亡ぶ。

一七二〇—一七四八 ニザム・ウルムルク(南印度の知事)ハイダラバドに獨立す。

一七三二—一七四三 大宰相を兼ねたるオウドの知事、獨立王となる。

一七三五—一七五一 モグル帝國の權力地に墮ち、叛亂諸方に起る。ヘルシアのナデル・シアー印度を侵す(一七三九年)。アーマド・シアー・ヅラニ始めて印度にきたる(一七四七年)。マラータ人マルワ(一七四三年)及び

南方オリッサ(一七五一年)を得、ベンガルより貢税を徵す(一七五一年)。

一七四八—一七五〇 ムハムマド・シアーの子アーマド・シアー位に即ぐ。ロヒルラ(Rohilla)オウドに騒亂を起し、モグル軍敗る。

一七五一 モグル軍マラータ人の援を得てロヒルラの騒亂を鎮む。

一七五一—一七五二 アーマド・シアー・ヅラニ再び印度を侵し、ブンシアブを割取す。

一七五四 モグル帝アーマド・シアー廢せられてアラムギル二世位に即ぐ。

一七五六 アーマド・シアー・ヅラニ三たび印度を侵し、デリーを掠む。

一七五九 アーマド・シアー・ヅラニ四たび印度を侵す。アラムギル二世其宰相ガジ・ウッヂン(Ghazi-ud-din)のために殺さる。マラータ人北印度を征服し、デリーを陥る。

一七六一—一八〇五 マラータ人バニバトにアフガン人と戦ひて敗る(一七六一年)。アラムギル二世其宰相の殺す所となりてシアー・アラム二世位に即ぎ、イギリスより恩給を得て一七七一年までアルラハバドに

寓す。マラータ人デリー領及びモグル帝領の實際主権者となる。モグル帝明を失ひて叛徒のために幽せられ、マラータ人の救ふ所となる。然れども一八〇三年レーク(Lake)卿のマラータ人を挫くに至るまで其囚人たりき。

一八〇六一一八三七 アクバル二世イギリスの保護を得て位に即く。然れども實権を有せず。

一八三七一一八六二 第十七代のモグル帝ムハムマド・バハドルシャー(Muhammad Bahadur Sháh)位に即く。一八五七年の亂に與みしてラングーンに幽せられ、其の後一八六二年に死す。モグル王統亡ぶ。

第三十八章 マラータの興廢(一六五〇—一八一八)

一六三四年の頃マラータの一軍人シアリジ・ボンストラ(Baji Bonslá)南印度に始めて顯著なる行動をなし、頻りにイスラム教の獨立國アーマドナガル及びビジャプルに與みしてモグル人と戦ひ、其死するに及びて軍隊的采邑と家臣とを其子シ

グジ一六二七年に生るに遺せしかば、シグジ乃ちデッカンの印度諸部族を集めて一國民を形成せり。而して是等の國民は北部より來るモグル軍と南部のイスラム教獨立諸王國とに抗したるものとす。故に一六五〇年以來、デッカンは三大權力の鼎立するものありき。即ち第一、侵略を事とするデリー帝國の軍隊、第二、南印度のイスラム教獨立國アーマドナガル及びビジャプルの軍勢、第三、結局マラータ聯邦となりし地方印度諸部族の軍隊的組織是なり。

シアリジアハン及びアウラングゼブは南印度のイスラム教獨立諸王國を征服するの目的を以て八十年間戦争せしが、此間(一六二七年—一七〇七年)印度黨は時にはデリー諸帝のために、時にはイスラム教獨立諸王國のために戦ひ、常に重要な地位を維持せり。北部のモグル軍及び南部のイスラム教獨立諸王國は、互に攻伐せし結果漸次其兵を失ひ、爲めに外國人を以て補充せざるべからざるに至れり。然るに印度黨「マラータ聯邦」はマハラシトラ(中央印度のペラルス(Pelaris)よりポムペイ領の南隣に至る)といへる廣漠なる地方より、其盡くるなき土兵を徵することを得しかば、デリーの諸將及びデッカンのイスラム教獨立諸王國は、共に其歡心を失

はざるに力めぬ。デッカンのイスラム教獨立諸王國は、實にマールタ人の援助によりて多年モグル軍に抗せしが、モグル軍の撃退せらるるや否や、マールタ人は驕てイスラム教獨立諸王國を脅せり。是に於いてデリーの諸將は、却てマールタ人と同盟してイスラム教諸國を征服することを得たりき。

マールタの大首領シヴジは其地位に伴ふ勢力を察し、叛逆殺戮及び苦戦によりて、マールタ人のために印度の實際的最上權を獲得し、また西の方、ガトに殆ど難攻不落の山寨を築き、以て其發展の根據となせり。シヴジの軍隊は逞しき馬に跨れる鎗兵より成る、而して是等の鎗兵は南印度に土地を有する農民にして、其農業上の期節に應じて解散若しくは召集せられ、播種期と收穫期とを除きては常に從軍し得るものとす。故にシヴジは常備軍の費用を要せずして限なき兵士を統率することを得、是を以て其敵を破り、貢税を徴し、若しくは和議を結び、また其分捕品の一部をば部下の兵士に分ち、其大部は山寨に運びかへれり。一六五九年シヴジは兵を伏せて、イスラム教獨立王國ビシアブルの將を誘ひて是を刺し、また其軍隊を殲滅せり。其後一六六二年遠くボムベイ領の北方に進軍し、スラト(Surat)市を劫掠

せり。一六六四年シヴジは王ラシア號を稱し、其名を附したる通貨を鑄造し、翌一六六五年モグル軍を助けてビシアブルのイスラム教獨立王國を撃ちぬ。一六六六年シヴジは勝はれてデリーを訪ひしが、アウラングゼブは是を遇すること頗る冷淡に、且つ是に檢束を加へしかば、乃ち南部に遁れて叛旗を翻せり。一六七四年には盛典を擧げてライガルに即位し、黄金を以て其體量を量り、是を其婆羅門に分てり。一六七六年には遠く其軍勢をカルナチクに送りしが、一六八〇年竟に死しぬ。

アウラングゼブのためにいへば、當時新たに勃興せるマールタ人の權力を挫き、然る後デッカンのイスラム教獨立諸王に對するを以て策の得たるものとすべし。實に此時若し大政治家ありしならんには、南北兩イスラム教徒間の紛争を止め、其全勢力を合せてデッカンの印度聯合軍に當りしならん。然れども惜いかな、アウラングゼブは南印度のイスラム教諸王國をデリーに併するを以て畢生の目的とし、其計畫を進めて其軍隊を失ひ、遂に死後モグル帝國をしてマールタ軍の一撃の下に脆くも崩壊するに至らしめぬ。

シヴジの子サムバジは一六八〇年を以て位に即き、爾後十年間統治し、印度西南海岸のポルトガル植民地及びモグル帝國の軍隊と戦へり。一六八九年アウラングゼブはサムバジを擒にし、熱鐵を以て其目を盲にし、其舌を切り、其首を刎ねぬ。サムバジの子サフ(Saf)時に六歳、また捕れてアウラングゼブの死するまで囚人となりしが、一七〇七年デリーの臣たることを誓ひ、釋されて故國にかへれり。然れどもマールタ人の一半は此時已にサフを去りて其勢復た昔日の如くなるを得ず。是に於てサフは其生涯を後宮に送り、其婆羅門宰相バラジ・ビシワナト(Balaji Vishwanath)といへるものベシワ(Peshwa)の稱號を以て國政を専らにせり。此後ベシワ(大宰相)の職は世襲となりて其權力遙かにマールタ諸王を凌ぎ、シヴジの王族は纔かにサタラ(Satara)及びコロアプル(Kolhapur)の小王國を有するに過ぎざるに至れり。サタラは其後直接の相續者なきがために、一八四九年イギリスの有に歸し、コロアプルはイギリスの好意によりて尙ほ其命脈を維持し、現にイギリス管轄の下にシヴジ王統の代表者是を統治せり。

此間ベシワはマールタ聯邦をプーナ(Poona)に起せり。一七一八年第一のベシ

ワ、バラジは、サイイド國王製造者を援けんため軍をデリーに進め、其後一七二〇年デカン歳入の四分一「チアウト」を徴するの權利をデリー帝より得たり。マールタ人はまたプーナ及びサタラの周圍に於ける南方諸國に其主權を確立しぬ。第二のベシワ、バジラオ(Baji Rao)一七二一年—一七四〇年は、デリー帝より得たるチアウトに關する許可を改め、デカンにマールタ人の主權を行ふこととせり。加之一七三六年にはモグル帝國よりマルワ州并びにナルパダ(Narpat)よりチアムバル(Chamba)に至るギンドヤ西北の國土を奪ひ、一七三九年にはポルトガル人よりバセイン(Bassein)を略せり。其後一七四三年デリー帝は竟にマルワをマールタ人に割讓しぬ。

第三のベシワ、バラジ・バジラオ(Balaji Baji Rao)は一七四〇年を以て其職を継ぎ、マールタ人の權威をモグル帝國の中心に及せり。當時のデカンは單に北部及び東部に至るマールタ遠征軍の出發點に過ぎざりしのみ。バラジ・バジラオはハイダラバドのイスラム教知事「ニザム」の出費によりて二回の戦争を試みたる後、デカンに其主權を振ひき。是に至てマールタ權方の中心點はボムベイのプーナと中央

諸州のナグプル (Nagpur) とに移れり。一七四一年翌一七四二年に至り、ボンズラ (Bhonsla) と呼ぶナグプル派のマーラタ將は下ベンガルを掃蕩し、ムルシバド (Murshidabad) のイスラム教市府の郭外を劫掠せしが、下ベンガルの副王アリウルホッセン (Ali-Vardi Khan) の破る所となり、オリッサを経て遁走せり。今日存する「マーラタの旗」カッタを繞る半圓形の旗は、當時下ベンガルのマーラタ人に對する恐惶如何に甚しかりしかを示すものとす。翌一七四三年ナグプル派の首領ラグジ・ボンズラ (Raghaji Bhonsla) は自ら兵を率ゐて下ベンガルに侵入せり。是よりブーナのマーラタ人とナグブルのマーラタ人との間に土地の争起り、膏腴なる下ガンガ沿岸の土地はボンズラに掠奪せられき。一七五一年ボンズラは下ベンガルの副王アリウルドより、オリッサの割譲と下ベンガルよりチアウトを徵するの許可とを得たり。北印度にてはブーナのマーラタ人遠くブンジャブに侵入し、疊にデリーより此地を奪ひしアフガンのアーマド・シャー・ゾラニの怒を招けり。而して一七六一年のパンパト戦争にマーラタ人がアフガンのイスラム教勢と、當時なほ名のみムガル帝國に屬せし北方諸州の兵とのために破られしは前已に述べたるが如し。

第四のベシワ、マヅーラオ (Madhu Rao) は一七六一年の敗軍の際、マーラタの主權者となれり。印度聯合は内部の紛争と優勢なるアフガン勢とのために崩壊の運命に近づきたるが如し。是より先き一七四二年ブーナ派とナグプル派とはベンガムを争ひて互に相攻伐せり。一七六一年以前他の二派ホルカル (Holkar) 及びシンヂヤ (Sindhia) は、マルワの古モグル州及び當時インドル (Indore) ガリオル (Gwalior) の二國間に分たれしマルワ附近の諸地方に獨立せり。インドル派の首領ホルカルは、パンパト戦争のとき其形勢の危きを見るや、直に其戦線を棄てて敵に投ぜしかば、マーラタ軍は是がために全敗せり。ベシワは是に至てマーラタ五家のみ首領となりぬ。是等のマーラタ家(即ち小王朝)は各自其土地と軍隊とを有し、其首府はブーナ (Bundi) の首府「ナグプル」(ボンズラの首府) ガリオル (Gwalior) の首府「ベシワ」(ホルカルの首府) バロダ (Baroda) ガニクワル (Ganikwar) の首府にありき。第四のベシワ、マヅーラオは、ハイダラバド及びミソルのイスラム教諸侯伯并びにペラルに於けるボンズラ派のマーラタ人に抗して其地位を維持するに力ありしが、其弟ネラオ (Naryan Rao) は一七七二年第五のベシワとしての是を継ぎ、幾許もなかりしを暗

殺せられぬ。ベシワ家は南印度に於けるマールタの大権力なりしが、他の四家シンヂヤ、ホルカル、ナグブルのボンストラ及びバロダのガエクワルに關しては、左に其運命を略説すべし。

プーナに於けるベシワの権力は、其名のみの君主たるシワジの末裔の権力に及ぶるに及び、漸次衰ふるに至れり。ベシワは高貴なる波羅門の系統に在りしが、是に反して實際の戦闘者たるマールタ人は卑賤なる印度人より成れり。されば各地に獨立統治權を振ふに至れるマールタ將は、其名のみの首領ベシワよりも實權を有せしかど、種姓に於ては遠く是に及ばざりき。北部の二大家中ホルカルは牧畜者よりいで、シンヂヤは携履者より起りぬ。マールタ人はホルカル及びシンヂヤの下に一七六一年のバニバト戦争に敗れたる後、一時無事にありしが、此不幸なる戦争後十年間に、マールタ人はマルワ全土に其權力を植ゑ、西ベンジヤより東オウドに至るラジプト、シヤト(Jat)及びロヒルラ(Rohilla)諸州を侵略せんがために進めり。一七六一年—一七七一年。名のみのデリー帝シアーアラム(Shah Alam)は、一七六四年サーヘクトル・ムンロー(Sir Hector Munro)のために破られ、翌一七六五年竟に

イギリスの捕虜となりしが、其後一七七一年シアーアラムは遁れてマールタ人に投ぜり。是に於てシンヂヤ及ホルカルは名のみその皇帝をデリーに擁立し、一八〇三年より一八〇四年に至るの間、利用に便なる囚人として是を遇せしが、此年マールタ人はイギリスの第三マールタ戦争のために覆されぬ。シンヂヤ及びホルカルの兩王朝は、今日に至る迄最も膏腴なるマルワの地方に其統治權を維持せり。ペラル及び中央諸州のボンストラは東方を侵略して其有となせり。ボンストラはナグブルの根據より發展して、一七五一年下ベンガルの歳入四分の一(「チアウト」)を強取し、またオリッサの主權を強奪せり。一七五六年より一七六五年に亘り、イギリスが下ベンガルを其有となすに及び、ボンストラの侵略は始めて已みぬ。一八〇三年イギリスの一分隊はボンストラ派のマールタ人をオリッサより驅逐せり。其後一八一七年是等マールタ人の権力は最後のマールタ戦争のために亡びぬ。今日中央諸州を形成するマールタ人當時の根據地は、一八一七年より一八五三年に至るまで、イギリス公使の監督の下に治められたりき。一八五〇年最後のラグジ・ボンストラ(Raghuj Bhonsla)の死するや、直接其後を繼ぐべき男子なかりしかば、ナグブ

此のマーラタ諸領地今の中央諸州はイギリスの有に歸せり。ポムベイの西北海岸及びカチアワール(Kathiawar)半島に亘る全グジアラトに其權力を擴めぬ。世にガエクワル領の名を以て知らるゝ富裕なる土地は此くして形成せられたるものとす。一八一七年のマーラタ戦争以後ガエクワル家はイギリス公使の助を得てパロダを統治せしが其後一八七四年イギリスの駐劄公使を毒殺せんと企てたりと云ふの故を以て三名のヨロロバ人と三名の土人とより成る高等法院の審問を受け其位を廢せられぬ。然れどもイギリス政府は其國を併呑するを禁じガエクワル家創始者の末裔を微賤より擧げて其國王となせり。

シンヂヤ、ホルカル、ボンストラ及びガエクワルの四家が各自特殊なる經歷を有せしは前已に述べたるが如し。然るに此間ベシワ家の權力は家族の陰謀のために四分五裂せり。第六のベシワ、マヅーラオナラヤン(Madhu Rao Narayan)は其の父の死後に生れ、二十一歳を以て死せしが、此間其宰相ナオナルナキメ(Nana Farnavis)は實權を握れり。第五のベシワの伯父ラグバ(Raghoba)は父の死後に生れたるマヅーラオ

につきて異議を唱へ自らベシワたらんことを要求せしに、マヅーラオの後見者たるナナルナルナキメは是に對抗せんがためにフランス人に頼りしかば、ポムベイのイギリス人はラグバに黨せり。是等の同盟はサルバイ(Salbai)の平和條約(一七八二年)に局を結びし第一マーラタ戦争(一七七九年—一七八一年)を惹起せり。サルバイの平和條約に於てイギリスはポムベイ附近のサルセテ(Salsette)及びニレフアンタ(Nilephanta)島を得、ラグバは巨額の恩給を得てマヅーラオの主權確實となれり。然れどもマヅーラオは其後幾許ならず二十一歳にして自殺しぬ。

マヅーラオの死するや、其從兄弟バシラオ二世(Baji Rao II)最後のベシワとして一七九五年是に繼げり。時にホルカル家マーラタの牛耳を取り、ベシワは爲めにイギリスの保護を求めざるべからざるに至り、次いで一八〇二年のバッセイン條約によりて、バシラオは其地位を維持せんがためにイギリス兵を其領内に入るとを諾せり。然るに北部のマーラタ諸家は聯合して此條約を破棄せんとし、遂に第二マーラタ戦争(一八〇二年—一八〇四年)起りぬ。エルレスレー(Wellesley)將軍後のエルリントン(Wellington)公は南部に於てアサイエ(Assaye)及びマラタ(Maratha)の